

船の科学

2001

1

VOL.54 NO. 1

ベクツインシステム

安全航海が約束されます

啓風丸
KEI FU MARU



ベクツインラダー

気象庁殿 海洋気象観測船 三井造船(株)千葉事業所建造

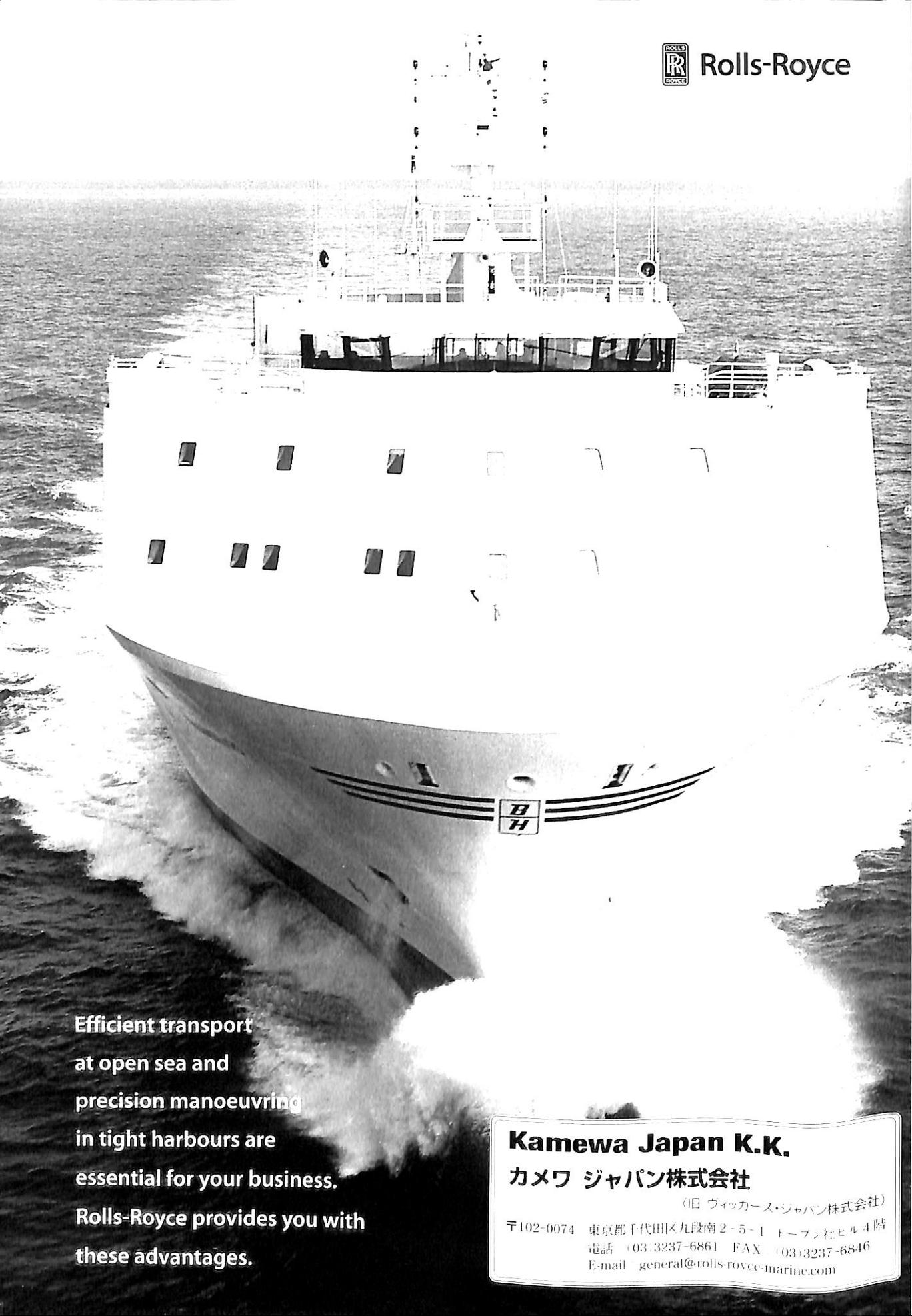
JAPAN
HAMWORTHY

ジャパン・ハムワージ株式会社
Japan Hamworthy & Co., Ltd.

〒536-0014 大阪市城東区鴫野西1丁目15番1号 おもだかビル
TEL 06-6962-8877 FAX 06-6962-8899



Rolls-Royce



**Efficient transport
at open sea and
precision manoeuvring
in tight harbours are
essential for your business.
Rolls-Royce provides you with
these advantages.**

**Kamewa Japan K.K.
カメワ ジャパン株式会社**

(旧 ウィッカース・ジャパン株式会社)
〒102-0074 東京都千代田区九段南2-5-1 トーラン社ビル4階
電話 (03)3237-6861 FAX (03)3237-6846
E-mail general@rolls-royce-marine.com

新時代が求める環境対応の新技術

Core Infusion

コア・インフュージョン

注入真空成型法

• Divinycell

• インフュージョン樹脂

• SP Systems

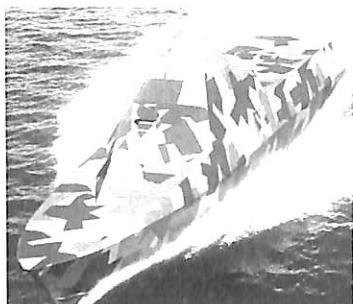
• Colan Fabric

ビニレステル
ポリエステル ISO & OSO
モールド用樹脂
120°C & 190°C
エポキシ SP プライム20

• CYMAX

• Tubulam

• ZOLTEK carbon



74 M のフリゲート艦からローイングボートなど、多くの分野に特殊樹脂を使用してのコア・インフュージョン技術で新製品が誕生しております。

日本総代理店 コンボジット屋

株式会社 ミヨシ・コーポレーション

〒467-0065 愛知県名古屋市瑞穂区松園町 1-84

Tel. 052-835-3351 Fax. 052-835-3354

E-Mail: miyoshi@sa.starcat.ne.jp

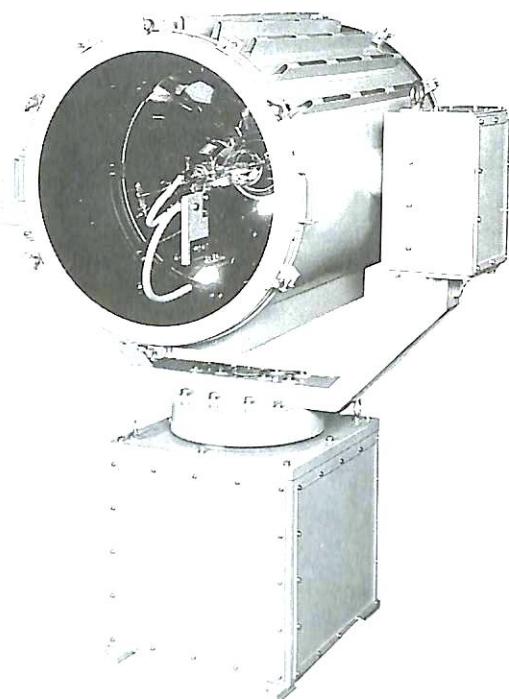
http://www2.starcat.ne.jp/~miyoshi



一軸動搖安定式キセノン探照灯

PSX-5060H23/6kW形

船体のピッティングをセンサーで感知し、灯体のふ仰角度を自動的に追従させることにより、常に目標を照射することができる探照灯。



(仕様)

探 照 灯	操 作 方 式	電動リモコン
	反 射 鏡 外 径	φ 500mm
	適 合 ランプ	KXL-6000E
	形 式	6000W
	容 量	
	最 大 光 柱 光 度	180x10 cd
	光 柱 角	約2
	ふ 角	30
	仰 角	30
	速 度	0~20／秒(可変) 動搖安定式(追従)
	旋 回 動 作	左右各 185
	速 度	0~20／秒(可変)
安 定 器	動 搖 追 従 精 度	±0.6 動搖角±15°、周期12秒
	耐 風 速	51.45m／秒以下
	質 量	273kg
	保 護 形 式	IP56
	形 式	KCX-1603E
	入 力 電 壓	AC220 440V
	相 数	3φ
	周 波 数	50.60Hz
規 格	入 力 電 流	39.5~19.7A
	入 力 電 力	15kVA
	功 率	77%
	保 護 形 式	IP11
	質 量	140kg
	標準塗装色	マンセル7.5BG7.2

種別としては他に1kW形、2kW形、3kW形、4kW形があります。
ご希望の方にカタログを進呈いたします



三信船舶電具株式会社

ISO9001認証

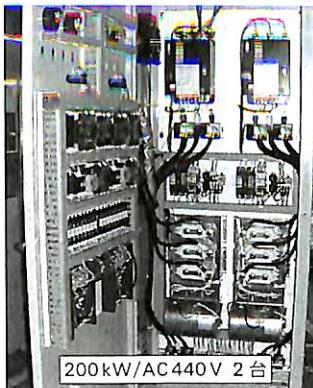
（JIS）日本工業規格表示許可工場



- 本 社 〒101-0047・東京都千代田区内神田1-16-8
TEL:(03)3295-1831(代表) FAX:(03) 5259-8041
- 足立工場 〒120-0012・東京都足立区青井1-13-11
TEL:(03)3848-2111(代表) FAX:(03) 3848-2116

Powertron

NASAの特許を採用したパワートロン始動器
パワートロンは、省エネ・低コスト・最小化を実現しました。



皆様のご支援のおかげでここまでまいりました。

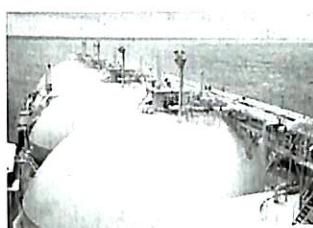
1987年2月第58勝榮の125 kW のサイドスラスターに装備されて以来14年間の期間と船舶関係1200、陸上関係2200セット以上の実績になりました。今後とも倍以上のご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

主なる使用実績

サイドスラスター、バラストポンプ、ファイアーポンプ、冷凍機、LNG ガーゴポンプ、ベルトコンベヤー、ケミカルカーゴポンプ、再液化コンプレッサー、圧送コンプレッサー、エアーコンプレッサー、ガスフリーファン、ドラフトファン、操舵機、ウインドラス 等

主なる陸用汎用実績

シールドマシン、オーガー、ベルトコンベヤー、消防単独制御盤、テカンター、エレベーター、空調機、混練機、破碎機、冷凍機、コーチェネ一般、排煙機 等



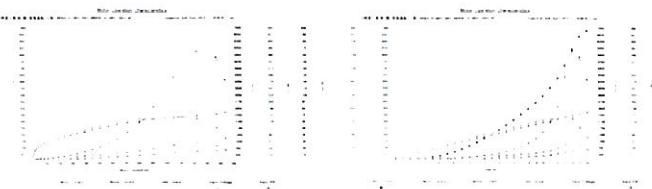
1998-9-22 CE マーキング取得
ノイズレスとして使用して頂いております。



シールドマシン

造船所実績（アイウエオ順・敬称略） 143社

IHI アムテック株、アイ、エイチ、アイ、クラフト株、伊赤松造船所、浅川造船株、伊厚岸内燃機製作所、株石井造船所、石川島播磨重工業株、石田造船建設株、株石原造船所、株井筒造船所、井上造船株、今治造船株、株今村造船所、岩城造船株、伊岩手造船所、株伊丹造船所、株宇野造船所、株浦共同造船所、大阪造船株、小門造船鉄工株、株小名浜造船所、尾道造船株、鹿児島ドック鉄工、勝浦船渠株、金川造船株、株カナサン、川崎重工業株、神原造船株、株神田造船所株、神原海洋開発株、関門造船株、南東工業株、神例造船株、株北日本造船所、株共栄造船所、旭洋造船株、釣路重工業株、株栗の浦ドック、磐固屋船渠株、興産産業株、伊小林造船所、株西大寺造船所、相模造船鉄工株、佐々木造船株、株サニヤスヒサノ明昌、黒崎造船鉄工所、三和ドック株、四国ドック株、株信貴造船所、下の江造船株、篠崎造船鉄工所、白浜造船株、株新来島ドック、株新笠山ドック、株新山本造船所株、株鈴木造船所、株田川造船株、住友重機工業株、瀬戸内クラフト株、株瀬戸田ドック、太陽造船株、株田子造船所、長栄造船株、千代田造船所、岡造船株、株東洋造船鉄工所、東亜鉄工株、東と造船株、内海造船株、中谷造船株、長崎造船株、伊永松造船所、株波方造船所、橋崎造船株、株新潟鉄工所、株新浜造船所、西造船株、日本鋼管株清水造船所、日本鋼管株鶴見造船所、根室造船株、兩館どく株、伯方造船株、株ハシゾウ、林兼船渠株、株横堀造船所、株東九州造船株、東日本造船株、日立造船株向島マリン、日立造船株神奈川工場、日立造船埠重工業株、株福岡造船、富士海事工業株、株藤新生造船所株、株藤原造船所、本田造船株、前畠造船鉄工株、前畠造船株、伊松浦造船鉄工、株松浦造船所、株三浦造船所、三井造船株、三菱重工業株長崎造船所、下関造船所、神戸造船所、株三保造船所、宮城県造船鉄工、三好造船株、株向島造船株、株向井造船所、株平兵衛造船所、矢野造船株、山中造船株、株ヤマニシ、株横浜ヨット、株吉田造船鉄工所、琉球造船鉄工株、若松造船株、渡辺造船株、株渡辺造船所、FONG KUO SHIPBUILDING、NIAN HO SHIPBUILDING、LIN SHEN SHIPBUILDING、JURONG SHIPYARD、IHI MARIN ENGINEERING PTE、CHINGU FU SHIPBUILDING、JON SHYN SHIPBUILDING、PRECISION CRAFT、聯和造船、有限公司、新潮造船（中国）、清津造船（北朝鲜）、三陽造船（股）（台湾）、CSBC、東海造船、大连造船、上海造船、烟台造船、新亞造船、京华造船、三星、大宇、現代、新港船廠



PTSim シュミレーションソフト

左記の図の様に電動機の始動時特性を運転前に確認する事が出来ます。
電動機の始動に関するコンサルタント及び設計・施工を行っております。

ECON
エコン株式会社

〒103-0012 東京都中央区日本橋堀留町 1-10-19

第三川端ビル 4 階

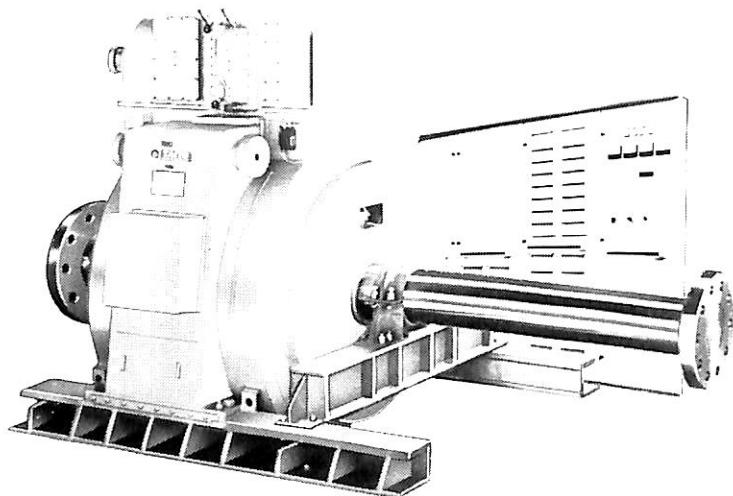
TEL 03-3669-2261 FAX 03-3669-2270

<http://www.buyers.ne.jp/econ/> メール econ@sight.ne.jp

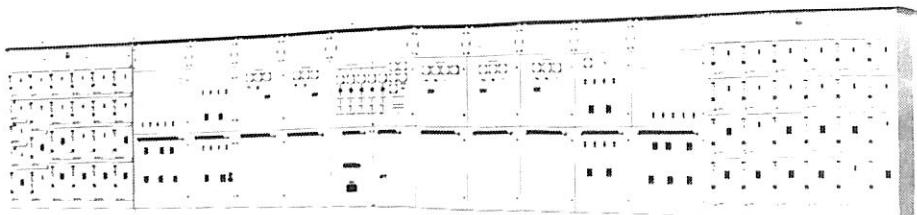
ながい経験と最新の技術



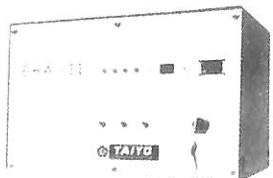
大洋の船舶用電気機器



サイリスターインバーター式軸発電装置



配電盤



発電装置制御用マイクロコンピュータ



大洋電機

株式
会社

本社 千代田区内神田4-16-8(三立社ビル)

電話 03-3293-3061(代表)

工場 岐阜・岐阜羽島・伊勢崎・群馬

営業所 下関・三原・大阪・札幌

海外 Jakarta・Pusan

船の科学

目 次

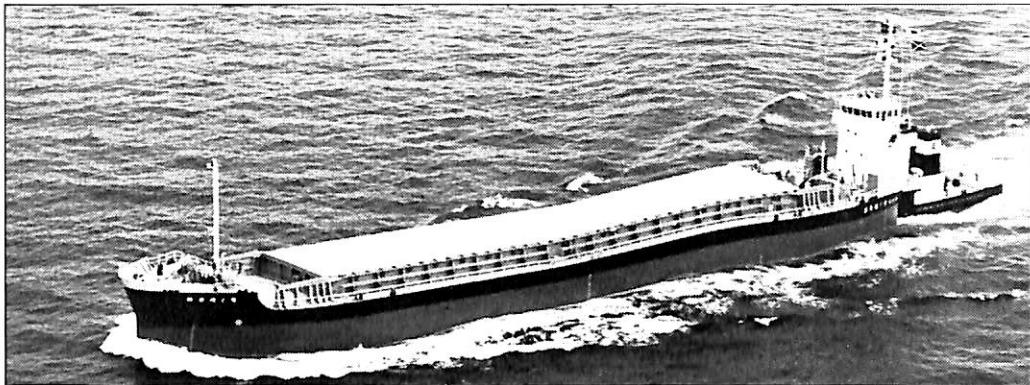
8	新造船紹介 (No.627)	
16	YANMAR インボード・フィッシングボート 「はやしお」DE31D	ヤンマーディーゼル
18	NISSANファミリーフィッシング・クルーザー Wing Fisher-26 O/B	日産マリーン
26	日本商船隊の懷古 No. 258 (国洋丸、櫻山丸、山藤丸)	山 田 早 苗
28	5本マストで優雅な世界最大の 帆船・帆走客船 "ROYAL CLIPPER"	府 川 義 辰
34	オランダ・アメリカラインの 最新鋭高級姉妹客船 "VOLENDAM"・"ZAANDAM"	府 川 義 辰
41	12月のニュース解説 (ニュース解説にみる海運造船 (3) 昭和34年~57年の主なニュース)	米 田 博
44	年頭所感	間 野 忠
●新造船紹介		
46	気象庁向け海洋気象観測船 "啓風丸" (2世) の概要	三井造船
55	2機2軸CCP装備・双尾双胴型 旅客船兼自動車航走船 "3号はやぶさ" の概要	函館どっく
62	ブルスピンドル・ウォータージェット搭載 高速艇 "シリウス" の開発について	石垣
●新開発技術		
72	ペクツイン・ラダーシステムを用いた新形式舶用交流電気推進システムの提案 —平成8年度および9年度(財)シップアンド・オーシャン財團補助研究開発	ジャパン・ハムワージ
●新機関紹介		
87	大型高性能高速機ディーゼル機関MTU8000シリーズ	ダイムラー・クライスラー日本
●小型艇の運動性能		
91	小型レジャーボートの直進性と傾き	日産マリーン
●IMOコーナー (第228回)		
102	第45回海洋環境保護委員会 (MEPC45) の結果について (2)	国土交通省
●ニュース		
96	水中ドッキング機能を持った自律型無人潜水機	川崎重工
●海外ニュース		
97	オーストラリア救命筏システム	Incat社
99	フィリピンの高等海事訓練サービス	Poseidon Simulation
	高速救命艇の進水回収装置 (浮ドック式)	Marine Safety Systems

FUNE-NO-KAGAKU

2001 No. 1 Vol. 54

- 8**...New ship photo & particulars (No. 627)
- 16**...Inboard fishing boat, "Hayashio" DE31DYanmar Diesel
- 18**...Fishing cruiser Wing Fisher-26 O/BNissan Marine
- 26**...Retrospect of domestic merchant fleet (No. 258)
(KOKUYOO-MARU, ROZAN-MARU, YAMAFUJI-MARU).....Sanae Yamada
- 28**..."Royal Clipper".
the world largest sailing passenger ship with 5 mastsYoshitatsu Fukawa
- 34**..."Volendam" · "Zaandam".
the newest high grade sister ships of Holland America Line ...Yoshitatsu Fukawa
-
- 41**...Summary & notes of events on December
(Shipping and shipbuilding in "Summary & notes of events" (3)) ...Hiroshi Yoneda
-
- 44**...New year reviewTadashi Mano
-
- **New ship report**
- 46**..."Keifu-Maru" (2nd).
marine meteorological observation ship for M.A.Mitsui M.E.
- 55**..."No.3 Hayabusa". passenger car ferry with twin engine.
twin CPP screw and twin hullHakodate D
- 62**...R&D of high speed boat "Sirius" installed with Pull spin type waterjetIshigaki
-
- **New technology report**
- 72**...Marine AC electric propulsion system with
Vectwin-rudder system-by Ship & Ocean subsidyJapan-Hamworthy
-
- **New engine report**
- 87**..."MTU 8000 series". large high performance high speed diesel engine
.....Daimler Chrysler-Japan
-
- **Technical comment**
- 91**...Capability of straight ahead and inclination of small leisure boat
.....Nissan Marine
-
- **IMO corner (No. 228)**
- 102**...Marine environment protection committee (MEPC) 45th session (2).....M.O.L, I.&T
-
- **News**
- 95**...Autonomous unmanned submarine with docking function in waterKawasaki H.I.
-
- **News abroad**
- 97**...Liferaft launching and onboard system of LSAIncav
- 99**...The higher marine training services in the PhilippinesPoseidon Simulation
...Launching and restoring system of fast rescue boatMarine Safety Systems

プッシャーバージには経験と信頼性の自動連結装置 アーティカップル



★抜群の耐航性
★あらゆる用途に
応じる多様な機種

★連結・切離し30秒
★指先一つで遠隔操作

東京都中央区日本橋小伝馬町9-10
(小伝馬町ビル7階)
電話番号 (03)3667-6633
F A X (03)3667-6925

タイセイ・エンジニアリング株式会社

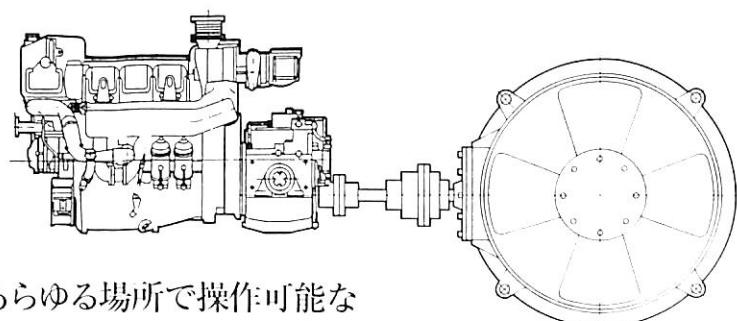
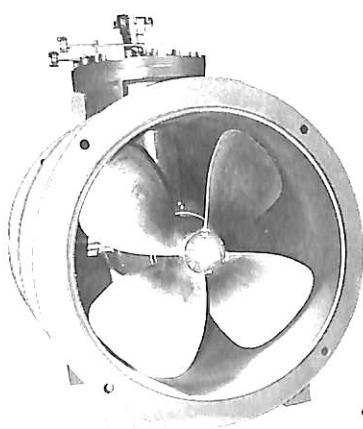
マスミ サイド スラスター

シンプルな構造の
固定ピッチ型スラスター

可変ピッチ型に代るインバーター制御による

電動機駆動 推力1-8 TON

エンジン駆動 推力1-8 TON

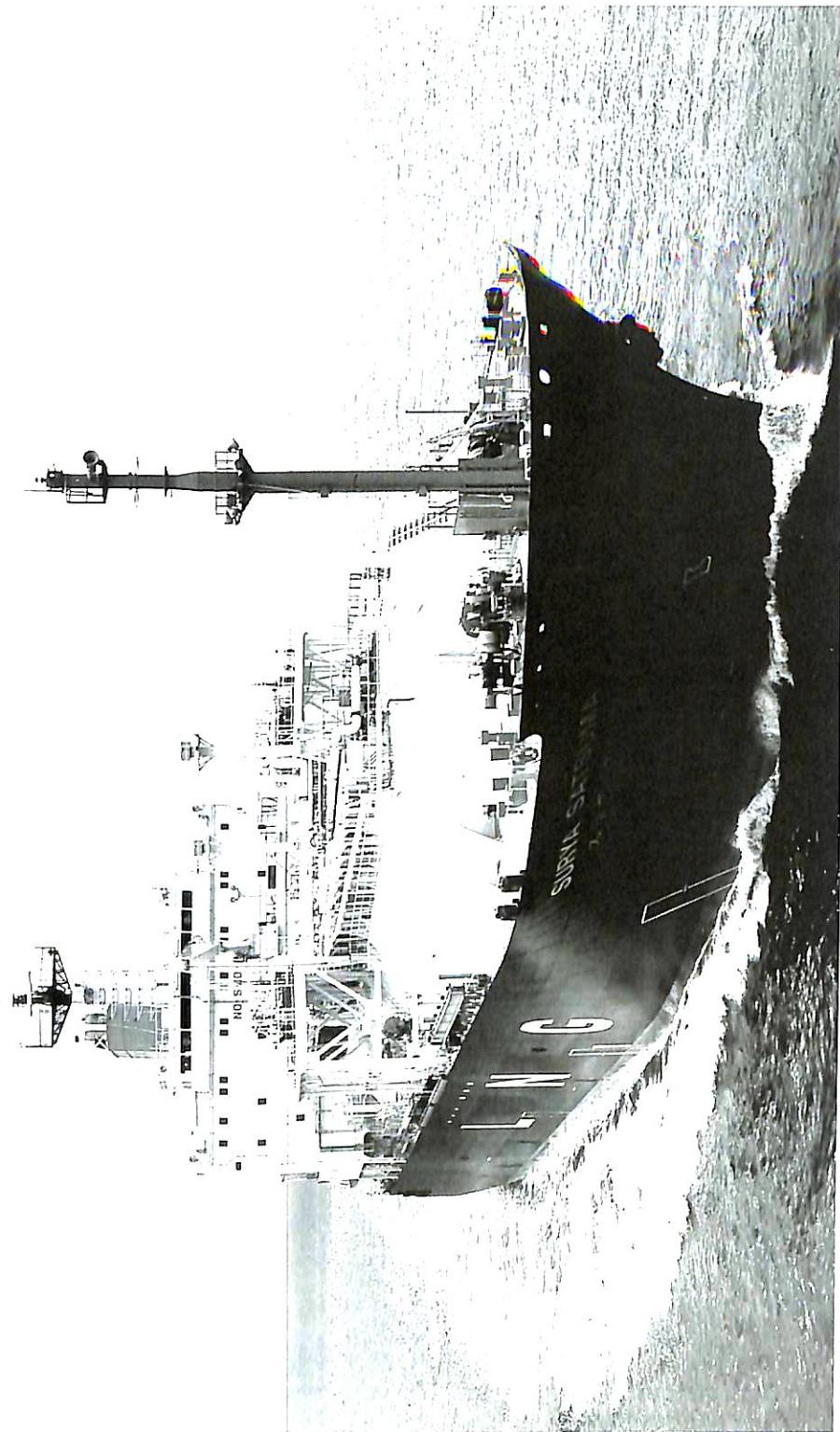


あらゆる場所で操作可能な

電子制御リモコン装置

株式会社マスミ内燃機工業所

本社・工場 〒104-0054 東京都中央区勝どき3丁目3番12号 TEL 03-3532-1651 FAX 03-3532-1658
清水営業所 〒424-0942 静岡県清水市入船町8番16号 TEL 0543-53-6178 FAX 0543-53-6170



GTTマークIII メンブレン型LNG運搬船
SURYA SATSUMA

船名 Matsu OSK Lines Nusantara Shipping
NKK (製作所) 三井造船 (34192番船)
全長 151.03m
船幅 113.50m
航高 8.50m
総トン数 20,017t
機関 6 柴油機 (愛島4タービンMSI2-2形)
主機間隔 11m
プロペラ 5翼 1軸
MHI HF インジекторB, C, 140%VHF電気炉
(満載航速) 16.50kn

起終港 99-2-16
航路 16,000m
積荷量 12,931t
クレーン 5t × 10m min × 1
燃費油槽 2,711m
出力 (連続最大) 7,796kW (133rpm)
発電機 (蒸タ) 1425.0kVA × 1, (デ) 162.0kVA × 2
航洋計器 GPS
船員定員 36名

規格 [00-10-24]
航深 7.06m
荷役ボンブ
燃料消費量 60.10 day

無縫鋼管

船名	BANDAISAN
所属	Majestic Oceanways Inc. (Panama)
建造年	1999年
船籍港	日本横浜
船種	油槽船
船長	330.00m
船幅	316.60m
吃水	119.282m
排水量	91,210t
航速	11.5m/s
航程	5,000nm
航向	115m ²
航向	燃科油槽
航向	出力 (連続最大)
航向	27,160kW (710rpm), 當用23,090kW (7010rpm)
航向	燃科消費量
航向	91.0t/day
航向	航程距離
航向	310m
航向	機関
航向	5翼1軸
航向	プロペラ
航向	無線装置
航向	射撃装置
航向	レーダー
航向	遠方警報
航向	NK・遠洋
航向	航線距離
航向	20,200t
航向	航速
航向	16.00km
航向	溝戦、構造航海
航向	17.73km
航向	航速
航向	30.7



船名	Burney International Corp. (Panama)	航速	28.8kn
製造会社	日本造船所	排水量	31,900t
全長	329.99m	吃水	9.186m
艦橋	152.39t	航速	19.186m
籠下ヶ数	2	航程	19.186m
載貨量	259,992t	航程	19.186m
5,000m	h × 140m × 3,	航程	19.186m
5,000m	2,750m h × 140m × 1	航程	19.186m
1機関	三菱 E-7 TECS51SH 形 (予) 機関 × 1	航程	19.186m
1翼 1軸	補助ギヤ 80,000kg h × 1.96MPa × 1	航程	19.186m
天井起重機	1,100kW × AC150V × 2, (JIS) (予)	航程	19.186m
國際MF尾灯	衝突予防装置 レーダ DGPS NAVTEX IBS	航程	19.186m
(満載航海)	16.2kn	航速	19.186m

輸出油槽船 タカスuzu (高鎔)

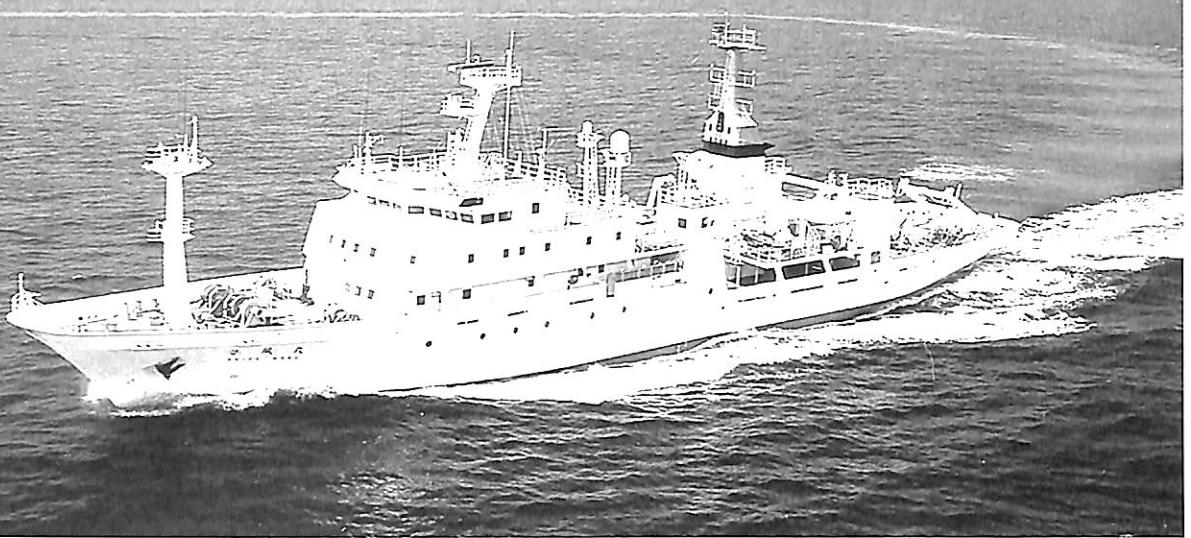


起工	99-9-22	進水	00-2-18
明船	60,000t	航程	28.80n
載貨量	259,992t	貨物油槽容積	325,185m ³
燃料油槽	6,213m ³	燃料消費量	88.5t day
1機関	三菱 E-7 TECS51SH 形 (予) 機関 × 1	航程	31,240IPS (72rpm) × 1
1翼 1軸	補助ギヤ 80,000kg h × 1.96MPa × 1	航程	1,000kW × AC150V × 1, (JIS)
天井起重機	1,100kW × AC150V × 2, (JIS) (予)	航程	MF HF, NBDP, VHF B, C
國際MF尾燈	衝突予防装置 レーダ DGPS NAVTEX IBS	航程	18.07kn
(満載航海)	16.2kn	航速	18.80kn
航速距離	34n	船型	半甲板船



輸出ばら積貨物船 TACHIBANA

船名 Powercoal Navigation Corp. (Panama)
 幸陽新港株式会社建造 (43S-2117番船) 起工 99-12-15 進水 00-1-31 竣工 00-9-1
 全長 271.93m 重級間長 266.00m 周幅 17.00m 型深 23.60m 満載排水 16,250t
 篦トノ数 83,528t 乾舷 17.703t 載貨重量 154,324t 貨物船容積 182,127.07m³ 篦数 7
 燃料油槽 1063.85m³ (子) 機関 1063.85m³ (連続供給) 1,666kW (85.0rpm)、常用11,099kW (82.1rpm) プロペラ 4翼1軸 (Solid Keyless Type)
 (子) 機関 × 1 出力 (連続供給) 1,666kW (85.0rpm)、常用11,099kW (82.1rpm) (836kW × AC450V × 60Hz × 720rpm × 3 航速装置)
 1 油箱容量 0.98MPa × 1,200kg h × 1, 0.69MPa × 1,200kg h × 1 尾迹闊 615kW (836kW × 60Hz × 720rpm × 3 航速装置)
 インマラソン B, C 航海計器 GPS ディスプレイコントローラー レーダー 航速計器 16.45knot (試運転最大) 16.45knot (満載航海) 14.80knot
 船級 NK NS* (Bulk Carrier) (ESP) and MINS* MO遠洋
 船級・IMO遠洋



海洋気象観測船 啓風丸 気象庁
KEIFU-MARU

三井造船株式会社千葉造船工場建造 (第1505番船) 起工 99-4-20 進水 00-4-25 竣工 00-9-27
全長 81.39m 重線間長 72.00m 型幅 13.40m 型深 6.00m 満載喫水 4.66m
総トン数 1,183トン 國際総トン数 1,882トン 燃料油槽 549.15m 燃料消費量 12t day
清水槽 161.12m 主機関 ニイガタ 8M634HIX形 (テ) 機関×1 出力 (連続最大) 2,961kW (500rpm)
プロペラ 4翼 1軸 CPP 発電機 562.5kVA × AC450V × 60Hz × 3φ × 1200rpm × 3
非 100kVA × AC450V × 60Hz × 3φ × 1,800rpm × 1 無線装置 MF HF インマルB, C 國際VHF電話
GNSS 航海計器 MRPA GPS レーダー 速力 (試運転最大) 17.07kn (航海) 14.00kn
航続距離 10,000浬 船級・区域資格 JG・第3種船 遠洋・國際航海 船型 長船首樓付一層甲板船
乗組員 最大50名 船員31名 観測設備、諸装置等は記事を参照して下さい。
(本文46頁参照)

12

旅客船兼自動車航送船 3号はやぶさ 共栄運輸株式会社
NO.3 HAYABUSA

函館どつく株式会社函館造船所建造 (777番船) 起工 00-3-24 進水 00-7-4 竣工 00-9-22
全長 101.62m 重線間長 92.00m 型幅 15.80m 型深 11.00m 満載喫水 4.50m
総トン数 2,107トン 載貨重量 1,204トン Car搭載数 トレーラ、トラック 12m車×21台、9m車×27台
燃料油槽 C235.9m³ A69.1m 燃料消費量 265t day 清水槽 121.6m 主機関 NKK-S, M, T,
Pielstick 6PC2-6L形 (テ) 機関×2 出力 (連続最大) 1000PS (500 190rpm) × 2, (常用) 3,100PS
474 180rpm × 2 フロペラ 4翼 2軸 CPP 補汽缶 自然循環式堅形水管 0.69MPa × 1000kg/h × 1
発電機 大洋電機 675kVA × 540kW × AC450V × 2 (原) ヤンマー 800PS × 720rpm × 2 無線装置 船舶電話
国際VHF電話 航海計器 研究予防装置 レーダー GPS 速力 (試運転最大) 20.64kn (満載航海)
18.7kn 航続距離 3,500浬 船級・区域資格 JG・沿海 船型 全通船樓甲板船 乗組員 71名
旅客 57名 船首尾ランプ ハウスラスター フィンスタビライザ (本文55頁参照)



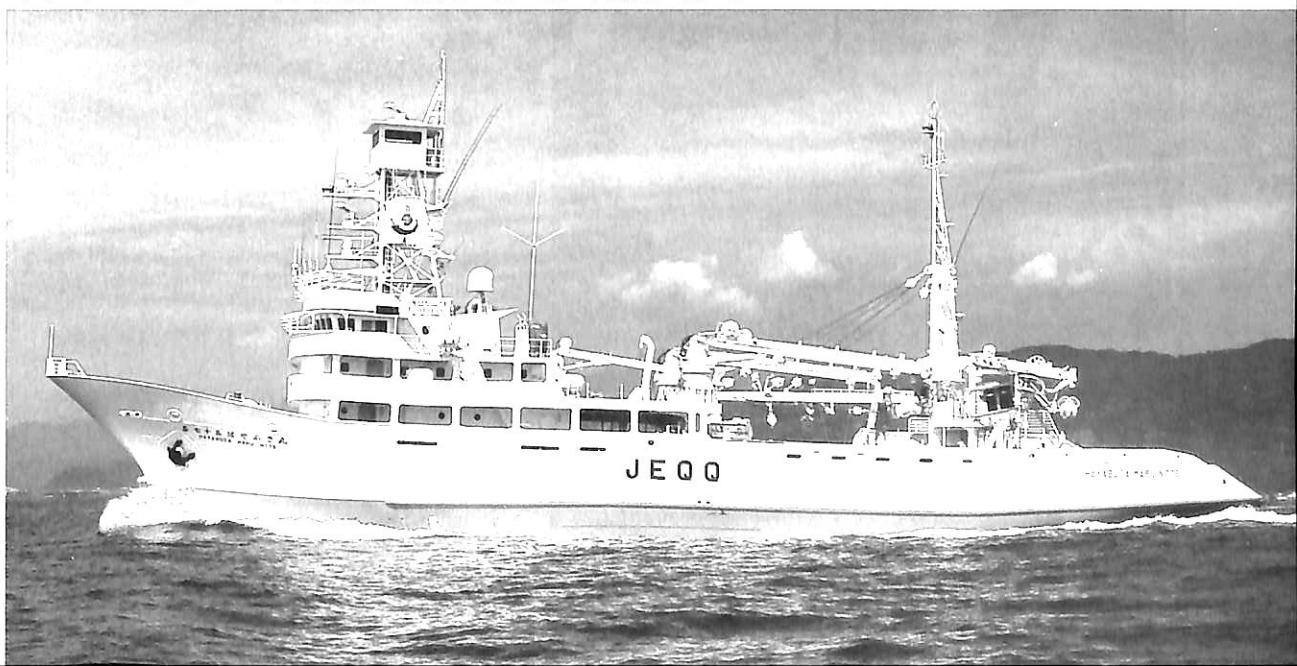


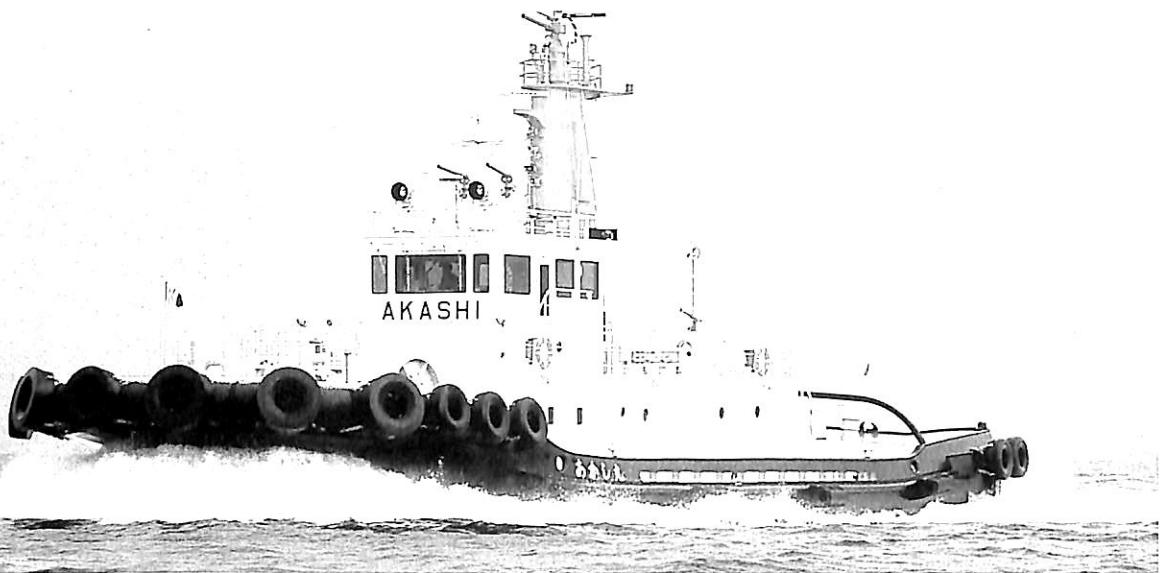
業務艇 シリウス 株式会社 石垣
SIRIUS

株式会社讃岐造船鉄工所建造 (第118-A)
全長 17.50m 周幅 4.60m 喫水 0.80m 計画排水量 20.09トン 総トン数 19トン
燃料油槽 100ℓ 燃料消費量 225g/kWh 清水槽 200ℓ 主機関 MAN-D2842LE401形
(デ) 機関 × 2 (連続最大) 1300PS (2,300rpm) × 2, (定格) 1,180PS (2,230rpm) × 2
ウェーターシェット推進フルスヒ形WJ IWJA 039形 速力 (軽荷最大) 54kn 航海 16kn
乗組員 15名 本文62頁参照

銅製海外施網漁船 第七十五はやぶさ丸 大洋エーアンドエフ株式会社
HAYABUSA-MARU NO.75

株式会社カナサシ重工建造 (第8003番船)
全長 65.02m 重線間長 55.60m 周幅 12.00m 型深 7.25-14.8m 進水 00-6-30 総トン数 1,091トン
総トン数 国際1,091トン、国内349トン 純トン数 328トン 貨物貯容積 (×8) 932.6m³ (×4) 1,047.9m³
船員数 12 燃料油槽 385.66m 清水槽 23.30m 主機関 阪神6LUS10RG形 (デ) 機関、1
出力 (連続最大) 3,000PS (320rpm)、(常用) 2,550PS (303rpm) フロヘラ 4翼 1軸 CPP 発電機
神鋼1,100kVA × 2 (原) ヤンマー1,319PS 無線装置 MF HF インマル-C 船舶電話 國際VHF電話
航海計器 レーダ 速力 (試運転最大) 16.81kn (満載航海) 15.0kn 航続距離 13,000浬 船級・区域資格
JG、遠洋国際 船型 三層甲板船首機関船 乗組員 23名 ハースウインチ、1、トリフレックス、1,
80tハイハワーカーレーン、2、搭載艇 (大伝馬800PS × 1、中伝馬400PS × 2)





曳船 あかし丸
AKASHI-MARU

日本造船株式会社

金川造船株式会社建造 (第483番船)

全長 33.90m 垂線間長 29.50m

総トン数 195トン

燃料油槽 47.32m³

×2 出力 (連続最大) 1,323kW (1,800PS) × 2 (750min⁻¹)

旋回式推進装置 ZP-21 3 A × 2

(原) ヤンマー-6CHAL-HTNA 54kW

×1 無線装置 船舶電話 國際VHF電話 航海計器 レーダー

船級・区域資格 JG 沿海区域

消防ホンフ: 主機駆動型 1 - 360m³ h × 140mTH, 伸縮放水塔: 1 - 電動 2段式ストローク 9.3m粉末消火装置: 1 - ドライケ

ミカル 2,000kg 海面流出油処理装置: 2 - 500 ℥ min

起工 99-11-9

型幅 9.40m

清水槽 22.20m

進水 00-2-18

型深 4.00m

満載喫水 (型) 3.10m

主機間 ニイガタ 6L28H×形 (デ) 機間

プロペラ 4翼 2軸 ニイガタ Zペラ (360度)

主発電機 大洋電機 120kVA × AC225V × 3相 × 60Hz × 2

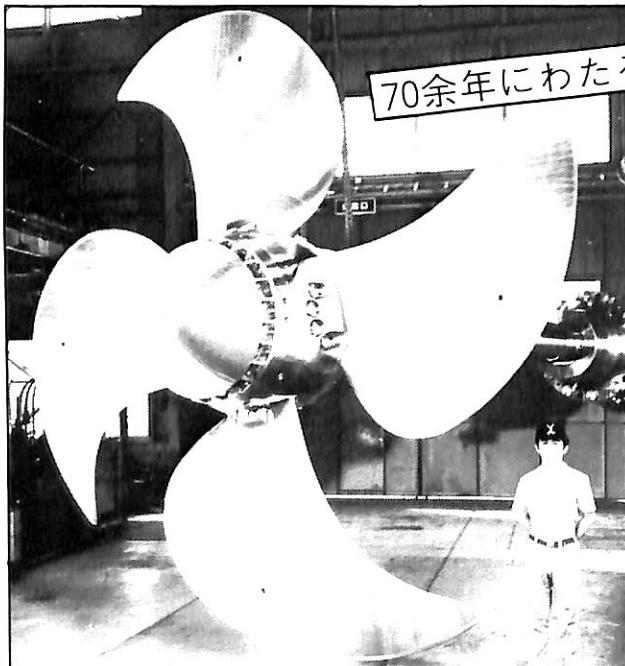
停泊用発電機 ヤンマーYAG15N-1 (防音ボータブル)

速力 (試運転最大) 14.39kn

乗組員 6名 他12名 (平水24時間未満)

- 14 -

かもめ可変ピッチプロペラ



製造品目

- 可変ピッチプロペラ
- 固定ピッチプロペラ
- サイドスラスター
- 船尾軸系装置
- K-7 ラダー
- MACS
(ジョイスティック
コントロールシステム)



全国50ヵ所のサービス網完備

運輸大臣認定製造事業場

○かもめプロペラ株式会社

〒245-8542 横浜市戸塚区上矢部町690番地
TEL (045) 811-2461 • FAX (045) 811-9444



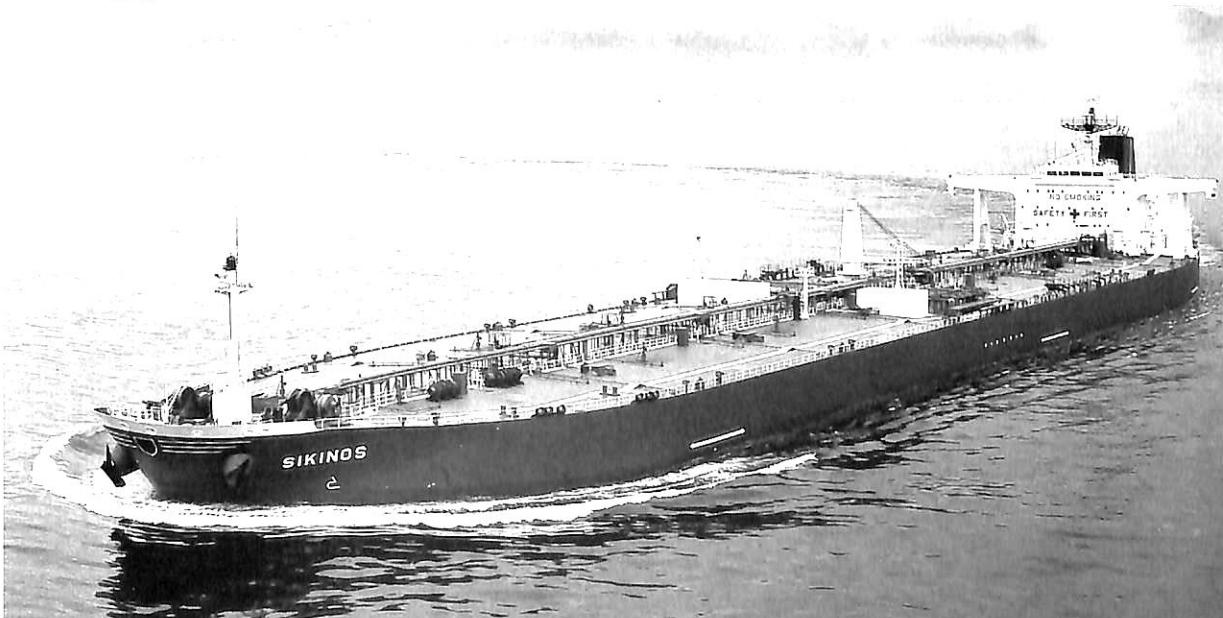
輸出ばら積貨物船 OCEAN COSMOS

船主 Southern Route Maritime S. A (Panama)
 株式会社名村造船株式会社建造 (第984番船) 起工 99-11-29 進水 00-5-11 竣工 00-7-25
 全長 287.64m 垂線間長 277.00m 型幅 45.00m 型深 24.10m 満載喫水 17.725m
 総トン数 85,868トン 純トン数 56,631トン 載貨重量 171,191トン 貨物船容積 (グ) 191,255.5m³
 船員数 9 燃料油槽 5,721.1m³ 燃料消費量 59.7t day (at NCO 9,600kcal kg F.O.) 清水槽 490.7m³
 主機関 MAN-B&W 6S70MC (Mark 6) 形 (テ) 機関 × 1 出力 (連続最大) 22,260PS (90.1rpm)
 (常用) 18,920PS (85.3rpm) フロペラ 4翼 1軸 補汽缶 大阪ボイラ 1,200 900kg h × 6.0kg cm G
 発電機 大洋電機 600kVA × 900rpm × 3, (原) ヤンマー 748PS × 900rpm × 3 無線装置 MF HF, NBDP
 インマルB, C 國際VHF電話 航海計器 衝突予防装置 レーダ 速力 (試運転最大) 16.67kn
 (満載航海) 11.5kn 航続距離 31,300浬 船級・区域資格 NK・遠洋 船型 平甲板船
 乗組員 25名

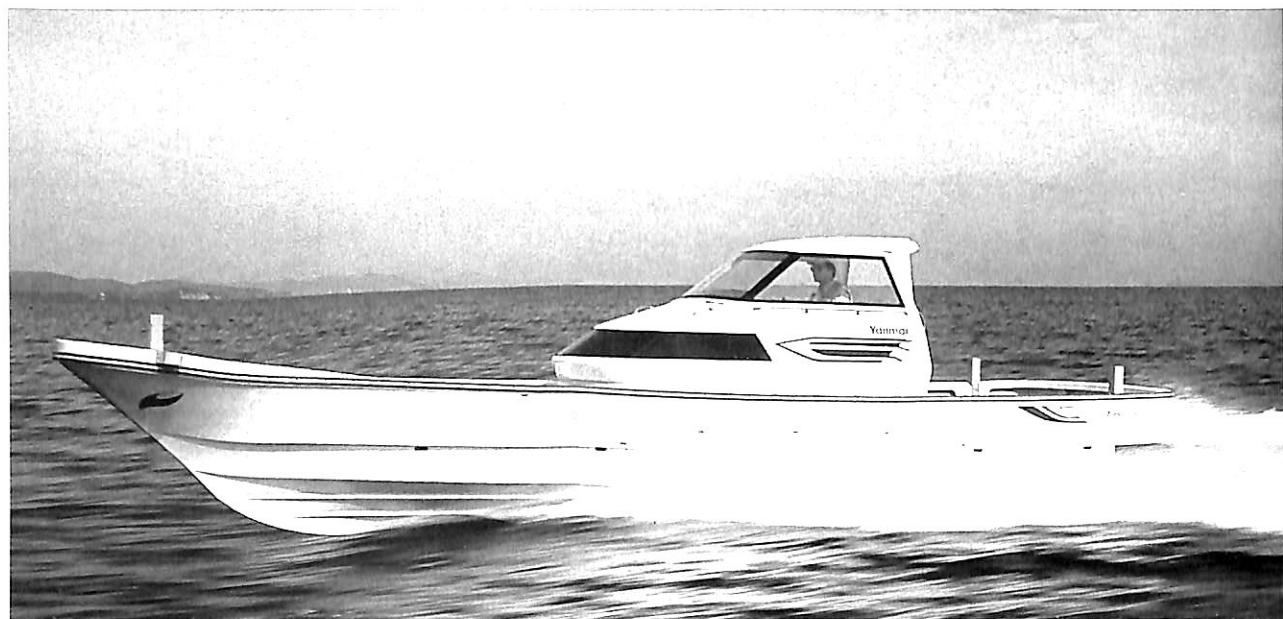
- 15 -

シキノス
輸出油槽船 SIKINOS

船主 Royal Maritime Corp. (Liberia)
 NKK津製作所建造 (第201番船) 起工 99-12-13 進水 00-3-3 竣工 00-6-26
 全長 274.2m 垂線間長 263.0m 型幅 18.0m 型深 22.4m 満載喫水 16.00m
 総トン数 78,845トン 純トン数 47,271トン 載貨重量 150,709トン 貨物油槽容積 170,102m³
 主荷油ポンプ 3,500m³ h × 3 燃料油槽 3,830m³ 燃料消費量 58.4t day 清水槽 357m³
 主機関 DUE-Sulzer 6 RTA72形 (テ) 機関 × 1 出力 (連続最大) 16,140kW (94rpm), (常用) 14,800kW
 (90.8rpm) フロペラ 5翼 1軸 補汽缶 31.5t h, 排エコ 1.35t h 発電機 ヤンマー (主) 750kW × 3
 (非) ヤンマー 160kW × 1 無線装置 MF HF インマルサットB, C 國際VHF電話 航海計器
 GPS 衝突予防装置 レーダ 速力 (試運転最大) 15.85kn (満載航海) 15.40kn 船型 平甲板船
 乗組員 31名

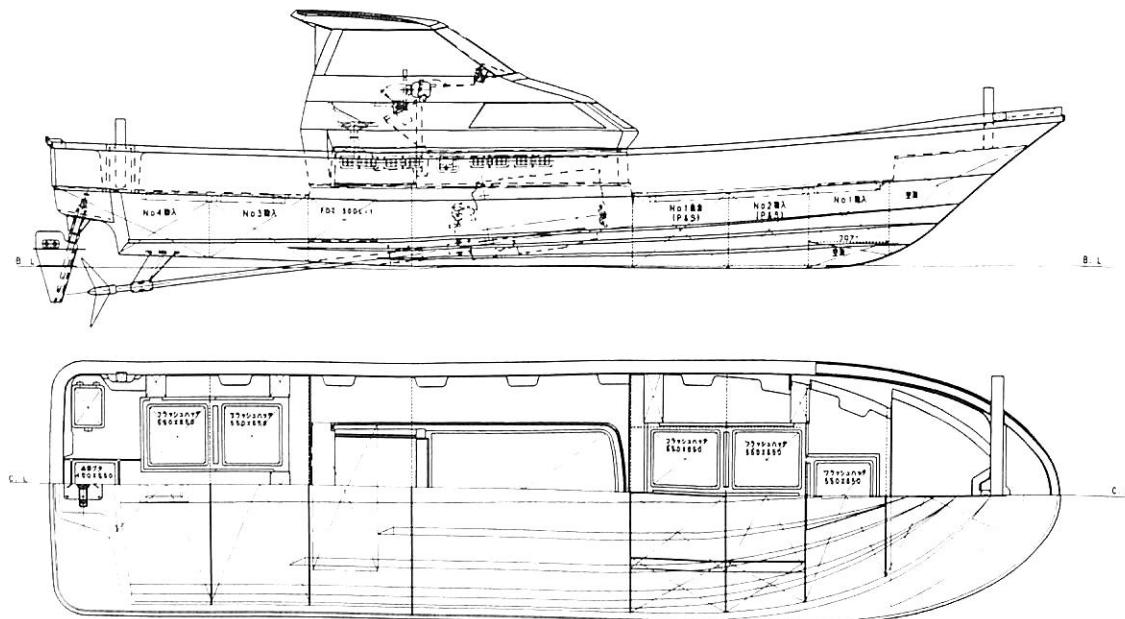


YANMAR インボード・フィッシングボート「はやしお」 DE31D

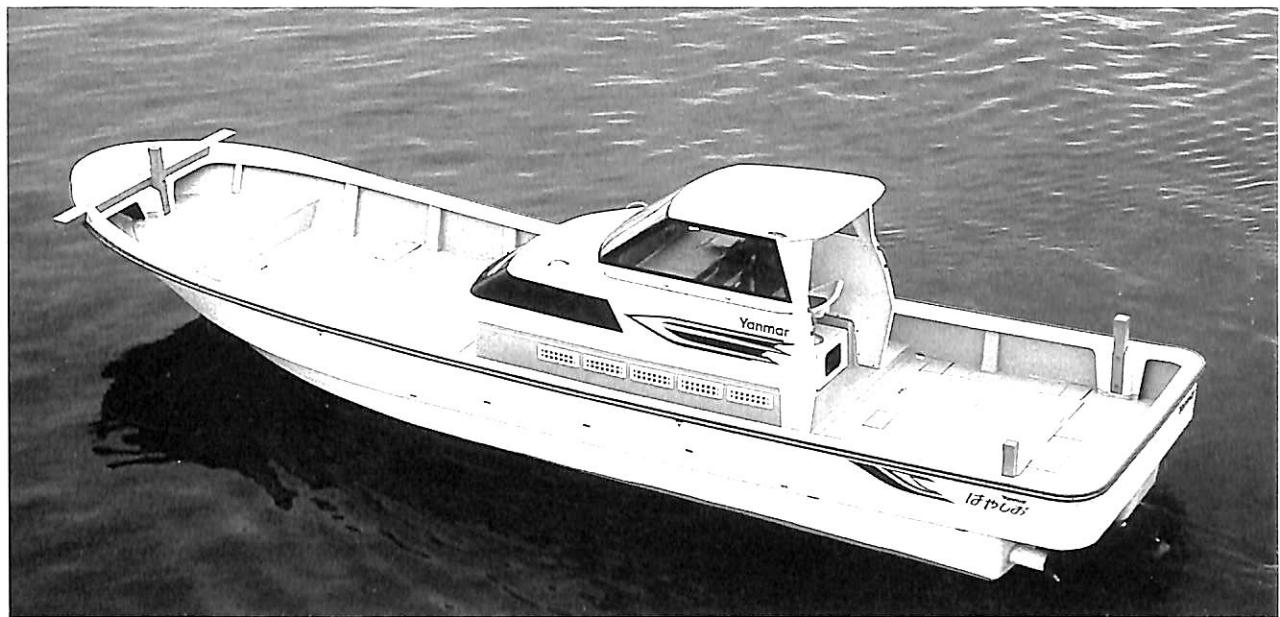


全長 9.13m 全幅 2.53m 総トン数 2.1トン 燃料タンク 300ℓ 主機関
ヤンマー 6LY2-ST形機関 最大出力 279kW (380PS) 3200rpm 速力 40kn
航行区域 限定沿海 免許 小型船舶操縦士 5級以上

ヤンマーディーゼル株式会社



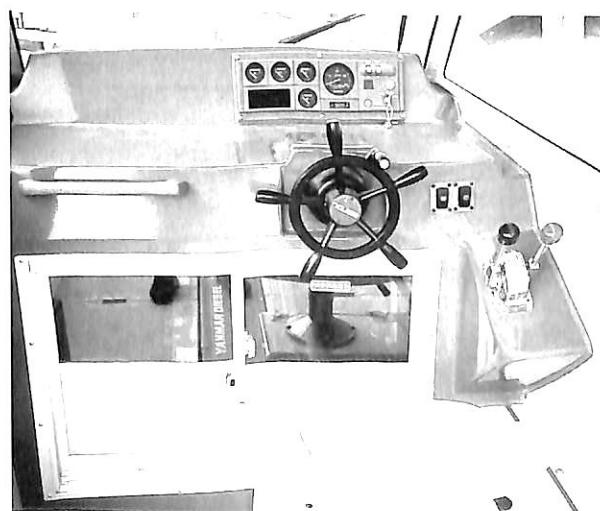
▲一般配置図



ヤンマー・ディーゼル株は、内海向けインボードフィッシングボートの「はやしお」シリーズに「DE31D」を追加した。フィッシングボートの高速化への要望を受けて40knオーバーに対応するフィッシングボートになっている。

【船型】

高速での凌波性を考慮したV型船型とした。又、後進舵利きを考慮し、丸みを帯びたトランサムと舵ボックスを備え、高速化による舵面積の減少に伴う後進舵利きの不利を補っている。舵自体も前進時、水に没かるトランサムより下の舵は流線形の断面を持ち抵抗を減らしている。又、舵のトランサムより上の部分には後進時に働く板舵が取付られ後進時の旋回性を高めている。



▲操舵室

【特長】

漁船タイプの船では、今までに無いシアーラインのゆるさでスマートな形になっている。操船姿勢は高速化に対応する為に、油圧ダンパー付ドライバースシートを標準装備し座り操船とし、高速でもより安定した操船が行えるものとなっている。又、座り操船としたので、フリッジを今までになく低くし、船全体を低くすることにより、風による横流れを極力抑え船首部のV型船型によりより良い潮流性を有する仕上がりとなっている。エンジンは、熱効率が高く燃料消費率の小さい高性能ディーゼルエンジンを搭載。信頼性、耐久性に優れ、フィッシングに必要な長時間のスロー運転も可能である。



▲V型船型

NISSAN ファミリーフィッシング・クルーザー Wing Fisher-26 O/B



全長 8.53m	全幅 2.72m	全深さ 1.40m	全高 2.50m	総トン数 5トン未満
艇体重量 1,500kg	最大保証馬力 110kW (150PS)	セット船外機 BF130形×L	燃料タンク 200ℓ	
清水タンク 30ℓ	最大搭載人数 10名	航行区域 限定沿海		

「性能データ」

搭載エンジン (BF130形) 28kn (52km/h) 燃料消費量 36ℓ/h
参考 (MERC150型*) 30kn (55km/h) *Mercury Optimax 150 Bluewater

日産マリーン株式会社

【概要】

・日産の人気フィッシングボート、ウイング・フィッシャーシリーズの中級艇として新発売、26フィートクラス最大のキャビンスペースを確保している

・綏やかなライズドシアーの船体は、V型ハルの採用で、波きりの良い走りを実現している

・フルウォーク・アラウンド・タイプで本格キャビンを備え、ナビ側には、2人が前向きに座れるシートを標準装備し、オプションで対座シートとテーブルを用意、またテーブルを下げればベッドになる

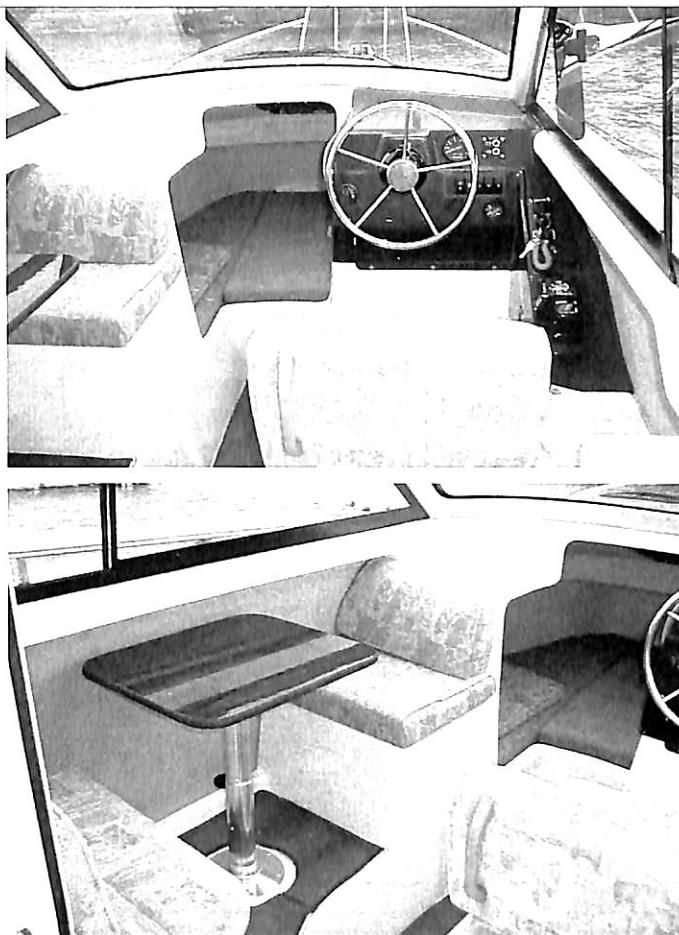
・ハースには大人2人、子供1人が横になれるスペースを

確保している。両サイド下には収納スペースを設け、また固定トイレットスペースも標準で設けた。

このクラスのフル・ウォーク・アラウンドのフィッシング・ボートの中では、家族で楽しめるドア付きキャビネット・タイプである。

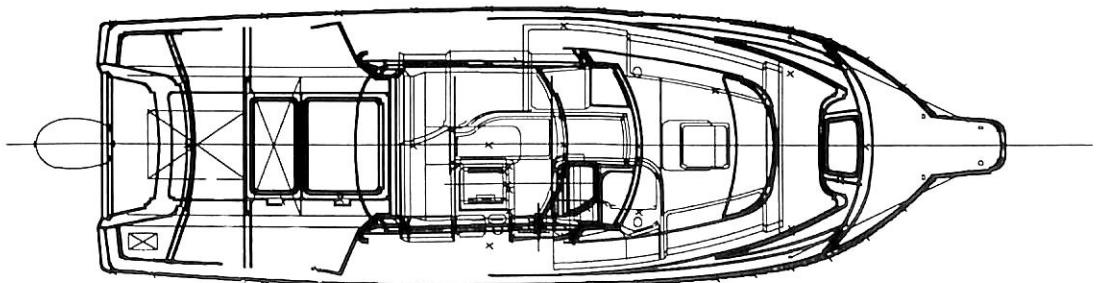
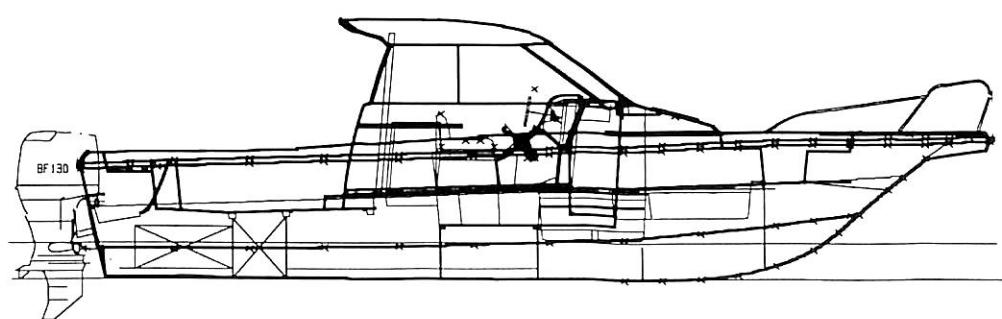
・リア・デッキをフラットで広くとり、ハウトリリアで多人数の釣ても余裕がある。

・ハウ・ロッカーやリアの大型のフロア・ハッチやタンク・ルーム・トイレスなど物入れの数が多く、キャビン内ヒューズを使い勝手を考えた釣り具等の収納が可能である。



コックピット▶

◀対面シート



▲ Wing Fisher-26 O/B配置図



ノード セシリ亞
輸出ばら積貨物船 NORD CECILIE

船主 Rederiet St. Frederikslund A/S (Bahamas)

株式会社大島造船所建造 (第10280番船)	起工 00-3-23	進水 00-5-29	竣工 00-8-11
全長 189.99m	垂線間長 182.00m	型幅 32.26m	型深 16.67m
総トン数 28,632トン	純トン数 17,569トン	載貨重量 50,913トン	貨物艀容積 (グ) 65,252m ³
船内数 5 クレーン 30t×4	燃料油槽 1,780.6m ³	燃料消費量 27.5t day	清水槽 277.0m ³
主機関 川崎-MAN-B&W 6S50MC-C形 (デ) 機関×1 (常用) 9,210PS (113.6rpm)	プロペラ 4翼 1軸	出力 (連続最大) 12,870PS (127rpm)	発電機 西芝450kW×AC450V×60Hz×3
無線装置 500W MF HF, NBDP, インマルB, C 國際VHF電話	レーダー	航続距離 19,000浬	航海計器 GPS 衝突予防装置
船型 平甲板船	速力 (試運転最大) 15.8kn		船級・区域資格 DnV・遠洋
乗組員 25名			

20-

フレステーシ エース
自動車運搬船 PRESTIGE ACE

船主 El Barrio Shipping S.A. (Panama)

今治造船株式会社丸亀事業本部建造 (第S-1325番船)	起工 99-12-28	進水 00-6-10	竣工 00-9-19
全長 199.91m	垂線間長 190.00m	型幅 32.20m	型深 34.06m
総トン数 55,878トン	純トン数 46,764トン	載貨重量 20,202トン	Car搭載数 5,059台
燃料油槽 3,202.35m ³	燃料消費量 49.43t day	清水槽 358.90m ³	主機関
赤阪-三菱8UEC60LS形 (デ) 機関×1	出力 (連続最大) 14,121kW (100rpm), (常用) 12,003kW (91.7rpm)		
プロペラ 5翼 1軸 Solid Type 補汽缶 6.0kg cm × 1, 793kg h × 1	6.0kg cm × 1, 600kg b × 1	発電機	
L,315kVA (1,052kW) × AC450V×60Hz×720rpm×60Hz×3		無線装置 インマルサットB, C	航海計器
GPSシヤイロコンパス レーダー	速力 (試運転最大) 21,766kn	(満載航海) 20,000kn	航続距離 20,700浬
船級・資格 NK NS* (Vehicles Carrier) and MNS* M0 遠洋		船型 多層甲板船	乗組員 25名





安全運航で日本石油グループの
原油安定供給を支える



東京タンカー株式会社

代表取締役社長 松永宏之

〒231-0062 神奈川県横浜市中区桜木町1-1-8 (日石横浜ビル25F)
電話 (045) 683-2700 (代)



新日本海フェリー

代表取締役社長 入谷泰生

本社 〒530-0001 大阪市北区梅田2丁目5番25号 梅田阪神第1ビルディング15階
大阪予約センター / tel. (06) 6345-2921 (代) 東京予約センター / tel. (03) 3543-5500 (代)



栗林商船株式会社

取締役会長 栗林定友

取締役社長 栗林宏吉

〒100-0006 東京都千代田区有楽町一丁目8番1号 日比谷パークビルディング2階



Submarine Tourism

もぐりん海底30mクルーズ

観光潜水艦
もぐりん

〒904-0413 沖縄県国頭郡恩納村字富着66-1
TEL.(098)964-5555 FAX.(098)964-5570



社団法人
日本造船工業会

会長 亀井俊郎

東京都港区虎ノ門1丁目15番16号(日本財團ビル)
電話 03(3502)2010~19



JAPAN SHIP EXPORTERS' ASSOCIATION

日本船舶輸出組合

理事長 相川 賢太郎

東京都港区虎ノ門1丁目15番16号(日本財團ビル)
電話 03(3502)2094 03(3508)9661

社団法人
日本中型造船工業会

会長 三輪 善雄

東京都港区虎ノ門1丁目15番16号(日本財團ビル)
電話 03(3502)2061

ClassNK

財團法人 **日本海事協会**

東京都千代田区紀尾井町4番7号
電話 03(3230)1201(代)

社団法人
日本舶用工業会

会長 山岡淳男

東京都港区虎ノ門1丁目5番16号(晩翠ビル3階)
電話 03(3502)2041・ファックス 03(3591)2206
ホームページ <http://www.jsmea.or.jp>

The Shipbuilding Research Centre of Japan

財団法人 **日本造船技術センター**



理事長 大西重雄

東京都豊島区目白1丁目3番8号
電話 03-3971-0266 FAX 03-3971-0269

社団法人

日本造船協力事業者団体連合会

会長 小山久夫

東京都千代田区神田錦町2丁目11番地(NKFビル6階)
電話 03(5281)2741 FAX 03(5281)2745
URL: <http://www.nichizou.or.jp>

社団法人

日本船舶電装協会

会長 小田道人司

東京都港区新橋3丁目1番9号(日本ガラス工業センタービル8階)
電話 (03)3504-0858 (代表)
FAX (03)3504-0856 G II/G III



ワン・ハイ
輸出コンテナ船 WAN HAI 233 (利春)

船主 Wan Hai Lines Ltd. (Republic of China)

内海造船株式会社(瀬戸内工場)建造 (第654番船)

全長 191.45m 垂線間長 180.00m

総トン数 17,751トン 純トン数 6,636トン

燃料油槽 2,150m³ 燃料消費量 59.9t/day

(テ) 機関 × 1 立形煙管式 コンボジット形 1,400kg/h × 6.0kg/cm²

(原) Wärtsilä D. 1,290PS × 900rpm × 3

航海計器 衝突予防装置 レーダー GPS

船級・区域資格 CR・ABS遠洋

起工 99-11-15

型幅 28.00m

載貨重量 21,017トン

主機関 日立-MAN-B&W 7 S60MC-C形

出力 (連続最大) 21,490PS × 105.0rpm. (常用) 19,340PS × 101.5rpm

プロペラ

5翼 1軸

無線装置 MF HF, NBDP, インマルB, C, 國際VHF電話

航続距離

15,200浬

船型 船首樓付平甲板船

乗組員 21名

同型船 WAN HAI 230

進水 00-3-21

型深 14.10m

満載喫水 9.50m

Cont.搭載数 1,660T, E, U

主機関 日立-MAN-B&W 7 S60MC-C形

出力 (連続最大) 21,490PS × 105.0rpm. (常用) 19,340PS × 101.5rpm

プロペラ

5翼 1軸

無線装置 MF HF, NBDP, インマルB, C, 國際VHF電話

航続距離

15,200浬

船型 船首樓付平甲板船

乗組員 21名

24 —

IT時代を生きる!!

インターネットによる船舶の設計・エンジニアリング・運航
管理支援サイト、「J-Ship」2001年1月オープン!!

J-Ship 一般会員:

年会費¥10,000で各種のサービスを受けられます。

(船舶諸計算、技術相談、各種データー観)

また、個別の技術指導、設計開発、技術開発などはテナント会員およびJ-Shipコミッティーの認定した各分野の専門家(コンサルタント)が対応致します
(一部有料)。

J-Ship テナント会員:

年会費¥10,000で各種技術サービスを受けられます。

また、一般会員から委託された設計・解析・開発業務、エンジニアリング業務、ソフト開発などを行います。
(個別料金)。

詳しくは<http://www.jship.net>をご覧下さい。

J-Shipコミッティー 代表:奥本泰久(近畿大学)、吉富 佐(九州共立大学)、高武淳夫

問合せ 〒857-0023 佐世保市名切町3の3 SEA創研 松尾 晃(事務局)

Tel:0956-25-0102 Fax:0956-25-0103 E-Mail: amatsuo @ sea-soken.co.jp



自動車運搬船
GRAND MARK

船主 Dynamic Pioneer Marine S. A. (Panama)

株式会社新東島どくく建造 (第5043番船)

全長 179.16m

垂線間長 170.00m

総トン数 50,310トン

燃料油槽 2748m³

(デ) 機関×1

補汽缶 1400kg/h

国際VHF電話

(満載航海) 19.2kn

乗組員 25名

グランド マーク

GRAND MARK

起工 00-3-1

進水 00-6-14

竣工 00-9-25

型幅 32.26m

型深 34.05m

満載喫水 9.10m

純トン数 15,093トン

燃料消費量 44.1t/day

発電機 1150kVA×3, 150kVA×1

GPS

航続距離 18,300浬

載貨重量 16,681トン

清水槽 333m³

主機関 神発-三菱 7 UEC60LS形

無線装置 MF HF, NBDP インマルB, C

衝突予防装置 レーダ

NM0 遠洋

速力 (試運転最大) 20.75kn

船級・区域資格 NK M0 遠洋

船型 多層甲板船

Car搭載台数 4,373台

プロペラ 4翼 1軸

主機関 神発-三菱 7 UEC60LS形

無線装置 MF HF, NBDP インマルB, C

衝突予防装置 レーダ

NM0 遠洋

速力 (試運転最大) 20.75kn

船級・区域資格 NK M0 遠洋

船型 多層甲板船

- 25 -

カーマキー・クローバル・ワロヂューサー

輸出浮体式石油生産貯蔵出設備 (FPSO)
Kerr-McGee Global Producer III

船主 Kerr-McGee Oil (U.K.) PLC

三井造船株式会社千葉事業所建造 (第1601番船)

全長 217.2m

垂線間長 200.00m

満載排水量 108,900トン

貨物油槽容積 88,800m³

燃料油槽 1,700m³

補汽缶 ガス油混焼型

レーダ GPS

消火ポンプ

起工 96-5-14

進水 96-12-2

竣工 00-10-5

型幅 38.00m

型深 23.00m

満載喫水 17.00m

純トン数 53,600トン

主荷油ポンプ 1,000 550 400m³/h × 110m × 10 2 台

電気推進機関 アジマス・スラスター (3,500kW × 3) (+ 将来装備 2), DPS

発電機 ガス混焼型 4,200kW × 720rpm × 4, (非) 1,700kW ×

1,800rpm × 1

無線装置 MF HF, NBDP インマルB, C

国際VHF電話

航海計器 衝突予防装置

レーダ GPS

速力 (試運転最大) 9 kn

船級・区域資格 DnV, Oil Production and Storage Vessel

タレット係留, ターニングロッキング装置, オフローティング装置 6,000m × 1 h

乗組員 64名

タレット係留, ターニングロッキング装置, オフローティング装置 6,000m × 1 h

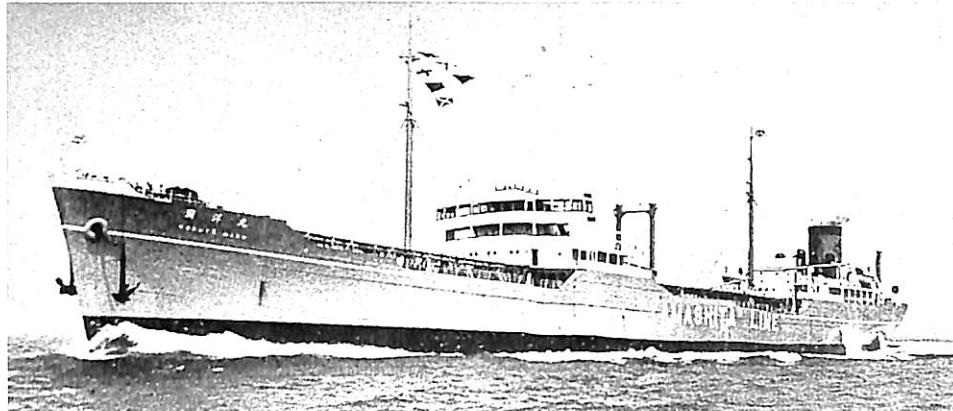
(本文71頁参照)



日本商船隊の懷古

山田早苗氏提供

油槽船 国洋丸 KOKUYOO-MARU 国洋汽船



川崎造船所建造（第623番船）

起工 昭13-6-17

全長 160.166m 垂線間長 152.39m

満水排水量 20,295トン 総トン数 10,026.91トン

貨物艤容積 (ベ) 1,999m³ (ゲ) 2,268m³

D 8 ZU72 120形ディーゼル機関×1

速力（試運転最大）19.39kn（満載航海）16.5kn

帝國海事協会 NS（タンカー）MNS BC BS（タンカー）MBS

姉妹船 玄洋丸、日栄丸、磐島丸、健洋丸、神田丸

船舶番号 45866

進水 13-12-26

型幅 19.80m

型深 11.32m

純トン数 5,833.83トン

載貨重量 13,539.34トン

主機関 川崎MAN形複動三衝程無氣噴油式

出力（連続最大）11,033PS（計画）7,400PS

速力（連続最大）

信号符字 JNZM

竣工 14-5-16

満載喫水 8,893m

船級・区域資格

旅客 1等 6名

山下汽船及び関連会社が集まって、昭和12年1月18日、国洋汽船を設立、海軍の要請によって2隻の大型タンカーを建造することになり川崎造船所に発注され、これが本船ならびに姉妹船である健洋丸となった（本誌 第43巻 2月号参照）

当時、海軍では国防上の見地から優秀なオイルタンカーを民間に所有させて居り、とくに性能上、川崎造船所建造のタンカーは高く評価されていた

竣工後、北アメリカよりの石油輸送に従事していたが、昭和15年11月16日、海軍に徵用され、12月16日特設給油船として連合艦隊に配属された

昭和16年12月、真珠湾攻撃の第1補給隊として、ホイラー油10,000トン、航空ガソリン66トン、潤滑油10,000トンを積んで第2航空艦隊に随伴し、一連の作戦を終えて12月26日呉に帰る

昭和17年1月7日、11:00ダバオを出撃、オランタ領、ホルネオ攻略に向かう海軍陸戦隊を乗せて陸軍、海軍の輸送船16隻に加わり「那珂」以下21隻の船艇の護衛のもとに1月10日タラカン島に到着22:00部隊を揚陸した

第2次、イント洋作戦の第1補給部隊に参加するためスタークリンク湾から馬公に補給に帰り、昭和17年1月11日馬公を出撃、機動部隊と合流、作戦終了とともにシンガポールを経由して1月20日、呉に帰る

昭和18年11月30日、ハレンバン発3隻の船團で第5号駆潜艇等の護衛で12月4日バラオ着

昭和18年12月31日、横須賀発3231船團で昭和19年1月12日トラック着、1月19日トラック発「野分」「舞風」「山雲」の護衛で1月22日ラハウル着、1月25日カビエン発「野分」「舞風」の護衛で1月28日トラック着、2月5日トラック発、2月11日ダバオ着、2月12日ダバオ発「島風」の護衛で2月15日パリックハバン着、2月21日、パリックハバン発、3隻の船團で2月25日ダバオ着、2月29日ダバオ発、3月2日バラオ着、3月4日バラオ発、3月10日サイパン発、3月13日バラオ着、3月18日バラオ発、3月22日タラカン、3月25日パリックハバン着、3月27日、パリックハバン発、4月1日ダバオ着、4月8日ダバオ発、あ号作戦の第1補給部隊として参加するためパリックハバンにて油を満載して4月18日、4月26日サイパンにて油を揚陸、再びパリックハバンで油を満載、5月13日同地発、5月15日タウイタウイ着

昭和19年6月11日ダバオを出撃、マリアナ沖海戦の第1補給部隊として参加、7月2日呉に帰る

昭和19年7月30日、パリックハバンに向か航行中、ホロ島西北西100k 6°07' N, 120°0' Eにて米潜水母艦Bonefish (SS-223) の雷撃により沈没、乗組員9名が戦死した

貨物船 横山丸
ROZAN-MARU

国際汽船→樺太汽船→日産汽船

浅野造船所(神奈川県)建造
船舶番号 25086 形式B型船
JOZD 進水 大8-5 信号符字 RMBJ
8-5-30 垂線間長 121.92m
型深 16.15m 満載排水量 11,930トン
総トン数 5,446.67トン 純トン数
3406.18トン 製貨重量 8,794.48トン
貨物船容積 (ペ) 11,076m³ (グ) 11,656m³
主機関 三連成レシプロ機関×1 出力
(連続最大) 2800PS 速力 (試運転最大)
11.0kn (満載航海) 9.0kn 船級
区域資格 通信省第1級船 遠洋区域
ロイド100AT LMC 旅客1等4名
乗組員 42名 船籍港 浦賀→神戸
→東京



浅野造船所のストックボートB型船で、国際汽船の所有となり浦賀籍。大正14年、神戸籍となる。

昭和3年、山東出兵の軍用船となる。

昭和4年4月、トナ当、72円で樺太汽船に売却、樺太丸と改名、東京籍となる。

昭和11年6月4日、日産汽船の所有となり東京籍。

昭和13年、日竜丸と改名。

昭和16年11月、陸軍に徴用されて軍用船となり、11月8日門司発、11月13日南京、11月18日呉淞、12月7日ハダム、12月19日シンゴラを経て、12月30日宇品に帰る。

昭和17年1月2日宇品発、1月3日黄浦、1月21日シンゴラを経て1月29日門司に帰る。

昭和17年3月6日門司発、3月10日高雄、3月17日サンジヤク、3月22日コーシチヤン、3月24日シンゴラ、4月1日サンジヤク、4月2日サイゴン、4月7日コーシチヤン、4月13日バンコック、4月26日高雄、5月7日黄浦、5月11日上海、5月17日黄浦、5月23日海口、6月1日シンガポール、6月16日バンコック、6月21日コーシチヤン、6月23日シンガポール、6月30日ビンタン、7月12日高雄を経て7月29日門司に帰る。

昭和17年11月30日宇品発、佐伯に集結、8号演習輸送のE船團で12月2日佐伯発、ラバウルを経て、ラエに向かう途中、1月7日6°45' S, 149°0' E ニューブリテン島西岸にて空爆により沈没した。

貨物船 山藤丸 山下汽船
YAMAFUJI-MARU

J. Coughlan & Son パンクーバー (英) 建造
船舶番号 43736 信号符字 JYPL
起工 1919-8-1 進水 大9 (1920年-
5-25) 垂線間長 121.92m
竣工 1920-8-1 型幅 15.85m
重線間長 121.92m
型深 9.46m 満載喫水 7.73m
満載排水量 10,884トン 総トン数
5,359トン 純トン数 3,221トン
載貨重量 8,533トン 貨物船容積
(ペ) 10,437m³ (グ) 11,718m³
主機関
三連成レシプロ機関×1 出力 (連続最大)
3,315PS (計画) 2,800PS 速力
(試運転最大) 13.7kn (満載航海) 11.5kn
船級・区域資格 通信省第1級船
乗組員 10名 旅客1等2名 姉妹船
山菊丸、山荻丸 船籍港 神戸



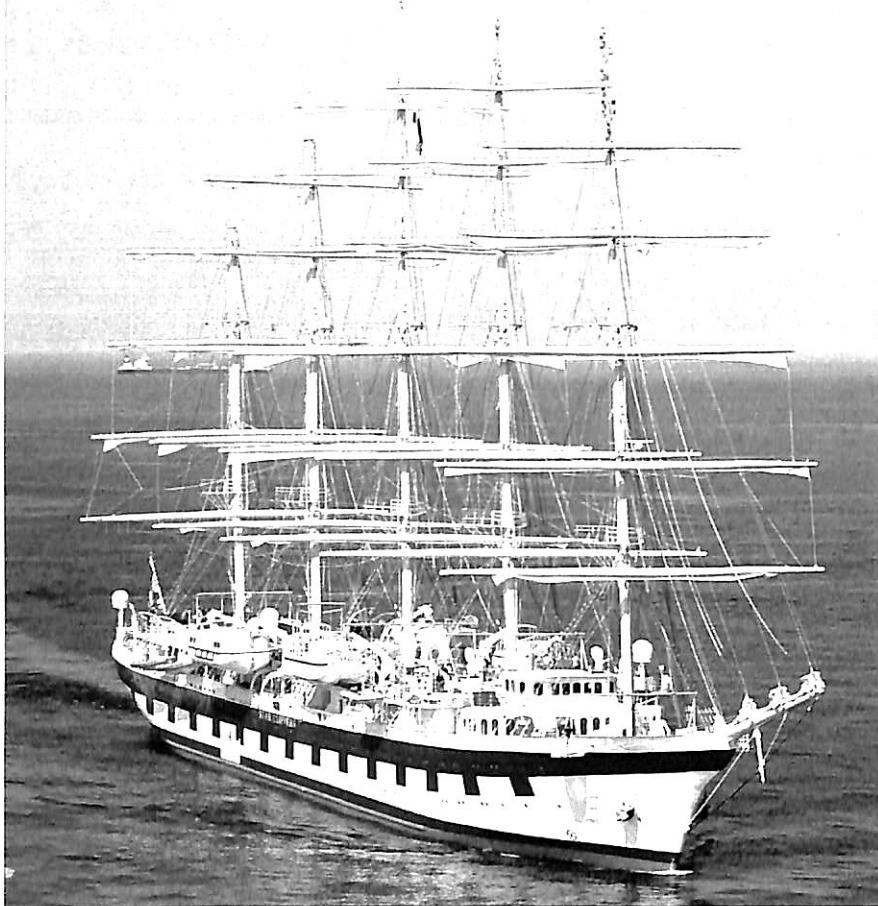
第一次世界大戦時に英國が建造したB型戦時標準型船 Canadian Importer号で、大戦後、山下汽船のロンドン邦人会社、Bright Navigation社が購入してBright Star号と改名、ロンドン籍とする。

その後、H. H. C. Wanに売却されChao Sing号となり青島籍となつたが昭和12年に山下汽船が再び買い取り山藤丸と改名、神戸籍とした。

昭和15年5月25日神戸発、ヘルシャ行へ

昭和16年10月27日、陸軍に徴用され軍用船となり、東京発、11月10日海口、11月29日サイゴンを経て12月27日宇品に帰る。

12月30日、大阪発、昭和17年1月21日バンコック、2月4日コーシチヤン、2月18日高雄、2月22日黄浦、2月27日九龍、3月17日海口、3月21日バンコック、3月25日コーシチヤン、4月8日ランカーン、4月21日シンガポール、4月26日サイゴン、5月20日ハダビア、6月5日スラバヤ、6月13日シンガポール、その後、シンガポールと、コーシチヤン、ムントク、スラバヤ、マニラ、セブなどの間を行動 10月19日、澎湖島沖、25°20' N, 121°1' E にて坐礁により沈没した。



5本マストで優雅な世界最大の帆船・帆走客船“ROYAL CLIPPER”

命名者はスウェーデン国シルビア女王陛下

— Star Clippers —

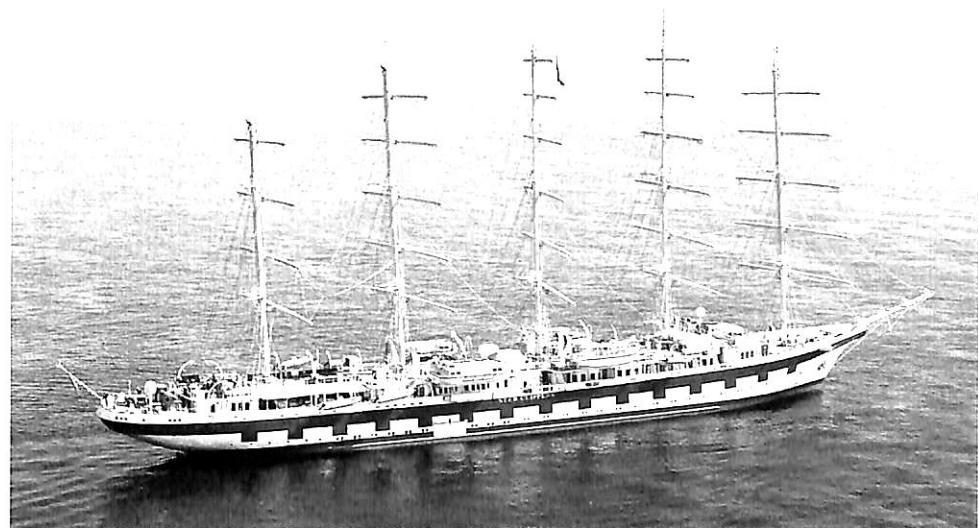
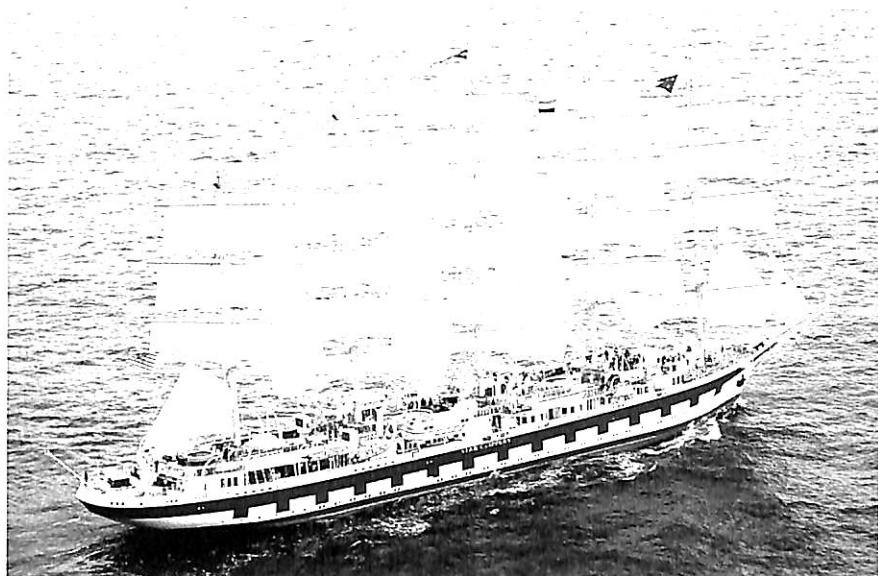
Yoshitatsu Fukawa
府川 義辰

スタークリッパーズ社 (Star Clippers) の1998年6月6日の発表によると、当時同社がホーランドのセナール造船所 (Cenal Shipyards) に発注建造中であった、世界最大の帆走クルーズ客船の船名を“ロイヤルクリッパー”(Royal Clipper) とすることを発表した。本船は、世界最大の帆走客船であり、練習帆船を含めても現役世界最大の帆船である。さらに、現役唯一で、近年最初の5本のマストを有するフルリッジ型の5000GT型の帆走客船である。

竣工前に発表されていたスケジュールによると、处女航海は2000年の5月6日で、Canne-Corsica-Sardinia-Elba-Portofino-Monte Carlo-Canneの7日間クルースであった。その後は、カанс起点のクルースを実施、11月からは暖冬海域のカリブ海域にシフト、バルバドス (Barbados) 起点のクルース就航することになっていた。お値段は、最高のテラックススイートを使用してもUS\$500-程度で、邦船の最低値段で最高の部屋が使用できる。挿みつけは、欧洲からカリブ海域へのシフトクルースである。お値段は、一日US\$350-程度である。できれば乗ってみ

たいものであります。

本船のモデルは、1902年から1910年までの8年間活躍した当時世界最大の帆船で、ドイツとチリとの間をバルクカーゴシップとして就航していた。ドイツのフライングPライン (Flying P Lines) の5本マストのfull-rigg型の帆船“フレウゼン”(Preussen) である。船型及び船体規模は、本船とはほぼ同じである。建造にあたったのは、ホーランドのセナール造船所で、建造価格はUS\$50millionと公表された。事情の詳細は明らかでないが、セナール造船所では船体建造のみを担当し、1999年1月にホーラントからオランダのロッテルダムに近いGlessendamにあるメルウェーデ造船所 (de Merwede S. Y.) に曳航された。その後同造船所で最終建造工程が引き継がれ、舾装を終わったものである。本船の竣工・引渡は、2000年7月15日で、発注者であるホワイトスタークリッパー (White Star Clippers N.V.) に引き渡されている。現在、既に運航者であるスタークリッパーズ (Star Clippers Ltd.) の配下で運航されて



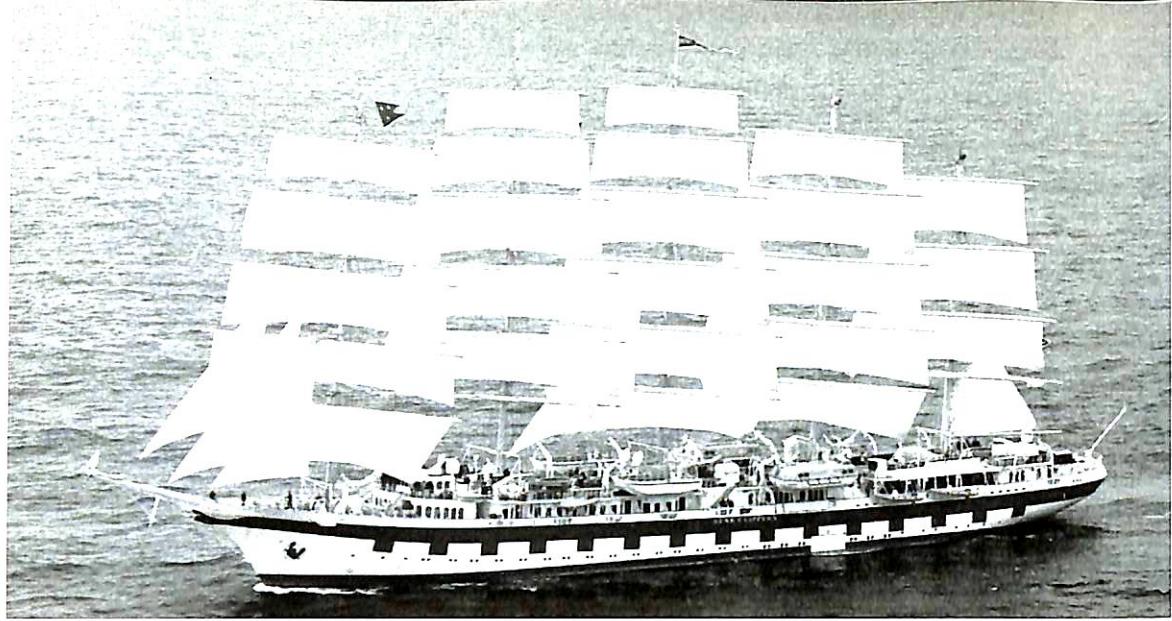
いる

“ロイヤルクリッパー”は、5本マストで全てのマストに横帆及び縦帆が張られている Full-rigg型の帆船で、その縦帆は12枚に達し、縦帆面積は $1,666\text{m}^2$ （54,360平方フィート）にもなる。マストの高さは、水線から58.50m（197フィート）になり、東京港のレインボーブリッジ（52m）下の通航は適わない。全長は、134m（437フィート）で、現役最大のロシアの訓練帆船“セドフ”（Sedov：122m）より12mも長い。これは、過去最大・最長の帆船“フレウセン”とほぼ同規模である。操帆は、横帆の2枚を除き全てハワーウインチが効率的に使用され、106名の乗組員の内20名が操帆にあたる。この船では2枚の横帆が、デモンステレーション用に伝統的な人形操帆がなされる。希望によっては、船客がその操帆作業に参加できることにもなっている。（同社は、それを「ボランティア・アクティビティー」と称している）。現在のところ写真による判断だが、メインマストと5番目のマストの最下帆が、この2枚に相当し、自動操帆から除かれるようである。また、展帆・縮帆の際のセールは、ヤートの真下がスリー

ト状に切れており、ワインチ操作の際、そのスリット内側に巻き込み・捲き出しがされる構造になっている。帆走時は、最大5度までの傾き（heeling）が維持され、船の傾きからくる不快感をなくす工夫がなされている。船客収容力は、2名ベースの船室114室を擁し、228名の収容力があり、最大260名の収容力を有する。

話はそれるが、本船のモデルとなった帆走貨物船“フレウセン”は、就航当時台頭し始めた蒸気船の出現により、その足の弱さを露呈するところとなり、早々と引退を決めていた。皮肉にも、1910年、イギリスのドーバー海峡にて彼女より足の弱い蒸気船と衝突・沈没してしまった。彼女は、當時世界最大・最速の帆船であったとされている。

因みに帆船では、フィギュアヘッド（Figurehead：船首像）がつきものである。本船の船首像は、船主で社長のMr. Mikael Krafftのお嬢様マリーさんをモデルにしたものである。船首像の披露式は、2000年7月17日ローテルタム港にて初めて披露された。



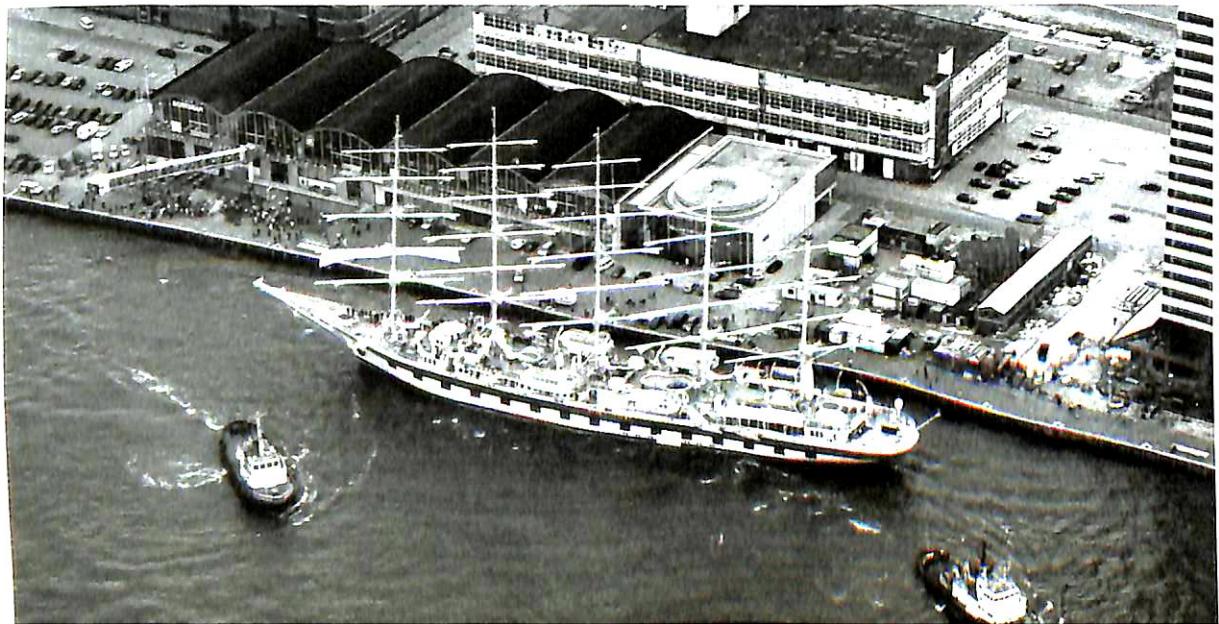
▲デモ用横帆が縮帆されている

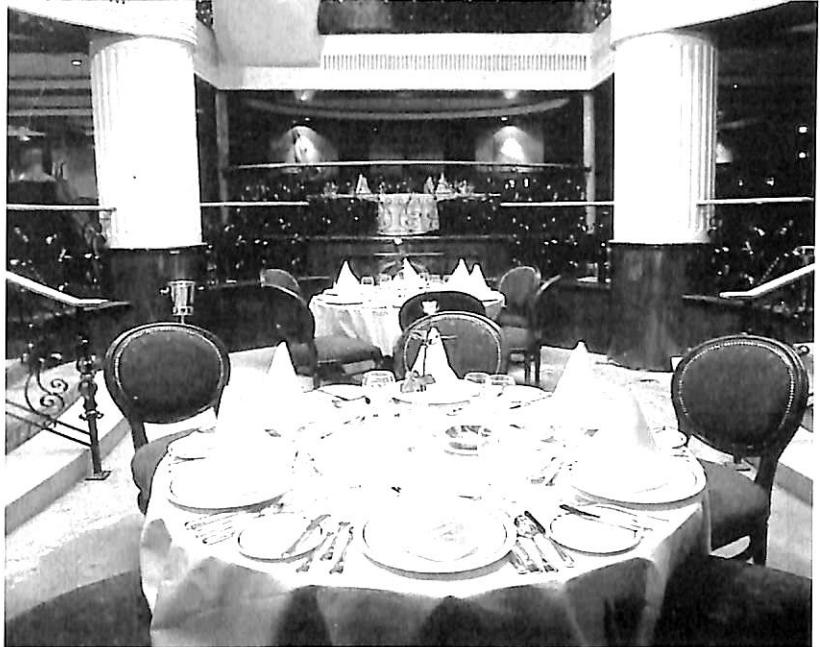
[ROYAL CLIPPER主要目]

船主	White Star Clippers N. V.	船級	Lloyd's Register of Shipping
運航社	Star Clippers Ltd.		LRS + 100 A - 1, + LMC.
建造所	Cenal Shipyard, Gdansk, Poland. Merwede, Glessendam, Holland.	旗籍	Luxemburg.
建造番号	# 681	船客収容力	228pax
建造価格	about US\$ 55 million	船客用客室数	114
竣工	July 15, 2000.	海側客室比	81%
命名式	July 28, 2000.	乗組員数	106
命名者	Her Majesty Queen Silvia of Sweden.	乗組員用客室数	45
处女航海	July 29, 2000.	乗組員用公室	2
全長	133.22m	機関	Diesel engines propulsion :
船幅	16.00m		2 × 1865 kw 1600rpm Caterpillar 3516-B SCAC.
喫水	5.60m		Diesel engines propulsion :
総トン	5,061.00GT.		2 × 1200 e kw 1500rpm Caterpillar 3512-B SCAC.
縦帆面積	(42 sails) 4,666m ²		Main engine PTO : 1 × 1200 e kw
マスト高	58.50m		Diesel engine emergency generator :
船速	(Sailing) 20.00kn		242 e kw 1500rpm MAN D-2866 LXE.
			Bowthruster : ABB Zamtech 370 kw.

- 30 -

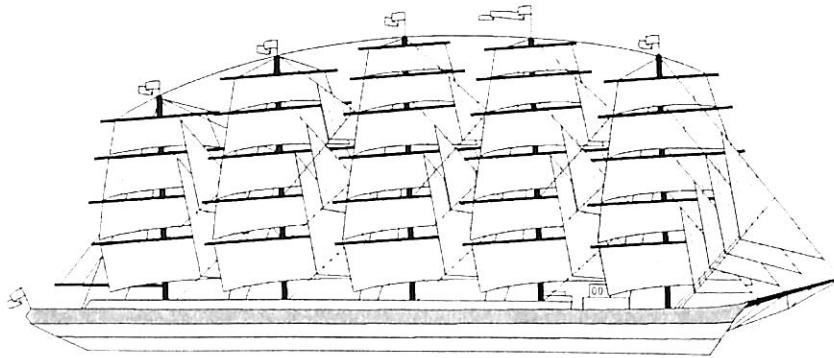
▼ロッテルダム港の客船ターミナルを離れる



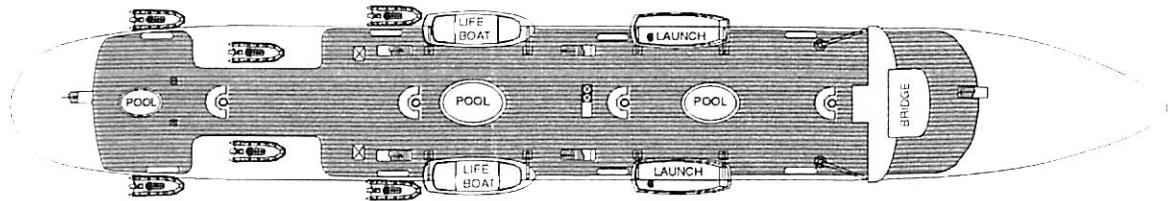


“ROYAL CLIPPER”
Clipper Dining Room

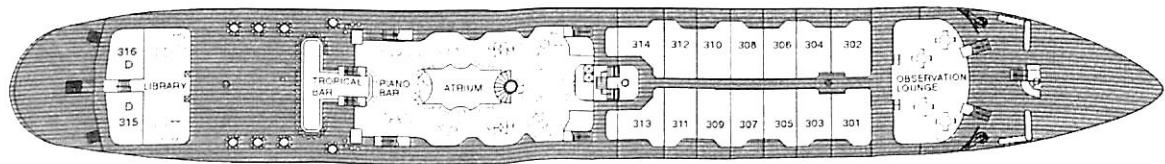




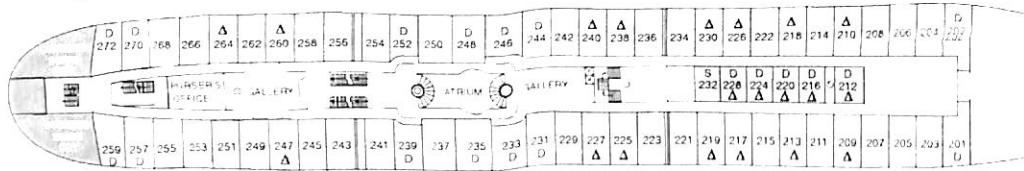
Sun Deck



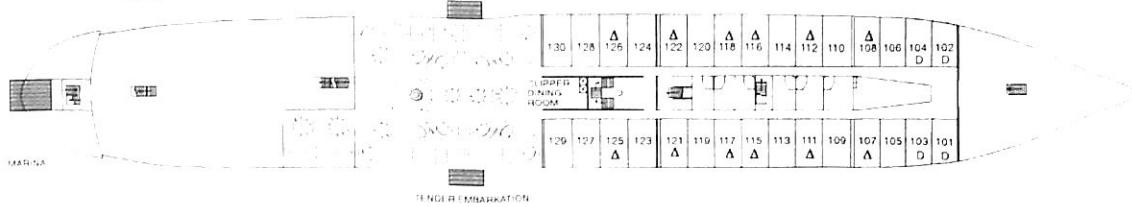
Main Deck



Clipper Deck



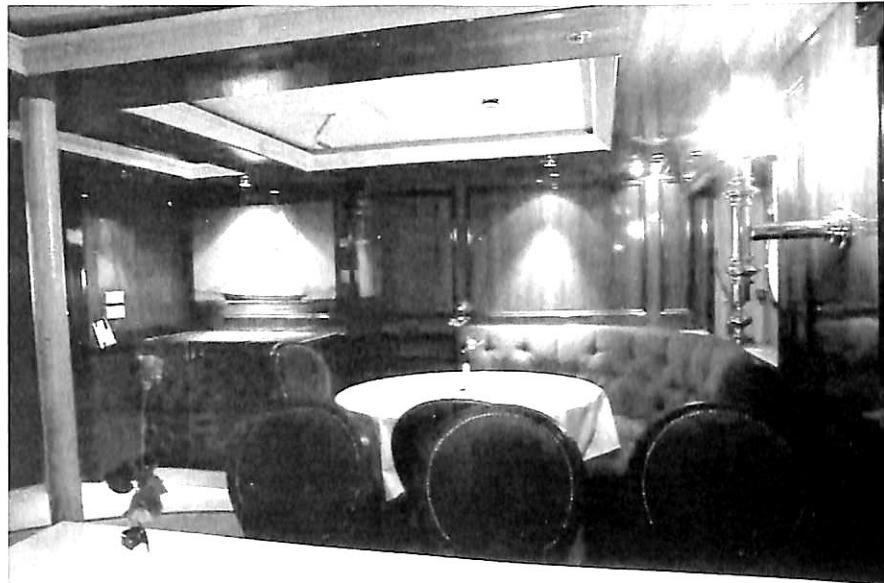
Commodore Deck



▲ "ROYAL CLIPPER" DECK PLAN



客室



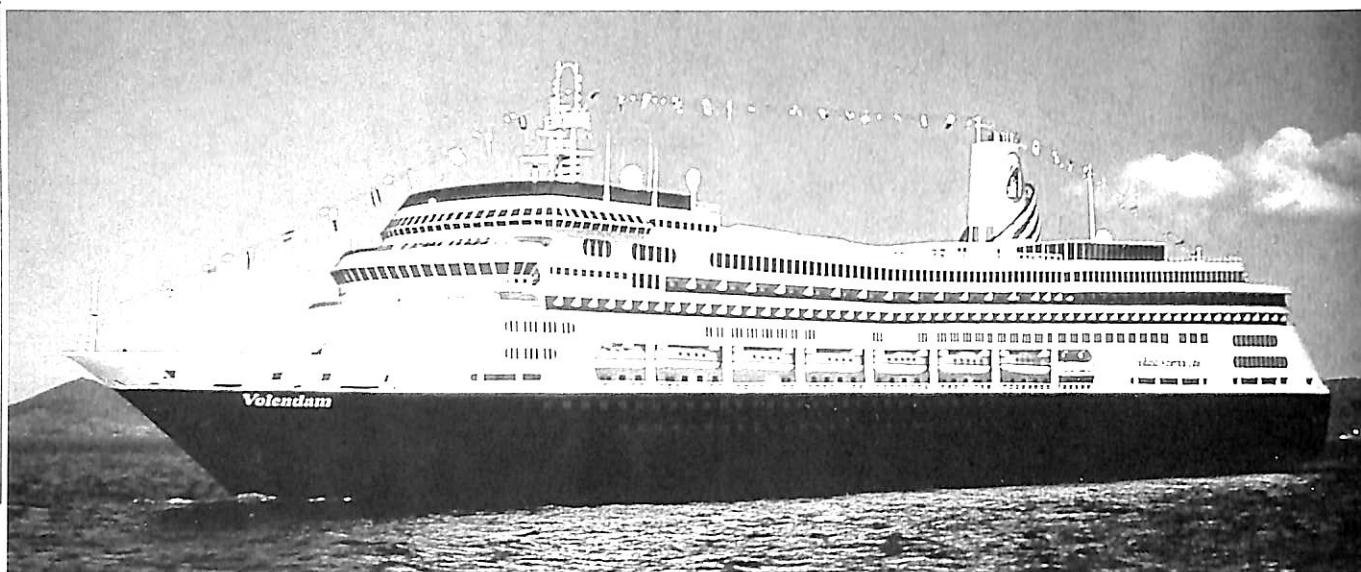
ダイニングルームの1部▶
ロビー

洗面室



Photographs : Star Clippers.

"VOLENDAM"



オランダアメリカラインの最新鋭高級姉妹客船 "VOLENDAM"・"ZAANDAM"

—Holland America Line—

Yoshitatsu Fukawa
府川義辰

カーニバルグループ (Carnival Corporation) 配下のオランダアメリカライン社 (Holland America Line : HAL) は、1996年7月12日に2隻65000トン型の高級指向客船をイタリアのフィンカンティエリ社 (Fincantieri shipyard) に発注・建造契約に調印した。同社は、1993年に始まった1隻シリーズの“スタテンダムクラス”(Statendam class) 客船の第1番船“ビーンダム”(Veendam) の竣工・就航により、そのシリーズを完了したばかりであった。1997年9月には、新旗艦“ロッテルダム”(Rotterdam) (66000GT, 1320pax, 25kn) が竣工・就航、その船体整備の充実ぶりが注目されていたところに、更に2隻の追加発注となり、世界の客船界の注視を浴びた。

第1船である“ボーレンタム”(Volendam) は、1999年8月21日が当初予定の竣工・引渡しがあったが、10月30日に延期されフィンカンティエリ社のマルケヘラ造船所 (Marghera S. Y.) で引き渡された。11月12日にはホートエバグレーズの26号栈橋にて命名式が挙行され、世界のプロテニス界のトッププレーヤとして最近まで活躍していたクリスエバートさん (Ms. Chris Evert) により公式に命名された。本船の名は、H. A. L. 126年の歴史の中の第三代の同名船である。その日の晩に处女航海に鹿島立ちした。

1999年5月の発表では、第2船の“ザーンダム”(Zaandam) は、1998年6月26日に起工 (Keel Laying) され、2000年4月6日が公式引渡日とされていた。



◀ "Marco Pole" Restaurant
船客収容力 88席



▲ “Frans Hals” Show Lounge

しかし、進水・浮上日が、2000年4月30日とされており、
公式引渡日は10月30日であった。H. A. L.の船名は、[dam]
と言う三文字で終わっているのは、ご存じのとおりである。
これは「川」を意味しており、本船の場合Zaan Riverとなる。
本船の名は、H. A. L.127年の歴史の中の第三代同名船
である。

この姉妹が共に就航した時点では、10隻の船隊を擁し、
船隊の船齢平均は6.8年と言う新鋭船の若い船隊となる。
この時点に於ける全船隊の船客収容力は、13,182床となる。
しかし、船隊内の最長老である“ニューアムステルダム”を、
2000年10月にアメリカンクラシックホヤースへ
売却、同年12月9日から、ホノルルをベースにユナイテッド
ステーブラインの“ハトリフォット”と改名就航している。



“Jugenstil Vase” Frans Hals Lounge ▲



“Piano Bar” ▶

“ZAANDAM”



▲ “ZAANDAM” in Venice

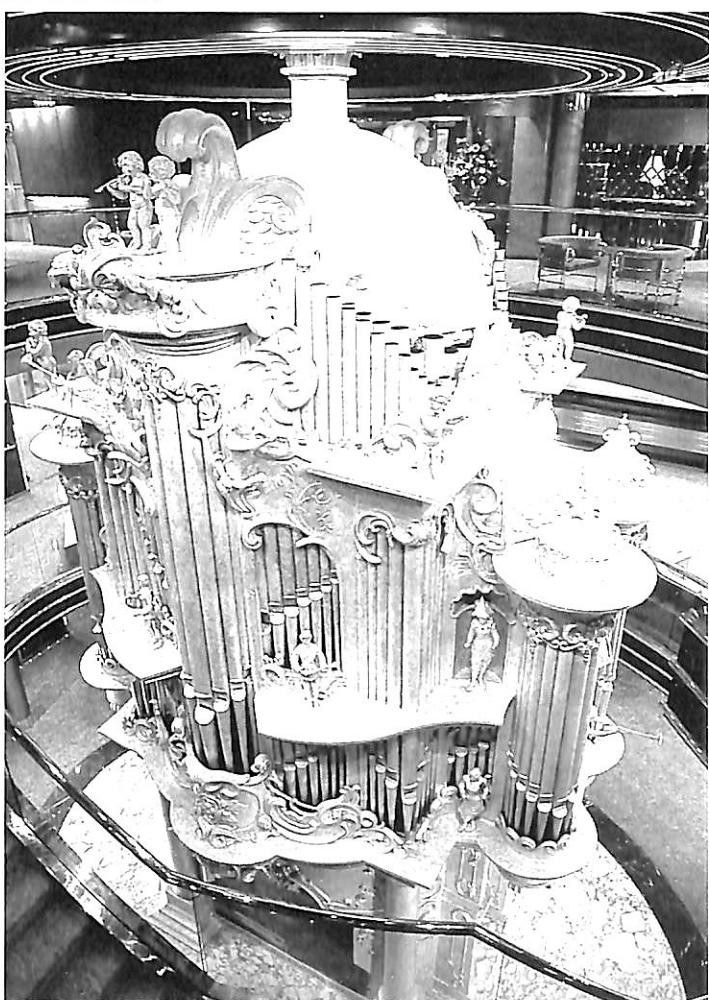
[VOLENDAM·ZAANDAM 主要目]

船主	Carnival Corporation	船速	20.20kn
運航社	Holland America Line	船級	Lloyd's Register RINA
建造所	Fincantieri Cantieri Navali Italiani	旗籍	Holland
建造番号	6035	船客取容力	1410 (1824 : Max)
建造価格	US\$ 300 million	船客用客室数	720
竣工	1999年10月30日	海側客室比	82%
命名式	1999年11月12日	乗組員数	617
命名者	Ms. Chris Evert	乗組員用客室数	359
処女航海	1999年11月12日	推進機関	Cegelac motors with KaMeWa
全長	238.10m	出力	26 MW (13 × 2)
船幅	32.25m	主機	Sulzer V12 40 ZAS × 5
喫水	7.80m	総出力	10S 8640 kw at 514 rpm
総トン	60,906GT		

“ZAANDAM”



▲ “Main Lounge” の一部



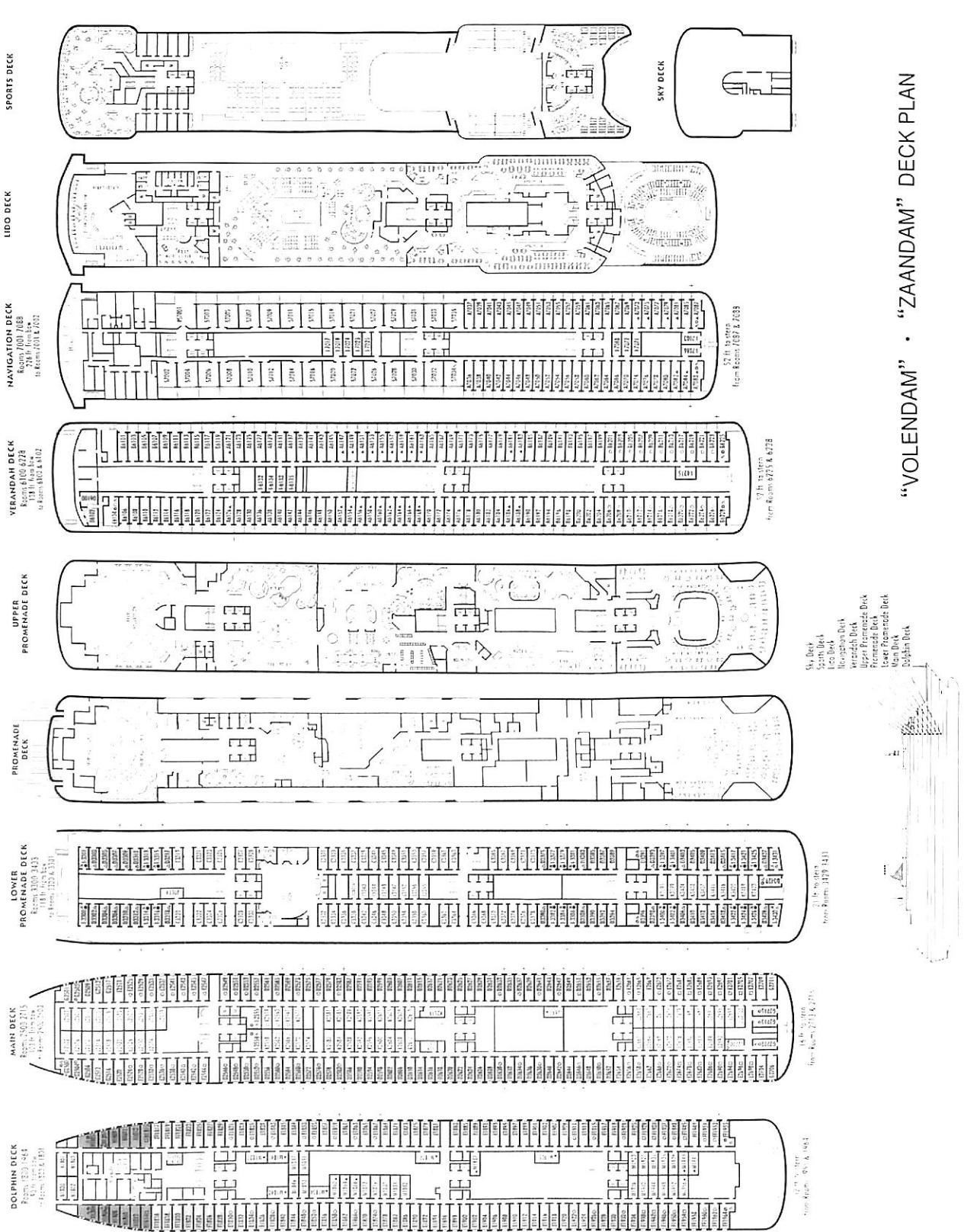
▲ Atrium

Photographs : Holland America Lines



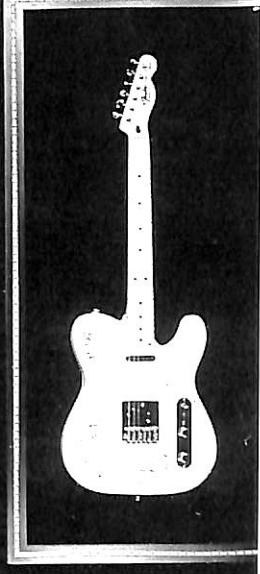
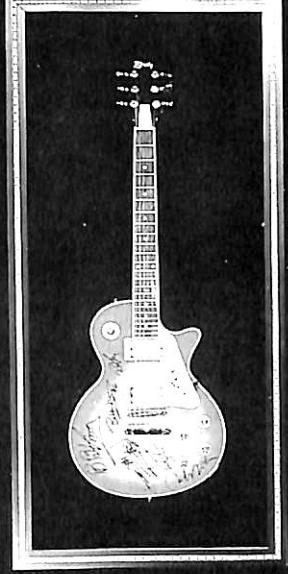
▲ “Seaview Lounge” 船客収容 75席

"VOLENDAM" • "ZAANDAM" DECK PLAN



“Crow's Nest” Lounge▶

船客收容 250席



“ZAANDAM”

▲ “Rock Memorabilia”



“Verandah mini suite”▶

帆船 日本丸、海王丸のポスター・パネル

日本を代表する運輸省航海訓練所の練習帆船「日本丸」「海王丸」が総帆をあげ快走する写真。あなたの部屋に海の息吹と潮風を送り込みます。パネルには「日本丸」「海王丸」とも縦位置と横位置の写真があります。飾る場所によりお選びください。（写真右はパネルの「日本丸」と「海王丸」）

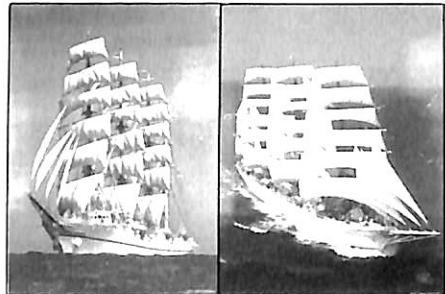
◆ポスター◆

写真＝カラー、縦位置のみ 寸法＝縦103センチ、横73センチ
価格＝2枚1組で税、送料込み1,000円、いずれか1枚のみ900円

◆パネル◆

材質＝アルミフレームドライパネル（つり下げ用チェーンつき）

写真＝カラー、各船縦位置と横位置 寸法＝52センチ×37センチ 価格＝1点4000円（税、送料込み）



第4回海洋文学大賞受賞作品集

第4回
海洋文学大賞受賞作品集

日本海事広報協会が日本財団の特別協賛をえて実施した第4回海洋文学大賞の小説・ノンフィクション部門と童話部門の入賞作品（大賞および佳作）の全文と、募集と選考について、曾野綾子選考委員長の選考を終えて、各選考委員の選評などを掲載。B6判 192ページ
定価950円（本体905円）

【第1～3回海洋文学大賞受賞作品集】発売中（定価950円、本体905円、B6判、192ページ）

「日本の港湾 2001」

日本の主要港湾の概況、港勢、港湾施設、臨港部の関連施設、港湾サービス業者、出先官公署の最新データを掲載。マリーナ、シーバース、関係官庁などの一覧も巻末に収録しています。監修・運輸省港湾局
定価16,800円（本体16,000円） A4判、本文約950ページ

海上の友

海上労働に関わる行政、経済、労働、生活などについての報道、解説や読み物、体験談、エッセーなどを掲載した新聞。

発行＝毎月1日、11日、21日発行（合併号があり年間31回発行）

判型＝タブロイド8ページ（新年号と「海の日」号は増ページ）

年間購読料＝10,323円（税、送料込み）

海と船の雑誌・ラメール

LA MER

新船情報、旅客航路情報、クルーズ体験、離島紀行から海の科学や民俗、料理など幅広い内容の海と船の雑誌。

発行＝隔月発行（1月、3月、5月、7月、9月、11月）

判型＝B5判、104ページ

定価 610円（本体581円） 送料込み年間購読料5,100円

お申し込みと問い合わせ 財団法人 日本海事広報協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-23-17 マリンビル

電話03-3552-5034 FAX03-3553-6580

Eメール＝marinepr@sepia.ocn.ne.jp 海事広報ホームページ＝<http://www.kaijipr.or.jp>

12月のニュース解説

米田 博

海運・造船日誌

11月17日～12月13日

○海運・造船問題

●一般政治経済問題

11月

- 17日 ○港湾審議会が運輸相の諮問「港湾の開発、
(金) 利用および保全ならびに開発保全航路の開
発に関する基本方針」の変更を答申した。
○第9回日韓欧米(JEKU)造船首脳会議が
横浜で開催され(12カ国, 25社, 4団体,
54人)各国造船会社の首脳が必要の先食い
につながる増産競争を回避することなどを
確認した議長声明をだして閉会した。

- 21日 ●野党4党が共同提出した森喜朗内閣に対する
(火) 不信任決議案は、衆院本会議で否決された。当初、賛成する意向を示していた自民
党的加藤紘一氏、山崎拓氏らは欠席した。
●ペルーのフジモリ大統領が19日訪問先の東
京で辞任の意向を表明したが、ペルー国会
は辞表を受理せず採決で罷免を決めた。

- 日本郵船、商船三井、川崎汽船の海運大手
3社の9月中間決算はともに過去最高の經
常益を確保した。燃料油価格の高騰と円高
を市況好転とコスト合理化、合併効果で吸
収した。

- 22日 ●事業規模11兆円の経済対策を主眼にした今
(水) 年度の一般会計補正予算案(4兆7,832億
円)が参院本会議で可決、成立した。

- 24日 ○大手重工業・造船の9月中間決算の連結経
(金) 常利益は、三菱重工業、NKK、石川島播
磨重工業、三井造船は黒字であったが、川
崎重工業、住友重機械、日立造船は赤字で
あった。

25日 ●地球温暖化防止策を話し合うためにオラン
(土) ダで開かれた気候変動枠組み条約第6回締
約国会議(COP6)は、合意を得られな
いままに閉幕した。

28日 ○運輸省は2000年度版運輸白書を発表した。
(火) 来年1月から国土交通省が発足するので、
今回が最後の運輸白書となり、わが国経済
社会の発展とともに戦後の日本型交通体系
の形成過程を概観している。

29日 ○海運造船合理化審議会内航部会は2000年度
(水) から2004年度まで5年間の内航適性船腹量
を策定し、運輸相に答申した。減船効果で
貨物船はわずか不足となったが油送船は船
腹過剰が続いている。

12月

1日 ●BS(放送衛星)デジタル放送が開始され
(金) た。

5日 ●第2次森喜朗改造内閣発足。宮沢喜一蔵相、
(火) 河野洋平外相など6閣僚が留任し、行政改
革と沖縄・北方対策担当の特命相に橋本龍
太郎元首相を起用した。運輸相(来年1月
6日から国土交通相)は扇千景建設相。

○日韓造船課長会議がソウルで開催された。
主議題は欧韓造船紛争。

○欧州委員会(EC)産業理事会は今年いっ
ぱいで船価9%助成を打ち切ることで合意。

8日 ○「中小企業経営革新支援法」に中小造船
(金) 所(設備能力1万総トン未満)と舶用メー
カーが政令指定された。

11日 ○運輸技術審議会(星野二郎会長)は「21世
(月) 紀初頭の交通技術開発の基本的方向につ
いて」を扇千景運輸相に答申した。海上交通
分野では「海のITS」「海上ハイウェイネット
ワーク」の構築を技術開発目標に挙げた。

IMCO (Inter-Governmental Maritime Consultative Organization) 「政府間海事協議機関」は1958年に設立されましたが、やがて1982年にIMO (International Maritime Organization) 「国際海事機関」と改称されました。したがって私がニュース解説を担当した昭和58(1983)年以降は丁度IMOの活動期間と一致しますが、この間がそれ以前と根本的に違うのは、何事を始めるにも地球環境への影響を無視しては行われなくなつたことです。それでも世界は地球温暖化を阻止することが出来ず悩んでいますし、タンカーの事故による油の流出による海洋汚染も後を絶ちません。

IMOではこれらの問題を主としてMSC「海上安全委員会」とMEPC「海洋環境保護委員会」で扱っていますが、今回はこの間のテーマを羅列することによりこの問題の重要性を認識しておくこととします。

異常海難防止システム	(昭和62年5月)
北海油田爆発	(63年7月)
天然ガス見直しとLNG船	(平成元年12月)
海洋汚染防止とダブル・ハル/ボトム (IMOに備えての日本の動き)	(2年3月)
米国の油濁防止法(IMOおよび日本の動向)	(2年10月)
IMOの海洋汚染防止策(IMO・MEPCのダブルハル合意、IMO海洋汚染防止新条約)	(2年12月)
湾岸戦争と海(ペルシャ湾に原油流出)	(2年2月)
タンカー構造に関する日本提案	(3年2月)
伊VLCC事故と地中海油汚染	(3年5月)
中型タンカーの二重船殻化	(3年5月)
タンカー構造規制(第31回IMO・MEPC)	(3年7月)
ECのモーダルシフト志向	(4年10月)
ブレア一座礁流出油事故	(5年1月)
マラッカ海峡のタンカー事故(マースク・ナビゲーターからの原油流出)	(5年2月)

IMOの海上安全委員会(人的要因による事故防止対策、ISMコード)	(5年6月)
第34回MEPC	(5年7月)
老朽タンカー解撤促進	(6年9月)
老朽タンカー解撤促進	(7年9月)
船舶検査をめぐる情勢(国際的には規制強化)	(8年5月)
重油流出漂着対策(ナホトカ号事故の経過、ナホトカ号事故原因調査)	(9年2月)
現存バルクキャリアの安全問題(IMOの海上安全委員会、第67回MSC経過と船主協会意見、ナホトカ号事故の補償問題)	(9年3月)
環境低負荷型舶用推進プラント(スーパー・マリンガスタービン技術研究組合発足、海洋環境保全対策)	(9年4月)
現存バルクキャリア構造強度	(9年6月)
東京湾で原油流出事故	(9年7月)
タンカー事故と流出油防除	(9年8月)
IMOの新大気汚染防止条約	(9年10月)
地球環境と海運造船(温暖化防止京都会議、海洋汚染防止と造船)	(9年12月)
内航船のCO ₂ を3%削減	(10年2月)
船舶海洋工学と環境(東大工学部環境海洋工学科発足)	(10年5月)
ISMコード発効強制化(ISMコードとPSC、世界におけるMOUの現状)	(10年7月)
海事行政の方向	(11年2月)
スーパー・エコ・シップ(海のITSの推進)	(12年9月)

執筆引き継ぎの弁

18年にわたった「ニュース解説」の執筆を若い方々に引き継ぐことになり、肩の荷が降りた感じと、なんとはなしにさみしい感じとがないまぜになつて複雑な思いです。ともあれこのページがいつまでも海運造船界にとって役に立つ存在であることを願っています。

年頭所感

社団法人 日本造船学会会長
間野 忠

平成13年をそして21世紀を迎えるにあたり、謹んで新春のご挨拶を申し上げます。

昨年を振り返りますと、海運・造船界は、一昨年暮れ英仏海峡で荒天に遭遇しビスケー湾で船体折損を生じ沈没した、マルタ籍の3万7千DWT型タンカー「エリカ」の重油流出事故の対応に明け且つ暮れた一年間と言っても過言ではないと思います。

この事故によって、いわゆるサブスタンダード船と呼ばれる船舶を海運市場から排除しようとする動きが非常に強まり、また「エリカ」が26年の船歴の間に、何れもIACS(国際船級協会連合)メンバーの4船級協会を渡り歩いて来た事実による、従来は、船主と船籍国の責任であると捉えられ、強化がEU(欧州連合)から提唱されました。

この指摘に対しては、IACSとして対応策を検討し、検査の強化を図ることとなりましたが、このような問題は、何処かの一部門が努力しても解決出来るものではなく、サブスタンダード船対策は船主・船舶管理会社を始め、船籍国、船級協会、荷主、保険会社、寄港国など関係する全ての機関が共通の認識を持ち、それぞれの役割に於ける責務を果たすことにより相互補完を行って初めて実効が上がるものであり、このためには近年の情報



技術を取り入れたシステムの構築が必要であると考えております。

一方、「エリカ」事故の原因究明は行われてはいるものの、確定的な原因は未だ不明ですが、IMO(国際海事機関)の場で、このような事故の再発を防止することを目的としてダンカーのダブルハル化の大幅な促進が図られることとなりました。このダブルハル化は、1980年代の大型タンカーの座礁事故を契機に条約が制定されたものであり、サブスタンダード船の解決策として万能ではありません。というのは、シングルハルに比べ構造が複雑になった結果、保守・点検は難しくなり、老朽化した際の哀耗に伴う破壊については未知の分野であり、依然として問題を生ずる可能性があると考えるからです。

また、船舶が事故を起こした場合の油流出問題は、貨物油に留まらず燃料油についても昨年暮れのIMOの場で検討が始まり、燃料タンクについてもダブルハルにより保護をすることとなる可能性もあります。勿論、現在大量に建造されている大型コンテナ船の一部には、船側付きの燃料油タンクが喫水線上に達しているものもあり、破口を生じた場合の油流出を考えるとその配置を再考すべき点等もありますが、全てのタンクの保護をダブルハルで行わなければならないという考え方では、船舶の大型化ひいては鋼材使用量の増加・主機馬力の増大につながり、資源の無駄使い・環境負荷の増大をもたらすものとも考えられます。

今回「エリカ」が運んでいた油について、一部

では有害廃棄物であったとの報道がされました。これは船舶が燃料油として使用しているものと同種の油であるようです。このようなことを考えると、船舶の燃料油として、現在のような廃棄物に近いC重油ではなく軽油の類を使用することとすれば、流出事故が生じた場合でも、その揮発性により海洋・沿岸に及ぼす被害は大きいものとはならないであろうし、何れ船舶にもその規制が強化されるであろう排気ガス中のSO_x対策としても有効であり、燃料油のヒーティング・スラッジの処理も不要、また機関のメインテナンスも容易になるのではないかと考えます。

さらに環境保全を考えた場合、船舶の解撤の問題があります。これは近年、環境保護活動を行っているグリーン・ピースが標的としたことにより表面化したテーマではありますが、船舶に寿命があり、代替建造を行う以上避けて通れない課題で、日本においては以前から造船業の仕事量確保・過剰船腹量の解消等の観点から前向きに取り組んできた問題です。しかし、一部には発展途上国に任せておけば良いとの考え方もありましたが、「有害廃棄物の国境を越える移動およびその処分の規則に関するバーゼル条約」に基づく有害廃棄物として、日本から解撤用の船舶輸出が対象となり、受け入れ相手国の環境担当官庁の許可等が必要という状況になりました。また、船舶の解撤は、解撤船買船価格と解体後の鋼材スクラップ売却価格に変動があり、悪い時期には買船価格が売却価格を上回ることさえ有り、事業として継続することに

困難を伴います。これを前提に考えますと、99年6月にアムステルダムで開催された「シップ・スクラップ・サミット」の場に於いて「スクラップ」を「リサイクリング」と改称したことは誠に当を得ている訳で、国内のある解撤事業者の方からも「解撤船から何を生み出せるかを考えながら仕事をしている」との話を聞いたことがあります。船舶の建造時には何も問題とならなかった材料が、時を経て有害物質となるようなものは論外としても、陸上の自動車や家電製品と同様、船舶もリサイクルを前提に設計・製造を行わなければならぬ時代になったことを痛感致します。

このように、地球環境の保全を考えた場合、船舶として解決しなければならない問題は尚多々あり、年頭に際しまして、海運・造船界としても前向きに取り組んでいかなければならないと心しております。

今後の造船学会の課題と致しましては、関西造船協会及び西部造船会との一層の緊密化を図ると共に、(社)日本船用機関学会、(社)日本航海学会等造船に關係の深い学会・協会との連携を深め、事に際して強力且つ効果的な事業展開を図れるよう努めるべきであると考えております。

最後になりましたが、平成13年が皆様方にとりまして実りの多い年となりますことを祈念し、また、わが国にとりまして新世紀の飛躍的な1年目となることを願いまして年頭のご挨拶と致します。

● 新造船紹介

気象庁向け海洋気象観測船“啓風丸”（2世）の概要

三井造船株式会社 千葉造船工場
設計部

1. まえがき

本船は、気象庁の海洋気象観測船として、三井造船・千葉工場において、1999年4月20日起工、2000年4月25日進水、9月27日竣工・引渡された最新鋭の気象観測船である。

気象庁は、6隻の観測船を保有し、日本近海、西太平洋上で海洋観測、海上気象観測を行っている。東京本庁所属の先代「啓風丸一世」は、昭和44年に建造されて以来、約30年にわたり主に本州南方海域において高層気象観測、海上気象観測、気象レーダ観測、海洋観測等の観測業務に日夜従事してきた。

しかしながら、世界的な異常気象の発生やエルニーニョ現象・地球温暖化などの気候変動・地球環境問題への対応を強化するため、気候予報やエルニーニョ予報、地球観測に必要な北西太平洋域の海洋観測温暖化予測の精度向上に必要な北西太平洋域の海洋観測を強化することが要求されるようになり、この度、新しいハイテク船として「啓風丸二世」が建造された。

本船就航後は北西太平洋と赤道域で、海洋表層から深層までの水温・塩分・海流や洋上大気・表面海水中の二酸化炭素濃度などの詳細な観測を行う。

2. 主要目

全長	81.39 m
垂線間長	72.00 m
幅（型）	13.40 m
深さ（型）	6.00 m
満載喫水	4.66 m
総トン数	1,483トン
国際総トン数	1,882トン
船級・資格	JG 第3種船
主機 4サイクル中速ディーゼル機関	4,000 PS × 600 rpm × 1台
航行区域	遠洋区域、国際航海
試運転最大速力	17.07ノット
航海速力	14ノット
航続距離	10,000浬



▲ 公試運転中の“啓風丸”（2世）

3. 基本計画

本船の設計にあたり、特に留意した点は次の通りである。

(1) 船型、安全性能の向上

外洋域において予想される荒天時の航海および観測活動に対して、良好な凌波性をもたせるため、船型は長船首樓付平甲板型とした。また、後部よりの波の打ち込みを減少させるために、船尾暴露部甲板は隆起甲板とすると共に観測機器の機能的配置に工夫をこらした。これにより、船尾暴露部甲板は、適度な海面からの高さが確保できると共に、観測機器の海中への投入・揚収が容易となり暴露部における作業の安全性の向上を図った。

さらに、全般的な作業性および乗り心地を向上させるため、受動制御型の減揺水槽を採用して、船体横揺れの軽減を図った。

(2) 操縦性能の向上

微速航走観測時に要求される微妙な操船性や良好な保針性向上のため、可変ピッチプロペラ、可変ピッチバウスラスター、ベクトワインラダーを装備した。

また、操舵室のほかに遠隔操縦室と後部甲板においても、ジョイスティックレバーを用いてベクトワインラダー

を自由に操作できるようにしたため観測現場を間近に見ながらの微妙な操船を可能としている。

(3) 観測性能の向上

近代化、自動化された最新鋭の観測機器を搭載し、観測の効率化、観測精度の向上が図られている。特に CTD 観測は海洋観測作業の中で使用頻度が最も高く、船体動揺のもとでの投・揚収作業が必要となること、長時間の作業が強いられることを考慮し、本装置については振出し・振り込み・揚収・降下の作業について検討を行い、作業の自動化・遠隔化・手動とするか明確に区分けし、信頼性の高い装置となるよう考慮した。また、CTD 投・揚収装置であるクレーンにはヒープモーションコンペニセータを装備し、測定の精度向上と観測作業の安全性向上を図った。

また、本船の目玉の一つである曳航式 CTD による観測作業の安全向上を図るため、観測支援装置を機能的に配置し、作業甲板を広く使用できるようにした。

(4) 居住性の向上

長期にわたる観測航海での居住性の向上を考慮し、居室は予備室を除き個室とした。また部員の一部の部屋は和式的な考え方を取り入れ、限られた空間の有効利用をはかった。

静かな居室空間を確保するために効果的な低騒音対策を行い騒音レベルの低減を図った。

調理室を食堂に隣接して配置すると共に、食器自動洗浄機を設置し、配膳作業・食後の後片づけの省力化を図った。また、生ゴミ処理装置を装備し、環境対策にも十分配慮した。

4. 一般配置

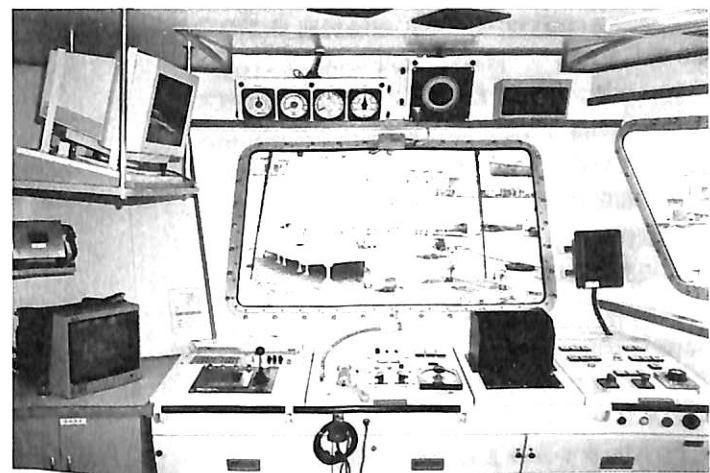
本船は長船首樓付一層甲板船である。

船体をほぼ中央にて区画を前後に 2 分割し、前部を観測室・居住区画、後部を機関区画とし、居住区画を騒音・振動源から遠ざけている。また、機関区画上部の後部暴露甲板に広いスペースを確保し、主観測甲板としている。上甲板前部の右舷に観測員の居室及び衛生区画、船体中央部から左舷にかけた広い区画を観測室関係に当てている。

第二甲板には部員及び観測員の個室が配置さ



▲ 操舵室



▲ 遠隔操縦室



▲ サロン

れている。また、後部水密隔壁に水密滑戸を設け、機関制御室へも出入り出来るようになっている。

船首樓甲板には食堂・調理室・会議室等の公室関係を配置し、後部暴露部には A.R.T.（減揺タンク）及びボート関係の他左舷部には主要観測機器の一つである一体化された 7,000 m CTD ハンドリングクレーン及びワインチユニットが配置されている。

ブリッジデッキには士官関係の個室及びサロンが配置され、後部左舷には CTD の投・揚収及び操船が遠隔で行えるよう遠隔操縦室が設けられている。

5. 船体部概要

船殻構造については、「NK 鋼船規則」、「同 CS 編」を適用し、横肋骨方式を採用している。

舵はベックツインラダーとし、十分な操舵性能と保針性が得られる形状および面積を有するものとしている。また、観測作業の安全性向上を目的に船尾暴露甲板は隆起甲板として乾舷高さを観測作業に最適な高さとしている。

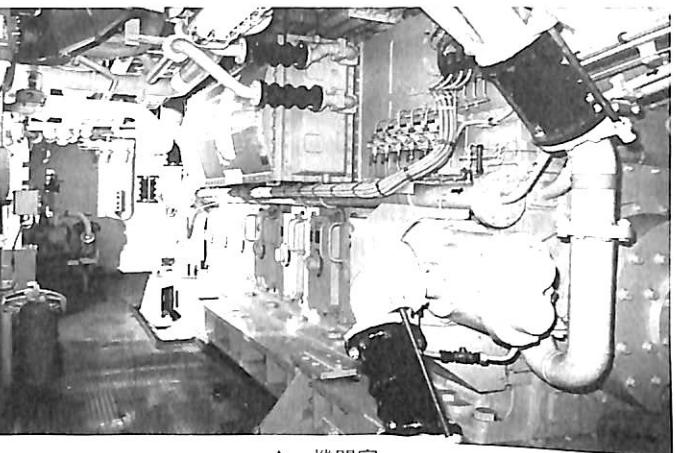
甲板機械は電動油圧方式とし、前部・後部で分割し、2 系統としている。前部の系統は、揚錨機、前部係船機用、後部系統は、後部係船機、中折式観測クレーン、ハッチ、5,000 m 観測ウインチおよび A フレーム用としている。また、CTD 用のクレーン及び 7,000 m ウィンチ、曳航式 CTD 用の 500 m ウィンチは特殊であるためそれぞれ単独で電動油圧ユニット内蔵型としている。

空気調和装置はコンデンシングユニットを R-22 冷媒・直接膨脹式 1 基とし、エアハンドリングユニットは 2 基装備している。第 1 系統は主に長船首樓甲板、船橋甲板及び操舵室用とし、第 2 系統は主に上甲板、第 2 甲板用としている。また観測室については分析作業中の設定温度維持のため、パッケージ型空調機を装備し、独立した冷暖房を行っている。

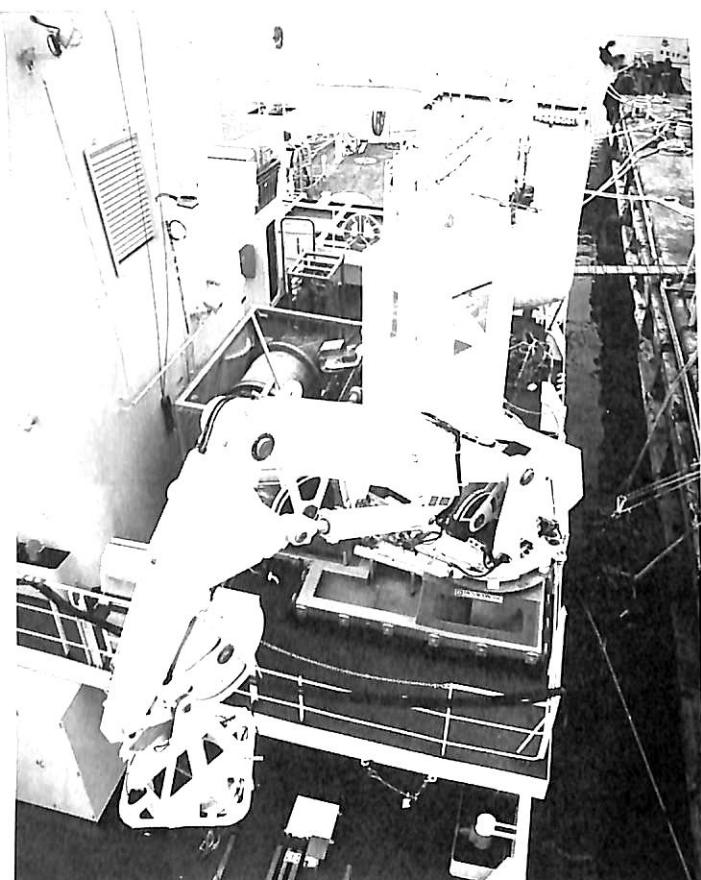
船体部の主要機器要目は以下のとおりである。

揚錨機：

電動油圧式（分離型）



▲ 機関室



▲ CTD 揚降収納装置

チエーンドラム

88.3 kn × 15 m/min

ホーサドラム

39.3 kn × 15 m/min

ワーヒングドラム

29.4 kn × 12 m/min

係船機：

電動油圧式

4 台

ホーサドラム

39.3 kn × 15 m/min

ワーヒングドラム

29.4 kn × 12 m/min

舵取機：			
電動油圧式	192 kNm	2台	
クレーン：			
電動油圧中折・3段伸縮型	8.8 kN×17 m	1台	
空気調和装置：			
電動フレオノン直接膨脹式　圧縮機	55.0 kW	1台	
エアハンドリングユニット	7.5 kW	2台	
糧食冷凍機：			
電動フレオノン直接膨脹式			
冷房能力	1,600 kcal/h	2台	

6. 機関部概要

機関室は、主床、第2甲板の2層からなり、2甲板には前部に機関制御室、左舷に工作室、倉庫と部屋が設けられ、右舷に燃料、潤滑油タンクを配置している。主床は前部から海水ポンプ類、主発電機を並列に3台、主機関、減速機の順に配置している。また後部隔壁を介して軸室が設けられており、中間軸、軸受、馬力計、CPP変節軸を配置している。

主機間に中速ディーゼル機関を採用し、湿式多板クラッチ付減速機を介し4翼可変ピッチハイスキュープロペラを駆動させる。

主機、発電機は防振装置で弾性支持され、主機には防音カバー等の騒音対策を施工する。また空気圧縮機、大型ポンプに対しても防振パッドを施工し、振動/騒音の低減を図っている。

特徴的な機器としては停泊中に冷却海水系にくらげの吸込みを防止するくらげ除去装置と、発電機の排気音を抑えるアクティブサイレンサーをそれぞれ1台装備している。特にアクティブサイレンサーは、停泊中の発電機間排気音の低減を目的に搭載し、排気管端にて70 dB(A)までの消音を可能としている。

尚、本船はセントラル冷却清水システムを採用しており、ほとんどの機器を清水で冷却している。

その他、主機関の信頼性向上を目的として、全てのシリンダーに筒内圧センサーを常設した主機関燃焼解析装置を装備している。

機関部の主要目は以下のとおりである。

主機関：ニイガタ 8M634HX	2,964 kW × 500 rpm	1台
発電機関：ヤンマー ディーゼル S 185L-ET	845 kW × 1,200 rpm	3台
温水ボイラ：タクマ KSA-300SH		1台
C P P：かもめプロペラ CPC95-BF		1台

バウスラスタ：川崎重工 KT-55B1 1,300 mm 1台

7. 電気部概要

本船にはディーゼル駆動の主発電機3台と非常用発電機1台を船内電源として、また一般用と無線用の直流電源として鉛式蓄電池（メンテナンスフリー型）を各1組装備している。

主配電盤はパワーマネジメント機能を有し、発電機の運転台数管理や大容量電動機始動時の電力チェックを行っている。観測装置用としてバックアップ電池を持った静止型精密電源装置を装備している。

発電装置の要目及び主発電機の使用台数は次のとおりである。

主発電機	562.5 kVA × 1,200 rpm
	AC450 V × 60 Hz × 3φ
非常発電機	100 kVA × 1,800 rpm
	AC450 V × 60 Hz × 3φ
通常航海、停泊時	主発電機 1台
出入港、観測時	主発電機 2台

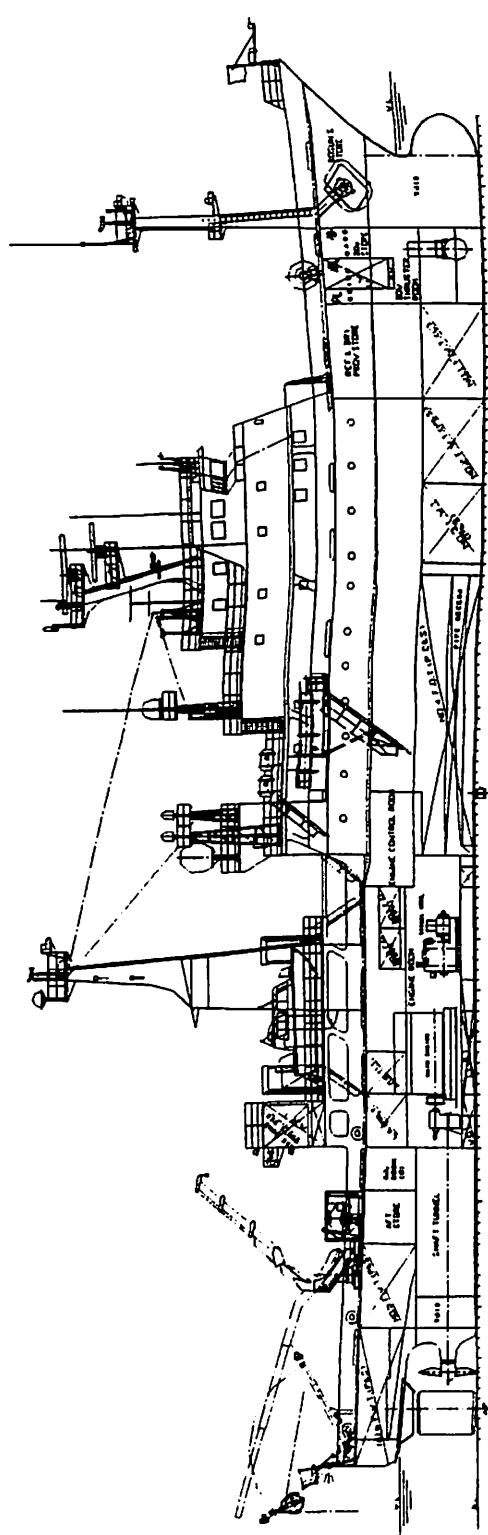
航海装置としては、電子チャート情報表示装置を操舵室に装備し、レーダー映像との合成及びARPAデータの表示が可能で、オートパイロットに接続することによりトラックパイロット機能を有している。自動操舵装置（ベクトインラダー用ジョイスティック操舵装置を操舵室中央と両ウイングに装備）、デュアルマスター・ジャイロコンパス、ディファレンシャルGPS、ドップラースピードログ、音響測深機、ARPA装備のSバンド、Xバンド、ラスタースキャンレーダー等を装備している。

無線装置としては、GMDSS適用（A3海域、船上保守）のMF/HF無線装置、VHF無線装置2式、インマルサットC、ナブテックス受信機、双方向無線電話、レーダトランスポンダ、衛星EPIRBの他インマルサットB等の最新装置を装備している。

監視制御装置としては、機関監視記録装置を機関制御室に20"カラーCRT 2式を装備し、各計測点の監視の他、FOや清水シフト時のポンプの発停をミニック画面から操作が出来るようにしている。また、機関情報の伝達のため延長表示器（15"カラーLCD）を計器室、機関長室および一等機関室装備している。

8. 観測設備

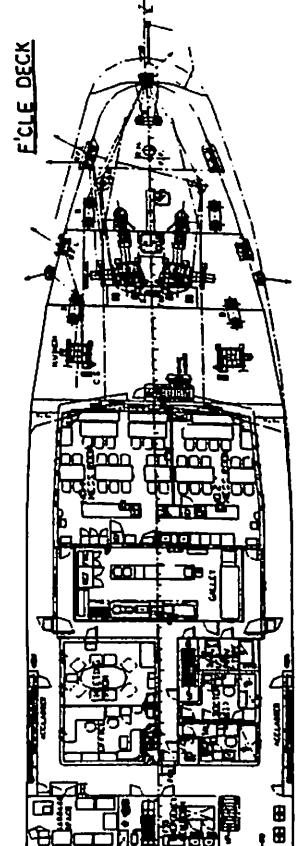
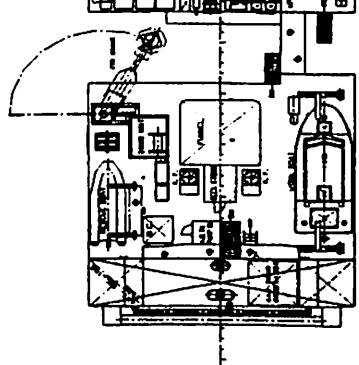
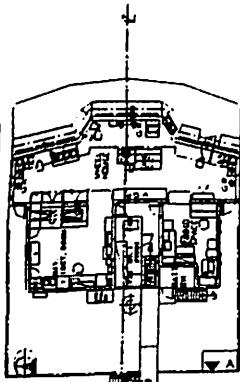
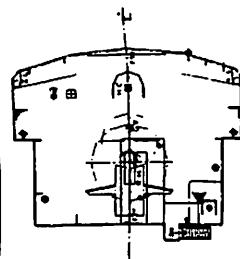
本船に装備した装置の中で、特徴のある装置について以下に記述する。

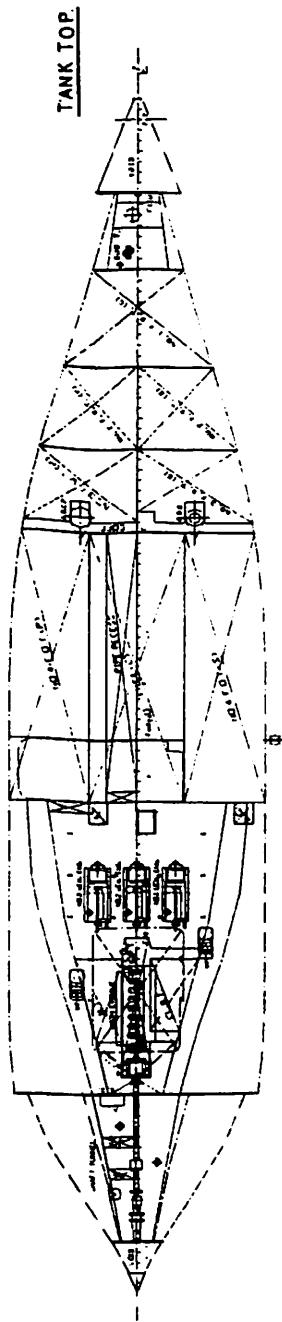
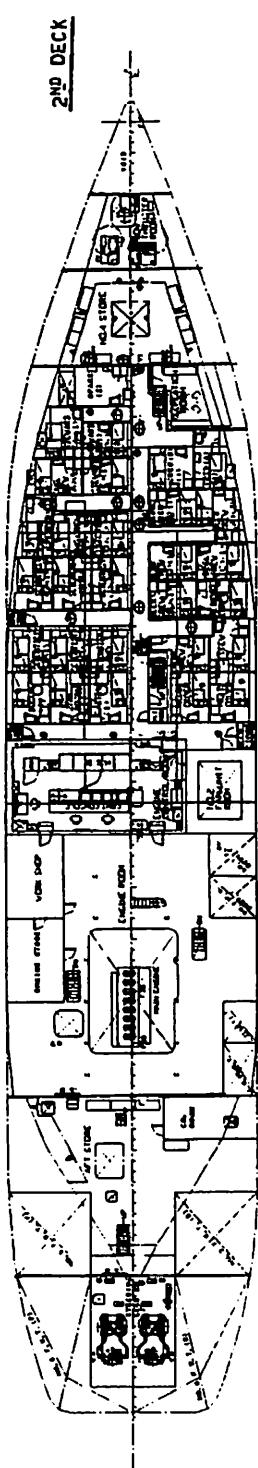
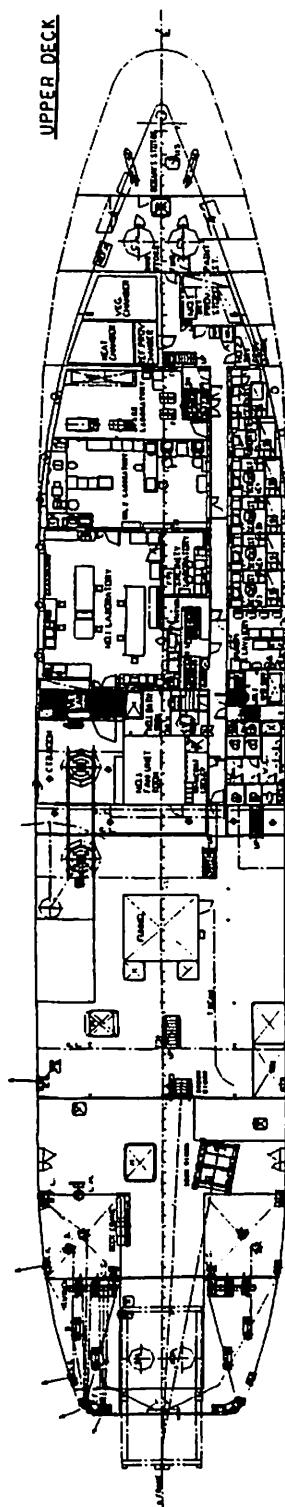


COMP BRIDGE DECK

NAV BRIDGE DECK

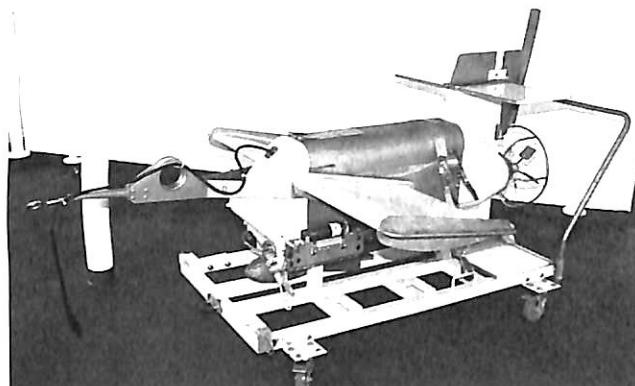
BRIDGE DECK



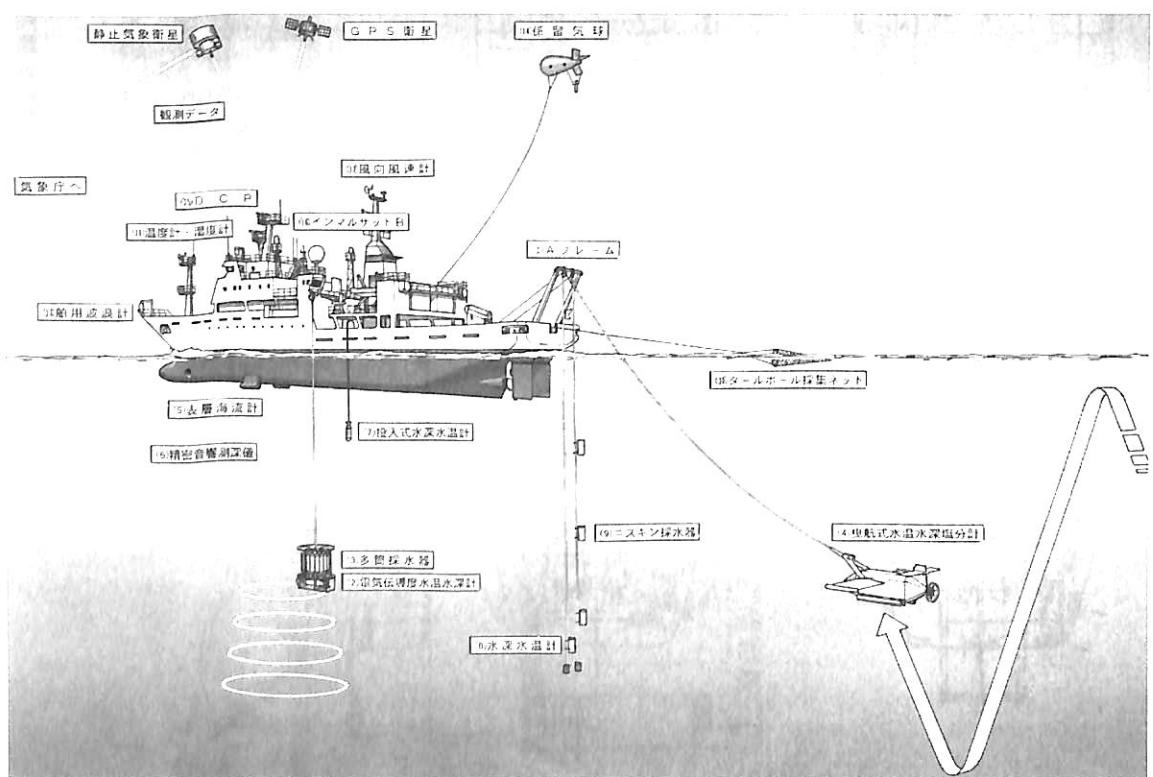


気象庁向け海洋気象観測船 “啓風丸” 一般配置図
三井造船・千葉造船所建造

曳航式水温水深塩分計
(CTD)



啓風丸観測
システムイメージ図



(1) CTD 観測装置

海洋観測においては不可欠となる観測装置である。電気伝導度（塩分）、水温、水深のセンサをケーブルワインチで水中に下ろし、温度、塩分の垂直分布を測定する。センサーはアーマードケーブル（信号線を内蔵する観測用ワイヤーケーブル）で船上局とつながれ測定データはリアルタイムで解析される。また、CTD センサーのまわりには遠隔で任意の水深の海水をサンプリングできるロゼットサンプラーが装備されている。

本装置は、海洋観測作業の中で最も使用頻度が高く、船体が動搖している状態で投・揚収作業が必要である。投入・揚収を行う本装置にはヒープモーションコンペンセーターを装備し、高い精度の測定と安全な観測作業を支援している。

(2) 曜航式 CTD システム

本装置は表層から表層下200 m の海水温と塩分の水平分布及び垂直分布を航走しながら連続的に測定できる観測装置である。地球規模の海洋観測を行う上で広範囲な海域を迅速に観測できる装置として画期的なシステムである。センサーは曳航体に装備されフィン付きのアーマードケーブルにより船上局とつながれている。船上より曳航体をコントロールし、曳航体を上下させながら曳航することにより温度、塩分の垂直及び水平分布をリアルタイムに観測できる装置である。

(3) 航走用二酸化炭素観測装置

近年、二酸化炭素の増加による地球的規模の気候変動が懸念されているが、本船には、洋上大気および表面海水の二酸化炭素濃度測定装置が設けられている。これにより、航走中、CO₂ の連続自動観測が可能であり、かつ大気－海水相互間の CO₂ の交換量を推定する資料も得られる。

(4) 表層塩分水温連続観測装置

本装置は、海洋観測作業の中でも広く使用される観測装置である。航走しながら海水ポンプにより海水を採取し、表層の水温・塩分を連続的に測定する装置で、センサーの投入・揚収等の作業を必要としない観測装置である。

(5) 表層海流計

船底に装備した送受波器から発信する超音波のドップラー効果を利用して、表層から約800 m の深さまでの任意の深度における潮流の流向、流速を測定することがで

きる。航走中に連続観測するため、送受波器は船底外板に沿って流れる気泡の影響を受けないよう船底より突出した形状としており、その突出量と形状に関しては水槽試験により効果を確認している。

(6) 総合海上気象観測装置

船上に設置された各種センサーからの気圧、風速、風向、水温、湿度、雨量、熱放射、視程等の信号を計算機で処理して、データの表示、記録、一覧表や電報文の作成を行う。また船速、針路、船位等の信号を取り込み、真風向、真風速を算出する。

(7) 船用波浪計

船首先端部に取付けたマイクロ波センサーと船体の変位を測定する加速度計を組み合わせて、自動的に波浪を観測する。

(8) 総合資料解析装置

コンピュータシステムを用いて CTD 観測装置、表層海流計、総合海上気象観測装置、二酸化炭素観測装置、深海用精密音響測深機、自記水深水温計等からの膨大なデータの処理、解析、管理、保守等を一元的に短時間で行い、各観測機器相互間においてデータのやりとりを行うことができる。

総合資料解析装置には DCP 装置が接続され、観測データは直ちに気象庁へ送信することもできる。

主要観測装置は以下のとおりである。

海洋物理関連

電気伝導度水温水深計 (CTD)

曳航式 CTD システム

表層海流計 (ADCP)

深海用精密音響測深機 (PDR)

表層塩分水温連続観測装置

デジタル型水温水深計 (BT)

投下型水温水深計 (XBT)

電気伝導度塩分計

総合資料解析装置

化学・生物関連

自動化学分析装置

溶存酸素分析装置

二酸化炭素観測装置

純粹製造装置

海上気象観測関連

- 総合海上気象観測装置
- 無線模写放送受画器
- 舶用自動高層気象観測装置
- 舶用波浪計
- 気象衛星受画装置
- DCP 装置

5,000 m ウインチ

ラインホーラー
中折式観測クレーン

観測支援装置

- CTD 揚降収納装置 (7,000 m CTD ウインチ)
- ヒープモーションコンペニセーター機能付
- CTD 搬送装置
- 500 m ウインチ (曳航式 CTD 用)
- A フレーム

9. 結び

啓風丸二世の設計・建造に際しては、気象庁、運輸省関係の方々および多数のメーカーのご指導・ご協力を得て、世界でもトップレベルの気象観測船を建造することができた事を深く感謝致します。

本船は今年の10月19日より日本近海において約3ヶ月間の試験観測航海を行い、翌年1月より太平洋の赤道付近の海上気象観測に従事されると伺っていますが、航海の安全と今後の活躍をお祈り致します。

成山堂書店

〒160-0012 東京都新宿区南元町4-51 成山堂ビル
Phone 03(3357)5861 • FAX 03(3357)5867
http://www.selzando.co.jp E-mail: publisher@selzando.co.jp

* 定価・発送費(元)
は消費税込み

▶船舶安全法関係の理解に欠かせない1冊！

船舶安全法 関係用語事典

上村 宰編 / A5判 418頁 定価6930円(元430)

- 関係用語 1,347 件を収録。
- 約70件にわたる法令に準拠した正確な定義、400点以上もの写真・図表を用い、簡潔に解説。
- 各語に、根拠法令(条文)や関連事項を明示。
- 各種条約、IMO総会決議等を取り入れ、ISMコード取得にもたいへん役立つ。

船舶安全法関係規則解釈集

運輸省海上技術安全局監修 / 船舶安全法関係規則研究会編
A5判 968頁 定価16800円(元500)

▼船舶検査のポイントがわかる!
船舶検査心得準拠

A5判 724頁 定価8400円(元430)
運輸省海上技術安全局監修

最新船舶安全法及び関係法令

▼平成12年11月1日現在の最新の内容!
船舶安全法シリーズ①

▶好評につき、重版! 索引をつけ、より充実した内容の改訂増補版

タイタニックがわかる本【改訂増補版】

高島 健 著
四六判 270頁
定価1890円(元360)

● 新造船紹介

2基2軸CPP装備・船尾双胴型

旅客船兼自動車航送船“3号はやぶさ”の概要

—函館～青森間に就航—

函館どつく株式会社 函館造船所
造船部設計課

1. はじめに

「3号はやぶさ」は、共栄運輸株式会社（本社函館市）より御注文を受け、当所にて建造した船尾双胴型旅客船兼自動車航送船で、平成12年10月からの海上運送法の改正（自動車航送貨物定期事業法の廃止と一般旅客定期航路事業法の発効）に伴う規制緩和に合わせ、函館～青森間に旅客兼自動車フェリーとして就航している。

本船の特徴は、主機関が2基2軸で可変ピッチプロペラとのコンビネーションにより高度の安定操縦性能を有し、最新の航海計器・安全装置を多数装備すると共に船尾を双胴型にして更なる省エネ効果を追求していることである。

以下にその概要を紹介し、参考に供したい。

2. 船体部

(1) 船体部主要目

全長	101.62 m
垂線間長	92.00 m
幅（型）	15.80 m
深さ（型） 船樓甲板	11.00 m
喫水（型）	4.50 m
総トン数	2,107トン
載貨重量	1,204トン
試運転最大速力	20.64ノット
航海速力	18.7ノット
航続距離	3,500海里
用途	旅客船兼自動車渡船
資格	JG、沿海区域（第二種船）
車輛搭載台数	12.0 m トラック 24台 9.0 m トラック 2台
旅客定員	旅客 47名 ドライバー 10名 乗組員 14名 合計 71名
燃料タンク	C重油 235.9 m ³ A重油 69.1 m ³



▲ 公試運転中の“3号はやぶさ”



▲ 車輌甲板（船首方向を見る）



▲ 車輌甲板（船尾方向を見る）

清水タンク	121.6 m ³
バラストタンク	908.7 m ³

(2) 概略配置

本船は一般配置図に示すように突出バルブ付傾斜型船首、トランサム型双胴船尾、2基2軸2舵を備えたディーゼル機関駆動の全通船楼型旅客フェリーである。

強度甲板は船楼甲板、乾舷甲板は車輛甲板とし、乾舷甲板下は10枚の水密横置隔壁により区画されている。

甲板は下方より船橋、航海船橋、羅針儀甲板の各甲板を配し、船楼甲板上には旅客室、ドライバー室、ロビー及び乗組員公室、船橋甲板上には乗組員居住区画、航海船橋甲板には操船区画を設けている。更に、車輛甲板上にはトラック搭載区画を設けている。

(3) 車輛搭載設備

船首にはねあげ式バウバイザー及びランプ扉を有し、船尾には可動甲板及びランプ扉を装備している。

船首ランプ扉の有効幅は約6.1 m、船尾ランプ扉の有効幅は約6.7 mとし、強度はトレーラー等の走行に耐えられるものとしている。

船首尾のランプは油圧式ランプウインチ及び油圧シリンダにより作動し、ポンプユニットの発停は船楼甲板上の船首尾に配置の油圧ポンプ室より行い、各操作は操作スタンドで集中操作可能とし、乗組員の作業軽減を図っている。

(4) 操舵装置

操舵機は電磁弁制御方式電動油圧（トランクピストン型）2台を舵取機室に装備し、K-7型フランップラダーを操舵している。

(5) 揚錨係船装置

船首部は電動油圧式揚錨機2台、係船機2台及びスプリングウィンチ1台、船尾部は係船機2台、スプリングウィンチ2台を設けている。

揚錨機 110 kN×15 m/min×2台
係船機（船首/船尾）

120 kN×18 m/min×2/2台
スプリングウィンチ（船首/船尾）

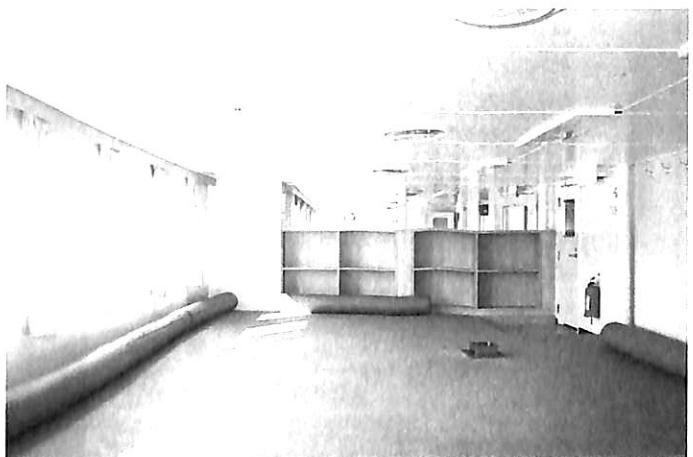
50 kN×18 m/min×1/2台

• 3号 はやぶさ •

▲ 船長室



▲ 1等航海士室



▲ 客室

(6) フィンスタビライザ

船体横揺れを減少させるために一对のフィンスタビライザ装置を備えている。

型式 MR-1 (引込み式) × 2 基

フィン面積 5.0 m² × 2

揚力 265 kN

(7) スラスター装置

港内操船を容易にするため、バウスラスター基を車輪甲板下船首隔壁後部へ備えている。

型式 電動可変ピッチ式

推力 68.7 kN

(8) 空調設備

客室及び乗組員区画の空調は区画を 2 ゾーンに分別し区画毎に温度制御可能としている。

冷房は冷媒 R-22 による直接膨張式冷凍機で行い、暖房は蒸気により行っている。客室、客用公室及び乗組員区画は中速低圧角型シングルダクト方式を採用している。

(9) トリム及びヒール調整装置

本装置は車輪乗降時の岸壁と舷外ランプの高さを保つため、船首トリミングタンク (F.P.T., No. 1 W.B.T. (C), No. 2 W.B.T. (C), No. 3 W.B.T. (C)) 及び船尾トリミングタンク (No. 4 W.B.T. (C) & No. 4 W.B.T. (P/S)) を利用して船体のトリムを調整し易いように配管されており、船橋操縦盤に組み込みのタッチパネル式監視制御コンソールによりポンプ、弁の遠隔操作が出来るようになっている。

又、船橋操縦盤には喫水計、タンクレベル計も組み込まれている。ヒール調整についても、ヒーリングタンクを利用してトリム調整と同様に遠隔制御を行うことができる。

(10) 救命設備

本船の救命設備として船橋甲板に膨張式救命筏 (25名用) × 3 台、降下式乗込装置 × 2 台及び高速救助艇 × 1 台を装備している。その他、法規上必要な備品等を装備している。

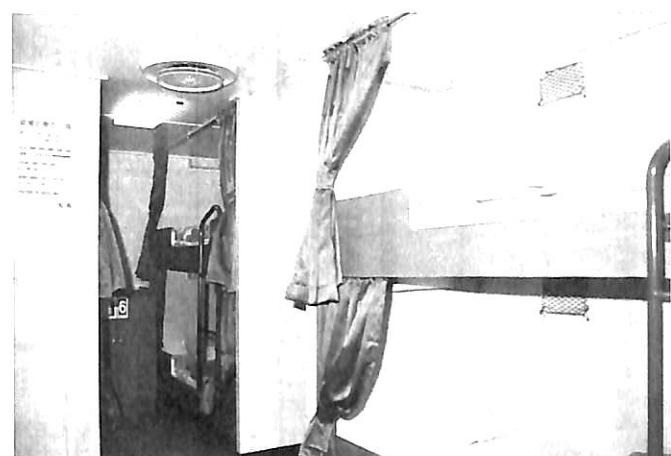
(11) 消火設備

車輪区画固定式消火装置は手動スプリンクラー方式とし、ポンプは補機室に、操作バルブは船

• 3号 はやぶさ •



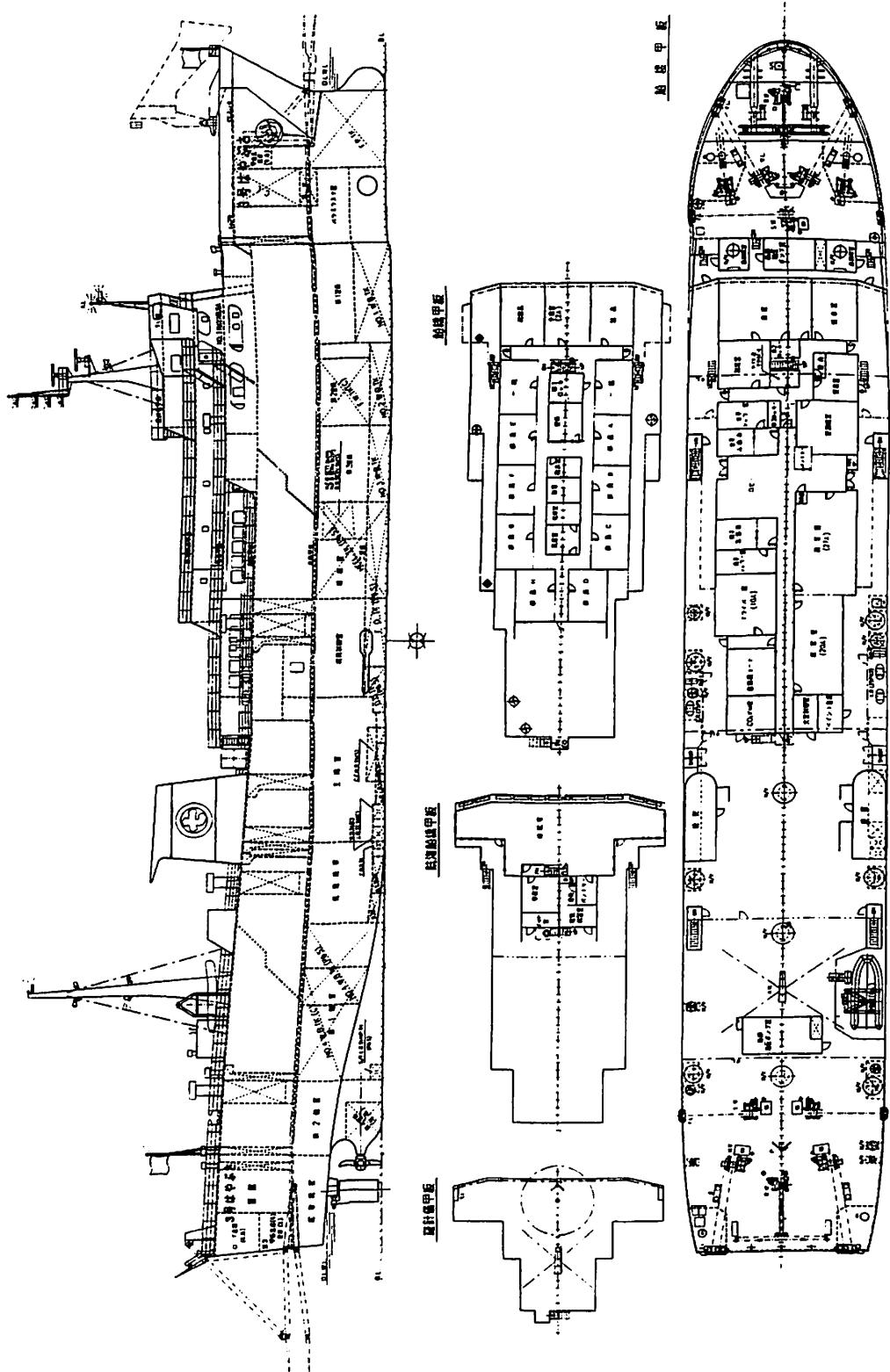
▲ 操舵室

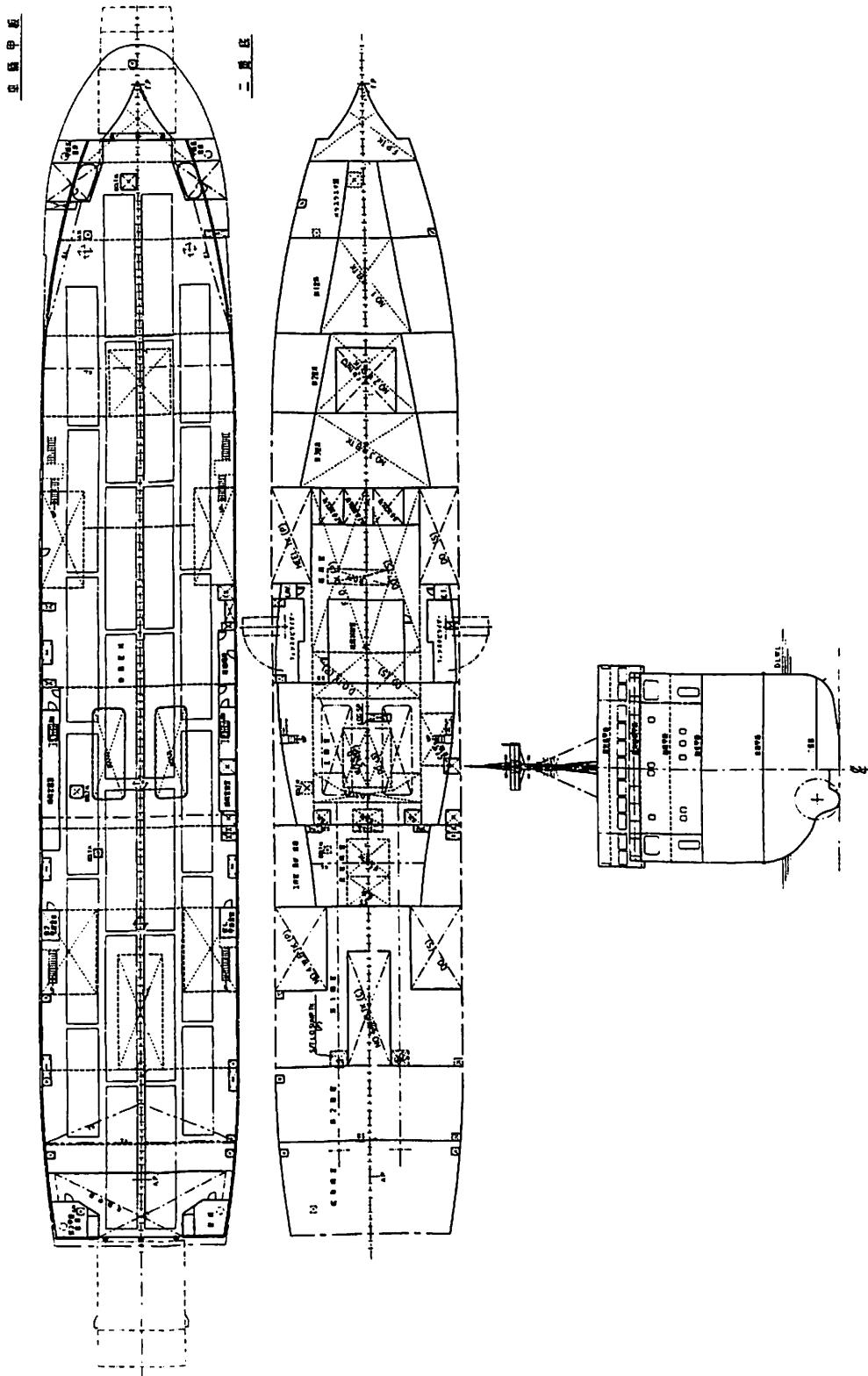


▲ ドライバー室



▲ ロビー





共栄運輸向け 旅客船兼自動車航送船 “3号はやぶさ” 一般配置図

函館どっく建造

樓甲板の火災制御室に配置している。主機室、補機室及び発電機室の固定消火装置として、集団開放式炭酸ガス消火装置を設備している。その他、消火装置として海水消火管、移動式消火器、持運び式消火器、消防員装具等を法規に従い装備している。

3. 機関部

(1) 機関部概要

本船の機関室は、車輪甲板下に配置され、船首側より補機室、主機室、発電機室、第一軸室及び第二軸室から成り立っている。主機室には主機関2基と補助ボイラ1基、補機室には、機関制御室とフィンスタビライザ、発電機室にはディーゼル発電機2台が配置されている。

主機室、発電機室にワイド固定監視カメラを各1台装備し、機関制御室に2台の14インチカラーモニターディスプレーにて監視できるようにしている。

主機関には、6シリンダディーゼル機関を装備し、高弾性継手及び減速機を介してスクエード型可変ピッチプロペラを駆動する2機2軸方式を採用しており、迅速な港内操船、低振動を実現している。

主機関及び補助ボイラは、50°Cにて240 cSt程度の燃料油を焚くものとして計画し、発電機関も主機関と同一の燃料油を焚くモノブーチ方式としたダイレクトスタートとしている。

本船の主補機器冷却システムはフルセントラル清水クーリング方式を採用及びセントラルクーラーの冷却海水ラインには海洋生成物防止装置を設けたものとしている。又、冷却海水ポンプの電力費低減のために、エンガードシステムを採用している。

(2) 機関部主要目

主機関

型式： NKK-SEMT-PIELSTICK

6PC2-6L

台数： 2基

出力： MCR 4,000 PS × 520 rpm/基

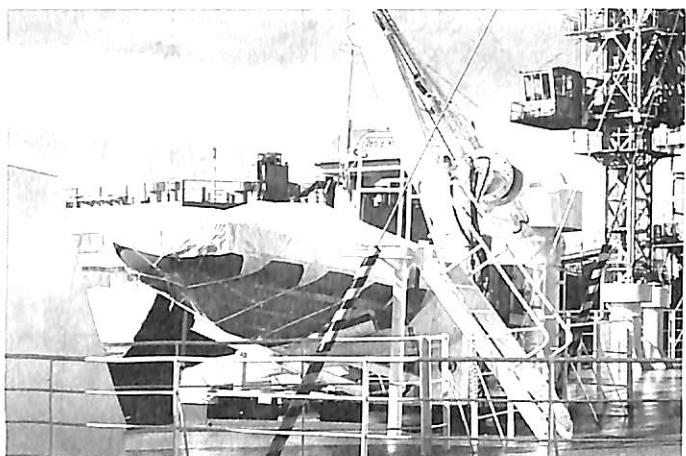
NOR 3,400 PS × 502 rpm/基

プロペラ

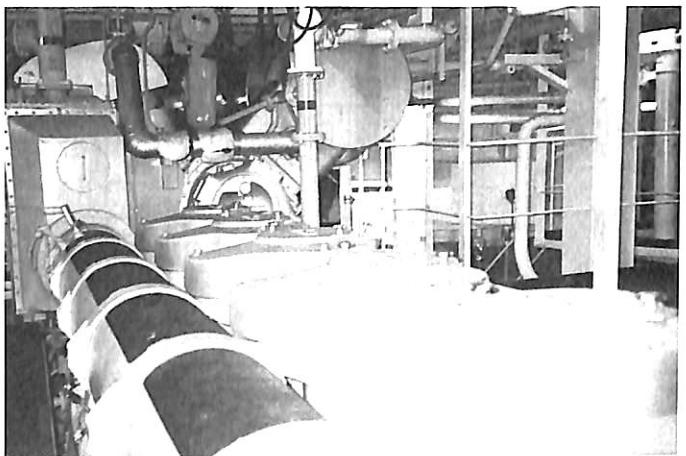
型式： 4翼可変ピッチプロペラ × 2基

回転数： MCR 190 rpm

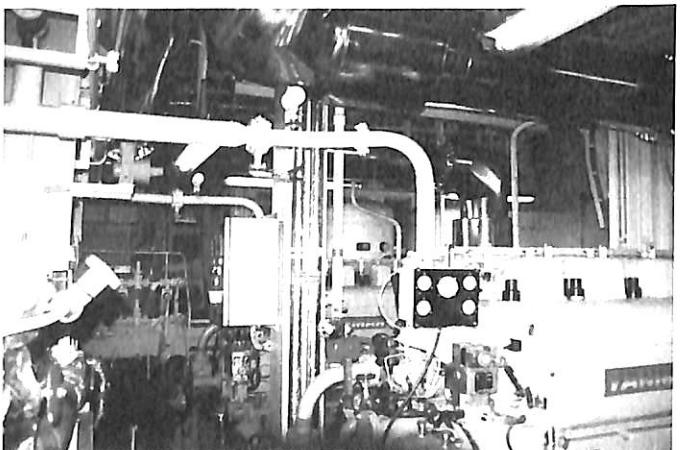
• 3号 はやぶさ •



▲ 救助艇



▲ 主機関頂部



▲ 発電機

補助ボイラ

型式：自然循環式堅形水管×1台
容量：1,000 kg/h × 0.59 MPa

主発電機関

型式：ディーゼル機関×2台
出力：800 PS × 720 rpm

(3) 機関部自動化

本船機関部の自動化及び計装は、船舶機関規則を適用し、乗組員の労働条件の向上を計るとともに安全確実な運航を目的として操縦装置、制御装置及び監視装置等を設備している。

遠隔制御は船橋及び機関制御室から行うことができ船橋には、主機関、フィンスタビライザ及びパウスラスターを制御する船橋操縦盤、機関制御室には主機関、発電機関および捕機類の遠隔制御が行えるように監視制御盤、配電盤及び集合起動器を装備し、さらに監視制御盤には10.4インチLCDカラーモニタ2台、アラームプリンタ1台及びデータロガー用としてレザープリンタを1台装備している。

推進制御はテレグラフハンドルの港内操船ゾーンに於いて主機関回転数は一定とし、CPP翼角を制御する。

NAV. FULL ゾーンに於いては主機関回転数とCPP翼角のコンビネーション制御としている。

4. 電気部**(1) 電源装置**

本船は、主電源としてディーゼル機関駆動の主発電機2台を装備し、出入港時はサイドスラスター使用のため、主発電機2台の運転とし、航海時は1台運転で船内電源をまかなえるように計画されている。

発電機の自動化として自動同期投入装置及び自動負荷分担装置を設けている。又、車両甲板に冷凍機積載車用として、AC220 V 3φ 60 A用レセプタブルを合計6個設けている。

(2) 電気部主要目

主発電機：675 kVA (540 kW)	× 2台			
AC450 V 3φ 60 Hz		×	×	×
変圧器：30 kVA 1φ (450 V/105 V)	× 3台			
60 kVA 3φ (450 V/225 V)	× 1台			
蓄電池：DC24 V 300 Ah	× 2組			

(3) 船内通信装置

自動交換式電話、共電式電話、船内指令装置（操船指令装置含む）、400 MHz船上通信装置を備えている。

(4) 航海・無線装置

ジャイロコンパス、自動操舵装置、DGPS航法装置、ドップラーログ、磁気コンパス、レーダ2台（ARPA付）、GPSプロッタを操舵室に装備し、円滑な操船、安全性向上、省力化を図っている。

無線設備としては、国際VHF無線電話装置（DSC聴守受信機）、ナブテックス受信機（和文）、衛星系EPIRB、レーダトランスポンダ、双方向VHF無線電話装置を装備しており、一般海岸局や他船との通信を行うことができる。又、衛星放送受信装置、本船及び一般乗客サービス用として2組の船舶電話装置（ファックス付）を装備している。

(5) その他安全装置等

本船の安全運航を確保するため、火災探知警報装置をはじめ、ランプドア開閉表示警報装置、ランプドア漏水検知警報装置、ランプドア監視カメラ装置を備え、操舵室から集中監視制御を可能としている。

非常時の脱出設備として、一般乗客区画には蓄電池一体型非常照明装置、乗組員区画には持運び式電気灯を装備し安全に備えている。

又、機関制御室にはデータロガーの他、機関室監視カメラ装置を備え、機関室での異常の早期発見に役立てるようしている。

5. おわりに

以上、本船の概要並びに特徴を紹介したが、本船の建造にあたり多大な御指導と御協力を頂いた船主殿をはじめ関係各位に対し、誌上をお借りして厚く御礼申しあげると共に、本船の航海の安全と今後の活躍を祈念する次第である。

● 新型推進機と新造船紹介

プラスピン型ウォータージェット搭載
高速艇“シリウス”の開発について

1. はじめに

当社では創業以来40年間培ってきた独自のポンプ作りのノウハウを活かして平成7年度より新形式のウォータージェットの開発に取り組んできたが、平成9年度からはこれまでのエンジニアリング事業部、ポンプ事業部に加えて新たに独立したジェット事業部を発足させ本格的に舶用ウォータージェットの生産に乗り出している。

このたび1300馬力クラスのプラスピン型ウォータージェットの開発研究が終了したことを受け、その実証試験を行う意味で50ノットオーバーの速力を出すことのできる19トン型の高速艇「シリウス」を開発建造した。以下にこの1300馬力ウォータージェットおよび搭載高速艇「シリウス」の概要について紹介する。

2. 開発計画について

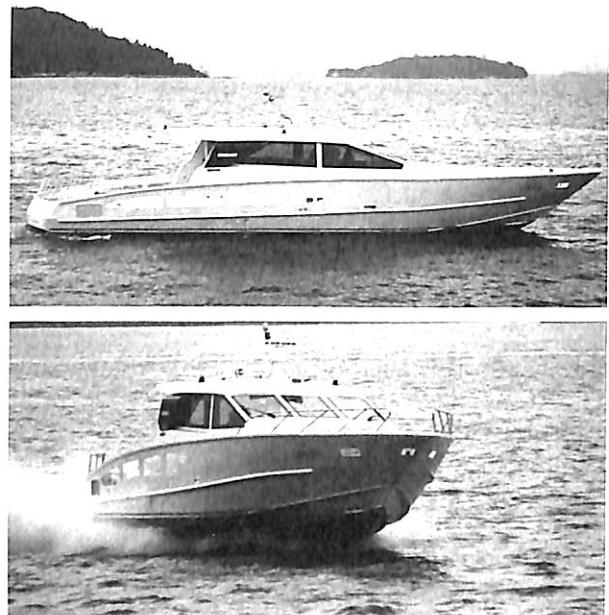
小型高速艇についてはCO₂、NO_x、SO_x等に関する排ガス規制にかかる問題、あるいは騒音振動の低減等乗り心地の改善の問題さらには曳き波の減少の問題等解決されなければならない多くの技術的課題があるものの、一昨年の日本海における不審船の追跡事件などに代表されるように、小型艇に対する高速化要求は時代の進展に伴っていつまでも終わりが無く、その意味でウォータージェットの高効率化は大きな開発テーマとして残っている。

当社でのウォータージェットの開発は100馬力クラス程度の小型のものから現在は1000馬力クラスの大型のものまで数多くの機種について行われ、これらは順次生産化されてきている。

ウォータージェットは国内需要が比較的小ないため、現在国内で使用されるウォータージェットの多くは輸入品であり、国内の一般需要家にとってはアフターサービス、修理さらに技術情報の提供等についてもまだまだ不十分な点が多いものと考えられる。

このような理由から当社ではウォータージェットの設

株式会社石垣 ジェット事業部



▲ 高速公試運転中の“シリウス”

計・製作だけではなく独立した船舶設計部および造船工場を設け、船体とのマッチングの問題の解決あるいはウォータージェット制御系統の設計開発が可能な体制を整え、ユーザーの多様な要望に対応している。

当社では平成11年度から小型高速艇用としては最大サイズの1300馬力クラスの新形式プラスピン型ウォータージェットの実用化を目指して、船舶の設計・建造を含めたトータルな形での開発研究を進めていたが、このたび開発作業がまとまったため、1300馬力クラスの2基のウォータージェットを装備し、50ノットオーバーの高速性能を持つ19トン型高速艇「シリウス」の開発建造に成功した。主要な開発要素は下記のものである。

- (1) 1300馬力クラスのプラスピン型ウォータージェットの設計・製作
- (2) ウォータージェット搭載50ノットクラスの高速艇の設計・建造

(3) 操縦制御システムの設計・製作

3. プルスピン型ウォータージェットの概要

(1) 基本計画について

最近の小型高速艇の動向を見ると、40ノットを超す領域ではウォータージェットが注目を集めている。

従来型式のウォータージェットでは効率アップにも限界があり、1300馬力クラスのウォータージェットの開発にあたっては当社固有のプルスピン型ポンプの技術を使って総合効率の高いウォータージェットの開発を最終目標とした。

ウォータージェットには以下に述べるように多くの長所があるものの、ユーザー側の一番の要求はやはり速度性能であり、プロペラ艇に匹敵し、あるいは凌駕する効率を達成しなければ、ウォータージェットが持つ多くの長所も生きてこない。

当社ではこれらの問題を解決するため高効率を期待できる独自のプルスピン型ウォータージェットの開発を進めており100馬力クラスの小型のものから1000馬力クラスのものへと順次大型のウォータージェットの商品化を図ってきたが、今回小型艇では最大クラスの1200馬力～1300馬力クラスの機関に対応する高効率のウォータージェットの設計製作をすることとした。

(2) ウォータージェットの一般的な特徴

ウォータージェットには通常のプロペラに比較して下記のような多くの特徴がある。ウォータージェットを推進機として採用する場合はこれらの長所短所を十分に認識した上で船舶の設計をする必要があり、そのことが結果的にウォータージェット搭載艇の総合能力を高めることになる。

(長所)

- (a) 船底に突起物が無いため浅瀬での航行が可能になる。
- (b) 推進機が船底に突出していないので海底の障害物や海面の漂流物との接触により推進機が損傷する確率が低い。
- (c) プロペラ部分が船外に露出していないので、落水者やダイバーなどがプロペラ部分に巻き込まれる事がなく安全性が高くなる。このため警備艇、救助艇やダイビングボート用として最適な推進機である。
- (d) 他船からのロープ、魚網等の障害物の投下・曳航による航行妨害に対して影響を受けない。

(e) 急旋回、急発進、急停止をしてもエンジンに負担がかからない。特に高速航行中の急停止性能に優れてい。

(f) 船底汚損による抵抗増加が発生してもエンジンへの負担が増加しない。

(g) 機関配置の自由度が大きく、船内を有効に利用できる。

(h) 微速航行が可能である。

(g) 振動が少なく、水中騒音は一般のプロペラ推進機に比べて小さくなる。

(j) 後進の場合出力軸の逆転を必要としないため、基本的にエンジンの逆転減速機構が不要になる。

(k) 高速域では通常プロペラ推進に比べ推進効率・性能が優れる。

(短所)

(a) 一般に価格、整備費ともにプロペラ船に比べて高価になる。また重量も大きくなる。

(b) 低速領域では通常のプロペラ船に比べて一般的に推進効率が劣る。

(c) 通常のウォータージェット艇では流体力を利用した操舵装置（舵板）をもたないことにより舵を持つ船に比較して方向安定性が不足し、小型のフィン等の追加が必要になる場合がある。

(e) 低速航行時に海水吸入口より浮遊ゴミを吸い込みやすい。

(3) プルスピン型ウォータージェットについて

当社は長年にわたり水に関わり、水処理装置、脱水装置、送水、揚水、排水装置等の設計製作に携わってきたが、なかでもポンプについては開発、設計、製作、販売、据付け、運転、メンテナンス等全ての分野で多くの実績を残してきた。

当社では平成3年新形式の高揚程ポンプに関する特許をアメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、オーストラリア、日本、カナダ、韓国、デンマークの9ヶ国に出願してこれを取得し、この新形式のポンプを「プルスピンポンプ」と呼んでいる。

その後このプルスピンポンプの基本原理を用いた舶用ウォータージェットの商品化に取組み、ますます高速化する船舶の推進機として実用化した。以下にプルスピン型ポンプの特長について述べる。

(a) 高揚程特性および吸込性能

一段の羽根車で高揚程を出せるプルスピンインペラーは高速艇に適しており、その吸込性能が高いことと共に

最大の特長である。特に特許のポイントである吸込スクリュー付斜流インペラ入ロ部の先端の形状は当社独自のものである。

●掲揚、吸込性能についてのポンプ断面形状による説明

図1に示す羽根車前段部分のスクリュー羽根が容積形ポンプの機能を發揮し、その推進力によりインデューサー作用という強い吸引作用が発生する。この作用によって必要NPSH(Net positive suction head)の小さなポンプとなる。

さらに羽根車後段部分において遠心力を発生し、前段部分で水に加えられたエネルギーをも含めて、圧力エネルギーに変えられるため高揚程のポンプが得られる。

●羽根車断面モデルによる作用説明

掲揚についての説明を作用図に表すと図2のようになる。角度 α_2 を大きくすると、後段になる程羽根の径が大きくなり推進力に比較して遠心力が大きくなるので、さらに高揚程のポンプとすることができる。

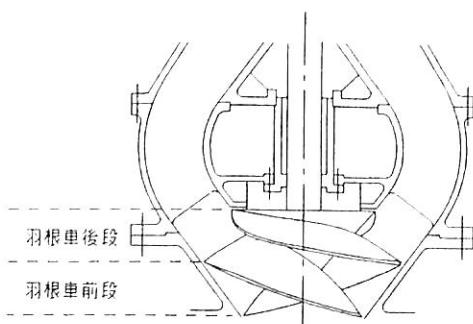
羽根が連続しているため、遠心力が加算され増加するので、多段ポンプの各段の羽根車を内蔵したものと同様になり、多段ポンプと同様な性能を発揮する。

(b) 無閉塞性について

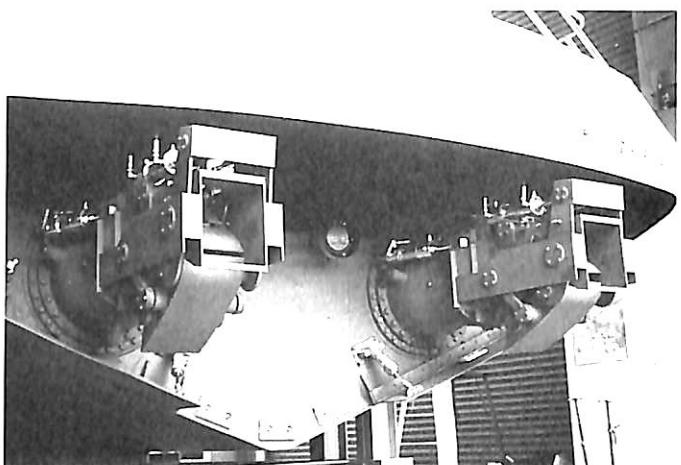
フルスピン型ウォータージェットにとって大切な特長である無閉塞性について述べるとつきのようになる。

ポンプの性能は概略次式で表わせる。

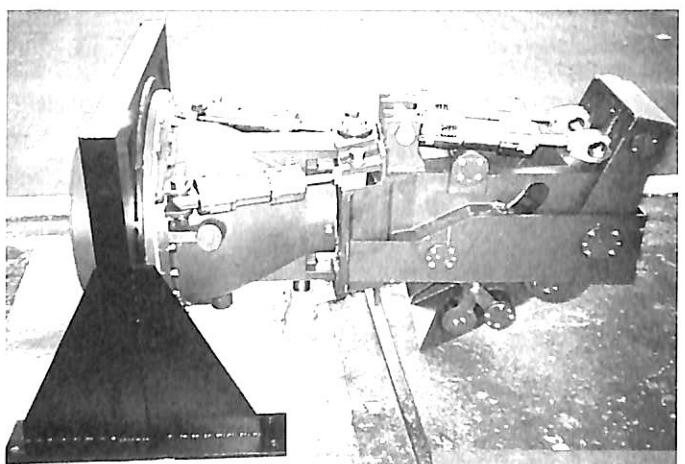
$$H = \eta_h \Phi u_2 V_{u2} / g \quad (1)$$



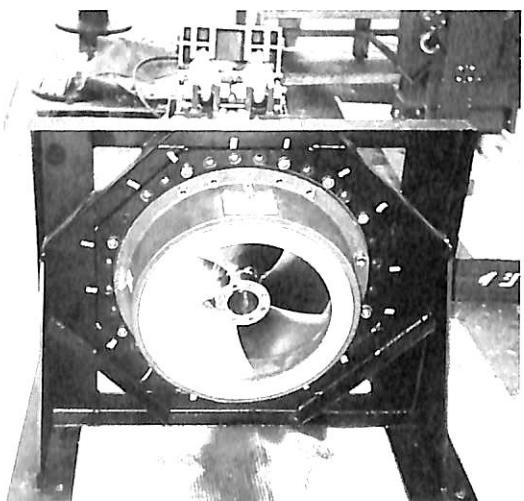
▲ 図1 羽根車断面図



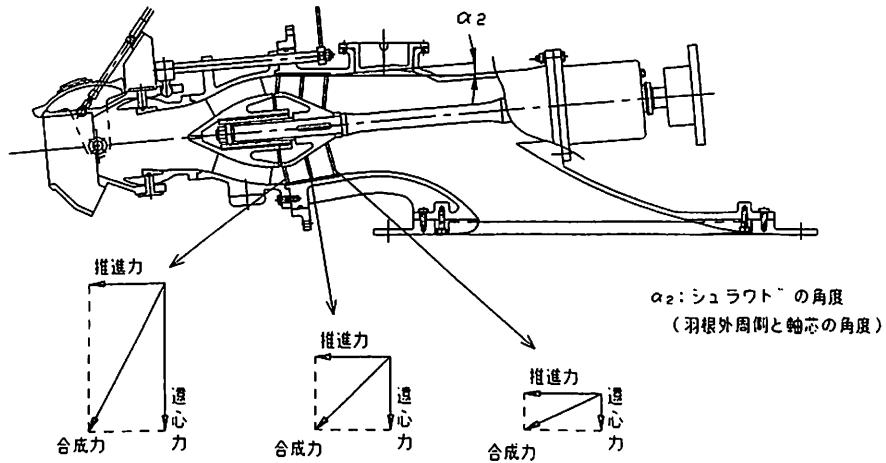
▲ ウォータージェットの装着状況



▲ JWJA039 ウォータージェット



▲ フルスピン型インペラ



▲図2 羽根車断面モデル作用図

$$\begin{aligned} Q &= \pi D_2 b_2 v_{m2} \\ &= \pi D_2 b_2 (u_2 - v_{u2}) \tan \beta_2 \\ &= \pi D_2 (u_2 - v_{u2}) b_2 \tan \beta_2 \end{aligned} \quad (2)$$

H : 全揚程

Q : 吐出し量

n : 回転数

D₂ : 羽根車出口平均径b₂ : 羽根出口幅\beta₂ : 羽根出口角度

\pi : 円周率

g : 重力加速度

u₂ : 周速度w₂ : 相対速度v₂ : 絶対速度v_{u2} : 絶対速度の円周方向速度成分v_{m2} : メリジアン分速度\eta_b : 水力効率

\Phi : 羽根効率

羽根車の平面図,

側断面図および羽根車出口の速度三角形を図3に示す。

ポンプの性能 (Q, H, n) を一定とした場合, \eta_b, \Phi, V_{u2}/u₂ はほぼ一定になることが経験的に認められており, (1)式より u₂, V_{u2} はほぼ一

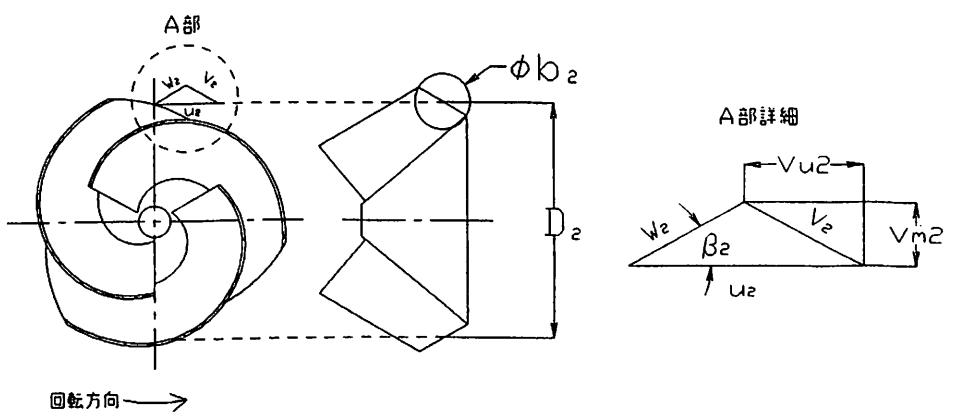
定となる。また u₂ = \pi D₂n であるから D₂ もほぼ一定となる。(2)式により b₂ \times \tan \beta₂ はほぼ一定となる。

従ってポンプの性能 (Q, H, n) を変えずに羽根幅 b₂ を大きくするためには、羽根角度 \beta₂ を小さくすればよいことがわかる。これにより通過粒径を大きくとれる。すなわち、ゴミの吸い込みに対する安全性が高いということがいえる。

(4) プルスピン型ジェットの特長

(a) ゴミ詰まりのないシステム（無閉塞性）

プルスピン型ウォータージェット特有の無閉塞型の羽根と吸い込み口に装備された可動スクリーン ACS (Anti-Clogging System, 当社特許) によって、このウォータージェットポンプはビニール、砂、ゴミ等を含んだ汚濁した噴出水を詰まらせずに噴出できる。



▲図3 羽根車の平面図、側面図及び羽根車出口の速度三角図

(b) 省エネ・高効率

プラスピン型ポンプは、最高効率点において従来型ポンプと比べて高い効率性を示す。

(c) リミットロード特性

軸動力曲線が平坦であるために、動力オーバーの心配は皆無である。これにより船舶は急発進や急停止が速やかに行える。

(d) キャビテーションの心配がない

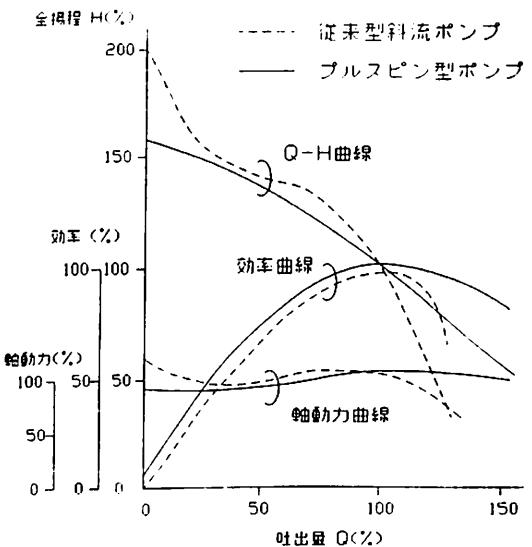
このウォータージェットでは吸い込み比速度が2500以上になるため、スムースな加速性をもたらし、キャビテーションの心配を解消している。

以上のプラスピン型ウォータージェットの特性を図4に示した。

(5) 主要諸元

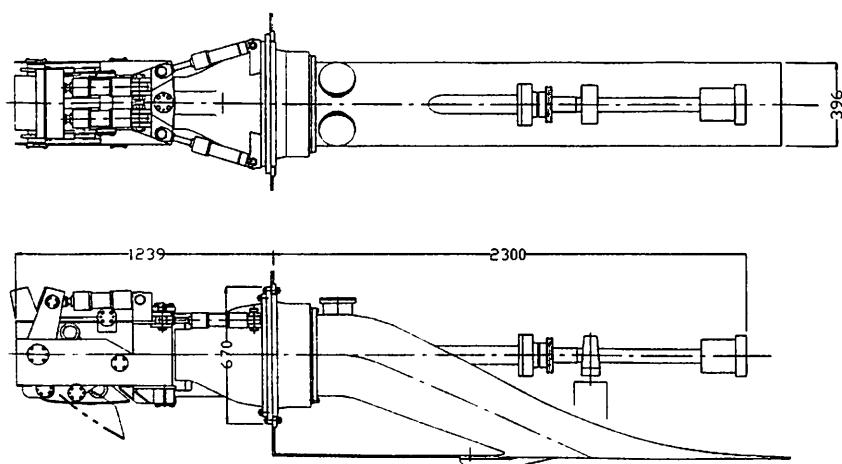
今回開発されたウォータージェット推進機の主要諸元は以下のようなものである。全体図を図5に示した。

形式	IWJA039型
本体重量	約550 kg
水路部水重量	約200 kg
推進機部	
推進機入力回転数	2,250 rpm
羽根車入口径	390 mm
ノズル径	200 mm
構造	
スラスト軸受	自動調心円錐コロ軸受
羽根車部	自動調心コロ軸受
ラジアル軸受	
羽根車部	自動調心コロ軸受



▲図4 ウォータージェットポンプ特性の100分率曲線

軸端部	深溝玉軸受
軸封装置	メカニカルシール
羽根車部	船尾管軸封装置
軸端部	電気+動力油圧式
リバーサ操縦装置	船外作動方式
油圧シリンダ	電気+動力油圧式
ディフレクタ操縦装置	船外作動方式
油圧シリンダ	船内取付
ハンドホール	亜鉛アノード
腐食防止対策	船内据付
据付方式	



▲図5 ウォータージェット推進機全体図

主要部材質

ケーシング	ステンレス鋼
羽根車	ステンレス鋼
主軸	ステンレス鋼

4. 搭載高速艇「シリウス」の概要**(1) 基本計画について**

今回開発された1300馬力クラスのプラスピン型ウォータージェット搭載艇は以下に示す要求を満たすことを条件として計画された。

- JCI 規格 全沿海区域の船舶であること。
- 総トン数19トンに収まること。
- 軽荷最大速力52ノット以上を満足すること。
- 航続距離400マイル以上を航行できること。
- 高速実験艇とはいえ通常の業務艇に必要な概ねの設備を装備すること。

(速度性能について)

国内では50ノットを越す小型高速艇の例は非常に少なく速度推定に参考となる設計データも少ない。特に19トンクラスの艇の場合、ウォータージェット搭載艇が50ノットを出した実例は無く、速度推定は当社建造小型艇の実績値とサビツキー理論による速度推定値および大阪府立大学工学部海洋システム工学科の高速曳航水槽による抵抗試験の結果を参考とした。

またウォータージェット自体の効率に関しては当社製作の各種のウォータージェット搭載高速艇の実績値から推測することとした。

(当社建造艇の実績)

これまで当社では図6、図7に示すような各種のウォータージェットおよび搭載高速艇を製作、建造してきておりこれらの集積データを設計にフィードバックさせた。

(軽量化の問題)

1300馬力2基の機関を収め得る最小サイズということで船体は総トン数19トンで計画したが50ノット以上という船速を得るために船体重量の軽量化が最も重要な要素で、船殻構造は床材等一部にアルミハニカム材を併用したアルミ合金製とし、上部構造についても軽量なポリプロピレンハニカム材を芯材としたFRP製サンドイッチ構造を用いたハイブリッド構造とした。

さらに内装材についても木材の使用を一切避けレザー等の直張り仕上げとすることにより軽量化を図った。家具についても基本的にFRP製の軽量なものを製作することとした。また窓の材料についても軽量化の意味からポリカーボネート製窓の直接接着を検討したが熱膨張率

がFRPと大きく異なるため温度歪みが避けられないということで強化ガラスの直接接着の方法を採用した。

機関の選定にあたっても軽量化の観点から1200馬力～1300馬力のクラスの機種のうち馬力重量比が大きくかつ最大馬力の大きいものとしてMAN製D2842 LE4041(最大1300馬力)を選択した。

構造設計にあたっては基本的に高速船構造基準によることとし設計を進めたがJCIでは現在のところ速長比 V/\sqrt{L} が5以上の船については高速船構造基準の適用を認めておらず、最終的には軽構造船暫定基準による計算チェックも行って安全で軽量な設計に努めた。また実際の建造にあたっては造船所の協力により各建造段階で船殻、上部構造、機関、搭載艇装品等の実重量の計測を行うことにより厳密な重量管理を実施し船体軽量化に努めた。

(2) 船体主要諸元

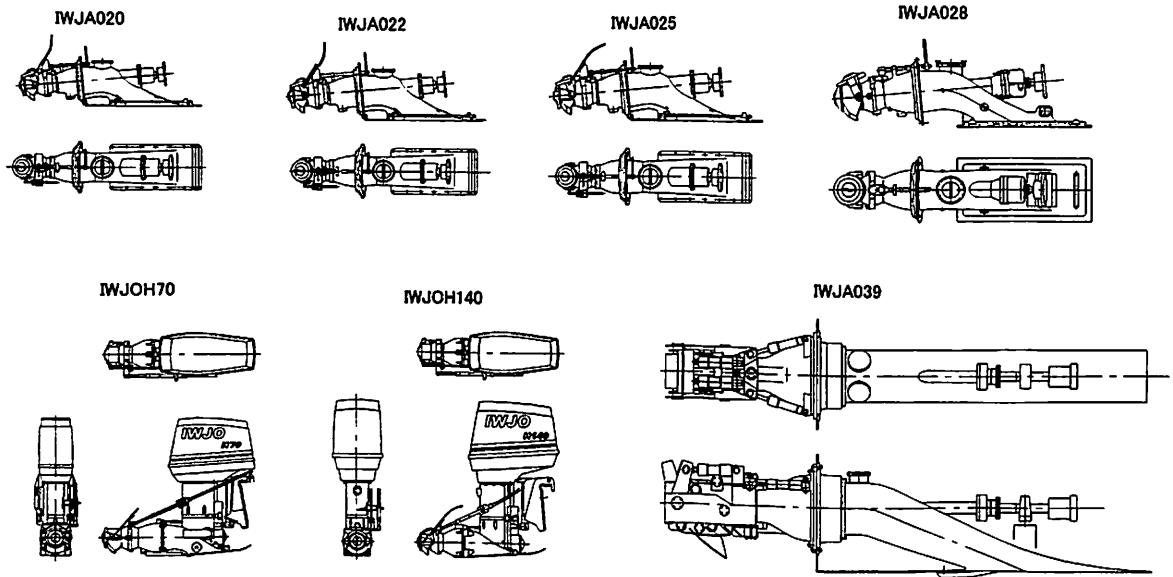
今回建造された高速艇「シリウス」の主要諸元は以下のとおりである。一般配置図を図8に示した。

全 長	17.50 m
全 幅	4.60 m
深 さ	1.48 m
喫 水	0.80 m
計画排水量(満載)	約20.0トン
総トン数	19トン
軽荷最大速力	約54ノット
航海速力	約46ノット
機 関	
メー カー	MAN
形 式	D2842 LE404 ディーゼルエンジン
定格出力	1,180 PS/2,230 rpm
最大出力	1,300 PS/2,300 rpm
燃料消費率	約225 g/kWh
排 気 量	21,930 cc
減 速 比	1.02 : 1
燃料タンク容量	4,000 ℥
清水タンク容量	200 ℥
定 員	15名
材 質	船 殻 軽合金 上部構造 FRP ハニカム
船 級	JCI 全沿海区域

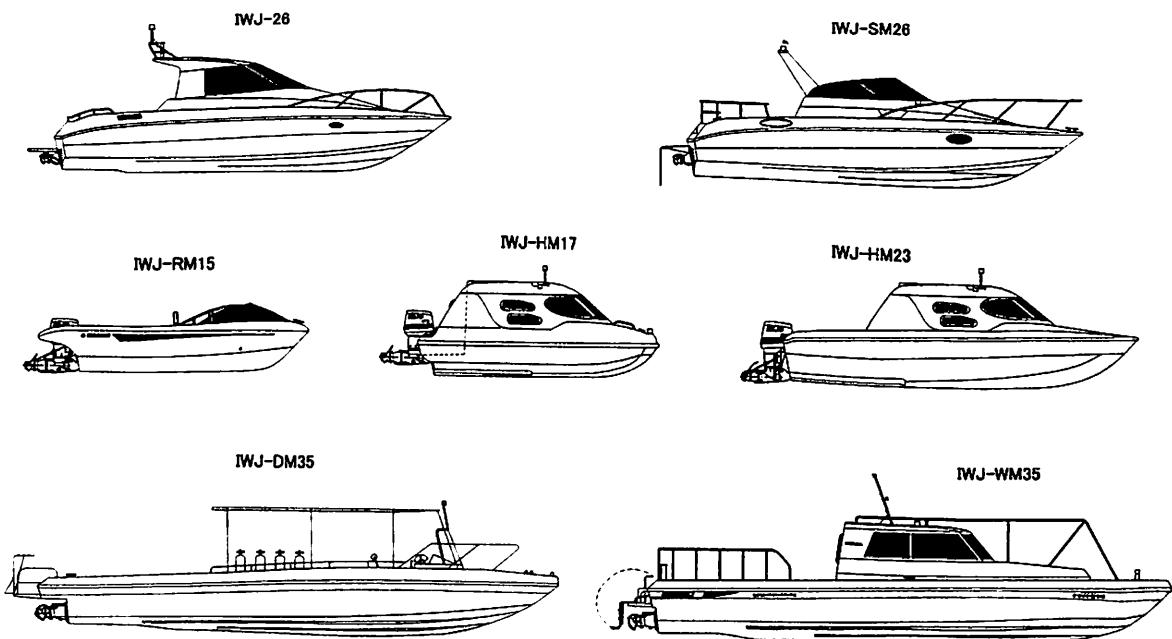
(主要装備品)

3モード式操舵系統
トリムタブ
レーダー GPS 魚探
ゴミ除け可動スクリーン
サーチライト

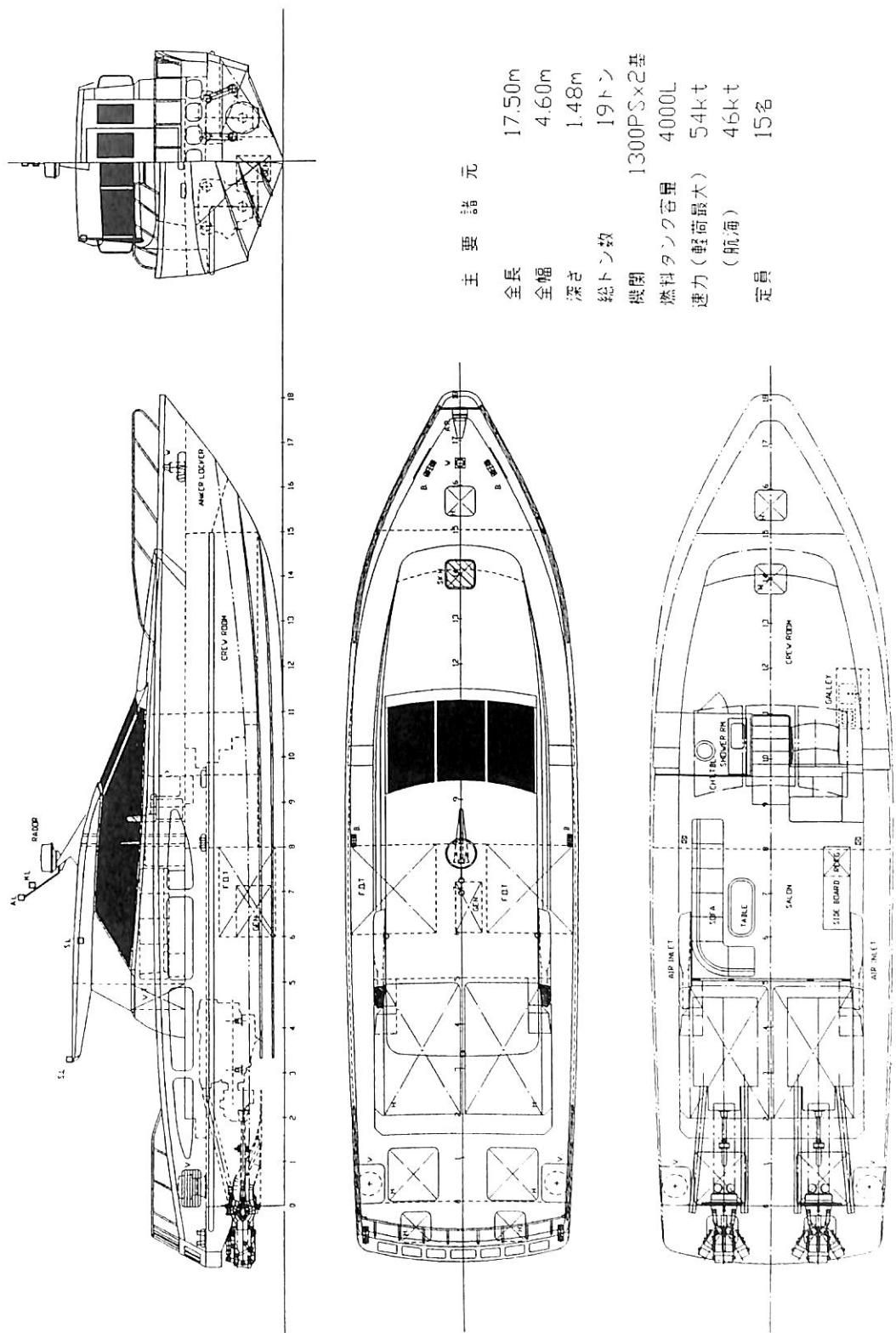
船内指令装置
マリンオーディオ
船舶電話
空調設備
ギャレー
化粧室トイレ



▲図6 当社製造各種ウォータージェット



▲図7 各種ウォータージェット搭載・建造の高速艇



▲図8 IWJ-CM60「シリウス」一般配配置図
株式会社讃岐造船所建造

(3) 操舵系統について

ウォータージェット搭載艇ではプロペラ装備艇と異なり、ウォータージェットノズルが独立に偏向可能であることを利用して操船の自由度を増やすことが可能になる。

本艇「シリウス」の場合航海状況に合わせて3種類の操縦モードの選択が可能である。操縦モードの変更はモード切替スイッチを操作することにより自動的に行なうことができる。

(a) ノーマルモード（通常航行モード）

針路変更はステアリングホイールにより、またエンジン回転数および前後進の変更は右舷コントロールレバーにより左右舷一括で同調操作を行う。

(b) 単独モード（左右舷単独操舵モード）

左右舷のコントロールレバーを独立に操作することにより針路変更、エンジン回転数変更、前後進の変更を行なうことができ、この結果船体の「横移動」、「斜め移動」といったプロペラ艇では難しい操船を容易に行なうことができる。

(c) バックアップモード（非常時・調整時モード）

バックアップスイッチパネル上のジョイスティックの操作により針路変更を行い、ガバナーダイヤルによりエンジン回転数の変更を行なうことができる。

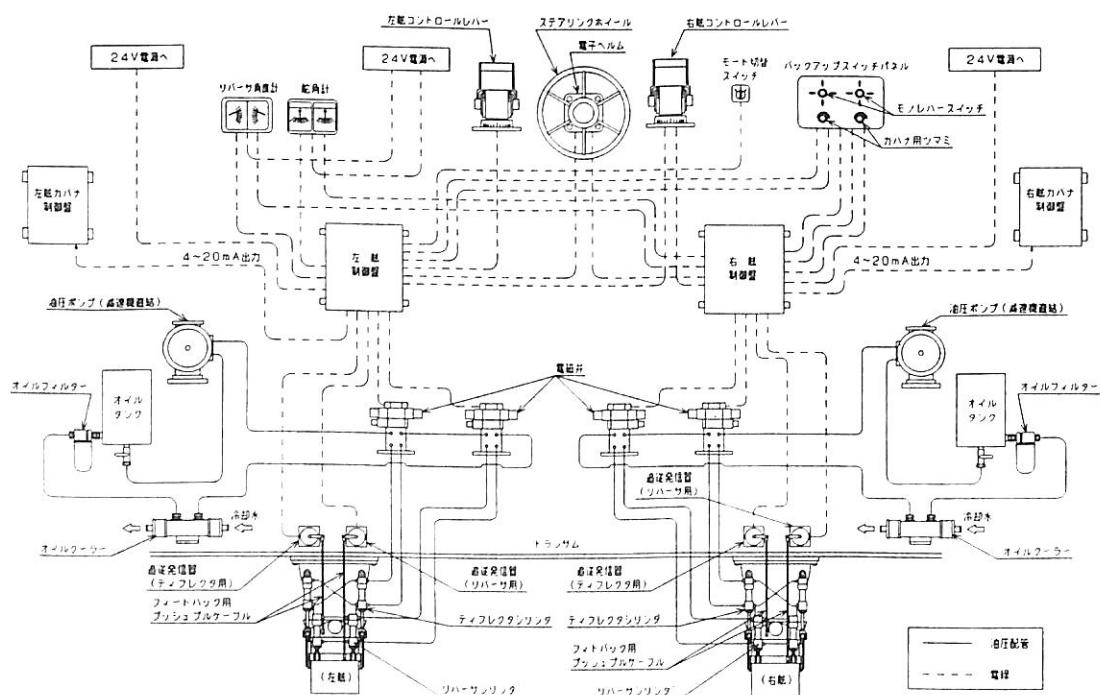
操縦系統図を図9に示した。



▲ 操舵席コンソール



▲ 操舵席バックアップスイッチパネル



▲図9 操縦系統図

5. 海上試験結果

• 海上試験結果 •

速 力	排 水 量 17.0(t)			
	負荷	主機回転数	速力 (kt)	走航トリム
速 力	1/4	1405	15.6	6.0
	2/4	1770	36.0	4.5
	3/4	2025	46.2	3.5
	4/4	2230	51.8	3.5
	11/10	2300	53.6	3.5
	排 水 量 20.5(t)			
速 力	負荷	主機回転数	速力 (kt)	走航トリム
	1/4	1405	15.0	4.8
	2/4	1770	34.6	7.0
	3/4	2025	44.4	4.0
	4/4	2230	49.8	3.0
	11/10	2300	51.5	3.0
旋 回 試 験	速 力 (kt)	50.0		
	項 目	左 旋 回	右 旋 回	
	舵 角 (度)	22.0	22.0	
	旋 回 直 径 (艇 身)	4.5	4.5	
惰 力 試 験	旋 回 所 要 時 間 (秒)	10.5	11.2	
	試 験 種 類	前進 中 停 止 命 令 より 船 体 停 止 ま で		
	速 力 (kt)	51.0		
	船 体 停 止 ま で の 時 間 (秒)	15.0		
	船 体 停 止 ま で の 距 離 (m)	180		

6. 終わりに

「シリウス」は平成12年5月より(株)讃岐造船鉄工において建造が開始され平成12年10月20日に進水、JGおよびJCIの各種検査の後、10月31日に完成引渡しを受けた。

引渡し終了後11月3日からは慣らし運転と外洋航走性能の確認の目的で四国一周へスタートし順調に処女航海

を終えた。現在「シリウス」は各種計測機器を搭載し船体およびブルスピニ型ウォータージェットの性能試験プログラムを順次消化中である。

なお本艇開発計画にあたっては官海官庁をはじめとして大阪府立大学工学部海洋システム工学科、株式会社讃岐造船鉄工所、株式会社大沢技術設計事務所のほか多くの造船所、エンジンメーカー、機器メーカーの御協力を頂いた。紙上をお借りして謝意を表する次第である。

●

「写真25頁」参照 “Kerr-McGee Global Producer III”

FPSO: Floating Production Storage and Offloading Unit.

海底油井近くの洋上に係留し、油井からの原油を本船上のプロセスプラントで脱ガス、脱水、脱泥等の一次処理を行った後、貯油タンクに貯蔵し、輸送用シャトルタンカーへ油を積出し、生産・貯蔵・積出の一連の機能を備えている。本設備は荒海気象の北海仕様として知られる「Tentech 700」デザインを採用、英国、ノルウェー

の安全基準であるHSE及びNMDの認証を取得し、英國領北海の「Leadon油田」に係留設置し、石油生産を開始する。

(特 長)

- ・船体にダブルハル構造を採用し、稼働時にはインターナルタレットにて一点係留されるが、移動時にはスラスターによる自航能力を有する。
- ・統合制御システム(UAS: Unified Automation System)にて、一元的に荷役設備及び機関部の制御・監視・操船ができ、さらに自動定点保持装置を有する。

● 新開発技術

ベクトルインラーダーシステムを用いた 新形式船用交流電気推進システムの提案

— 平成 8 年度及び 9 年度(財)シップ・アンド・オーシャン財団補助研究開発 —

ジャパン・ハムワージ株式会社

1. はじめに

船舶の電気推進は何十年も前から技術的には開発されてきたが、主として経済性の見地から、特定の船舶を除いては実用されることなく今日に及んでいる。しかし、近年の要素技術における革新的進歩と船舶運航の近代化など社会的要請の変化を考えるとき、船舶の電気推進を新しい観点から見直しする意義が生まれてくる。すなわち、当面する労働力の不足、労働環境の改善および安全の確保などに係わる諸問題から、快適な環境において、少人数の乗組員で安全に運航でき、自由自在に船を操縦できて、かつ載荷能の高い、いわゆる近代化船が求められるようになった。

このような見地に立って、われわれは、新形式の船用交流電気推進システムを開発し、フィージビリティ・スタディを行った。その結果、われわれの開発した新形式の船用交流電気推進システムは相当な有用性をもって実用され得るものであることを確信するに至った。

そこで、このシステムを以下に紹介し、海事関係各位のご高覧に供したいと願う次第である。

なお、この研究開発は、(財)シップ・アンド・オーシャン財団からの二年間にわたる研究開発補助を受けて行ったものであり、学識経験者の指導を得つつ、日立造船(株)、内海造船(株)、日立造船向島マリン(株)、ダイハツディーゼル(株)、大洋電機(株)、および(株)トキメックと共同して行ったものである。

2. 従来方式の電気推進システムとの比較

電気推進システムには種々の方式があるが、従来の方式では、次のような制御は、固定ピッチプロペラの場合、推進電動機自体で行っていることが共通している。

船の速力制御：推進電動機自身の回転数を変えて行う。

船の後進制御：推進電動機自身の逆転と回転数の制御。

特に、推進電動機が交流誘導電動機の場合、電動機特

性に由来する起動上、逆転上、および制御上の問題を残したものであった。また、周波数制御のためのインバータおよびプロペラと同じ回転数を出力するための低速大型電動機の装備を必要とし、設備コストが高くつくという基本的な問題を抱えていた。推進電動機を直流電動機にすれば、起動、逆転、速度制御上の特性は非常に良くなるが、設備コストが更に高いものになってしまう。

こういったことから、電気推進方式は、数々の利点は認められるにもかかわらず、若干の特例を除き、一般商船用推進機関として採用されることなく、今日に至っている。

また、従来の電気推進システムは、従来の主ディーゼル機関推進方式をそのまま電気推進に置き換えるという考え方のものであった。すなわち、起動・停止、逆転、速度制御という三つの制御要素が要求された。これらの要求を満たす電気推進システムは、必然的に大規模な付加装置を必要とした。

しかし、われわれは、舵システムを従来のものから高揚力特殊舵の二枚舵システム(ベクトルイン・ラダーシステム)に置き換えることにより、電気推進システムの形態を単純化することができ、従来の電気推進システムの難点を大きく軽減できることに着目した。

われわれの新形式船用交流電気推進システムは、プロペラ回転は常に一定方向回転のままで船の前後進および速力の制御ができるという高揚力特殊舵の二枚舵システム(ベクトルイン・ラダーシステム)の特長を取り入れることによって、推進電動機としての交流誘導電動機の特性に由来する起動および逆転の困難さを取り除いている。

さらに、推進電動機をプロペラ直結とせず、クラッチ付き多段減速装置を設けて推進電動機を小型化するとともに、起動の問題も解決している。さらに、この多段減

速装置による二段階の变速に加えて、発電機側のガバナー制御により発電周波数、すなわち推進電動機回転数を制御することによって、プロペラ回転数を制御できるようにしていき、よりきめ細かな船の速力制御ができるようになっている。

このプロペラ回転数の制御は、二枚舵システムがプロペラ推力を360°全周にわたる方向の推力ベクトルに変換させるときの推力の大きさを制御させることにもなるものである。

3. 提案する新形式船用交流電気推進システムの概要

3.1 システム・コンセプト

本システムは、複数のディーゼル発電機、複数の推進用交流誘導かご型電動機、クラッチ付き減速装置、固定ピッチ推進プロペラ、および特殊二枚高揚力舵システム（ベクツイン・ラダーシステム）を主な要素として構成される。図3.1.1にこのコンセプトによる新形式船用交流電気推進システムの全体構成のスケルトンを示す。

推進用電動機の回転数は発電機側のガバナーによって周波数制御される。近年の技術進歩によりガバナーおよびAVRの性能が向上したことにより、発電機側の回転数変動幅、すなわち発電機周波数変動幅を約25%までとれるようになった。従って、発電機から電気の供給を受ける推進用交流誘導かご型電動機の回転数制御範囲は100～75%となる。

この推進用電動機は、常時一方向回転の定格1,800 rpm の、最も簡単で堅牢な汎用のものを使用できる。推進用電動機の回転数は、低速で作動するプロペラ回転数まで減速装置で減速してプロペラ軸に伝達され、船を推進させる。

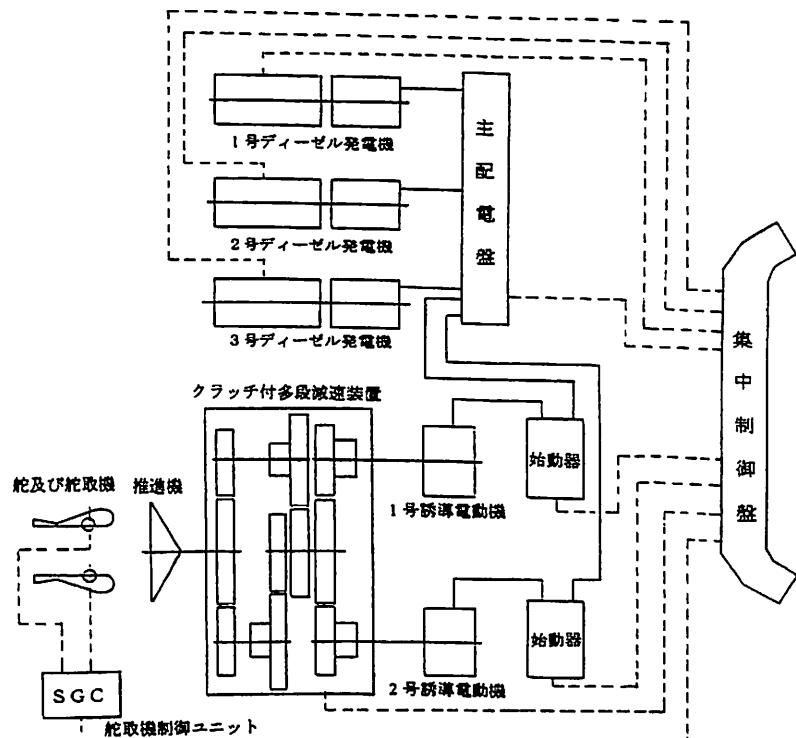
この減速装置は、船の運航状態に応じて、クラッチで歯車比の組み合わせを変えることによって变速を行えるように構成され、クラッチを高速側に選択した場合と低速側に選択した場合の出力軸すなわちプロペラ軸回転数の比は75%になっている。

従って、発電機周波数による回転数制御範囲100～約75%と、減速装置による減速比75%の組み合わせにより、合計してプロペラ軸回転数を100～約56%（プロペラ負荷100～約18%）の範囲で制御することができる。

なお、減速装置のギア切り換え時にプロペラ軸回転数が急変する事がないようにシステムが構成されており、これらの組み合わせを包含するプロペラ軸回転数制御を一つのハンドルでスムーズに連続的に制御することができる構造となっている。

上記プロペラ軸回転数制御範囲で得られるよりも更に遅い船速が必要となる場合は、ベクツイン・ラダーシステムによる操船制御の中の前後進速力制御部分を併用することによって、それが可能となる。

ベクツイン・ラダーシステムは、1個の一方向回転推進プロペラの後方に配置した二枚の高揚力特殊舵のそれぞれの操舵角の組み合わせによって、推進プロペラは常時一方向回転のままで、プロペラ軸の回転数の如何に関



(注) 破線は制御信号ラインを示す。

▲図 3.1.1 新形式船用交流電気推進システム構成概要図

わらず、そのときのプロペラ推力の100%から0%の範囲において、プロペラ推力を360°全周にわたっていかなる方向にも変換制御できるようにした船の操船制御システムである。

ベクトイン・ラダーシステムには、船の前進において、推進プロペラの前進推力を100%～0%の範囲で変換制御できるモードが内包されているので、上記発電機関のガバナー制御と減速装置のクラッチによる高低速段切換の併用によって得られるプロペラ軸の制御最低限度回転数（約56%）に相当する船速よりも遅い速力が必要となる場合は、ベクトイン・ラダーシステムによる操船制御の中の上記モードを使用することによって、船速ゼロまで制御することができる。

さらに、船の後進に対しても、後進のためにプロペラ軸回転方向を逆転させる必要はなく、ベクトイン・ラダーシステムによる操船制御の中のクラムシェル・モードを使用することによって、推進プロペラの後流を後進推力に変換制御することができる。

上記ベクトイン・ラダーシステムの操作は、一本のジョイスティック・レバーによって行うことができ、変換する推力の大きさと方向を同時に連続的に加減することができる。

かくて、離着桟時など、微速での操船を必要とする場合において、また、船の真横移動を必要とする場合はハウスマスターと組み合わせて、本コンセプトによるシステムは、船を極めて容易に、効果的に、安全に操作することを可能にする。

3.2 高揚力特殊二枚舵システム

(ベクトイン・ラダーシステム)

この新形式船用交流電気推進システムにおいて重要な部分をなす高揚力特殊二枚舵システムについては特別な説明を必要とするであろう。

この二枚舵システムは、当社が(財)シップ・アンド・オーシャン財團の補助を得て独自に技術開発と実用化のための改良を行ったもので、「ベクトイン・ラダーシステム」と称するものである。現在までに40隻余りの実績があり、また、ベクトイン・ラダーシステムの基本形としてのシリングラダー（「モノベック・シリングラダー」と称する）は、今まで1,800隻余りの実績を当社は持っている。

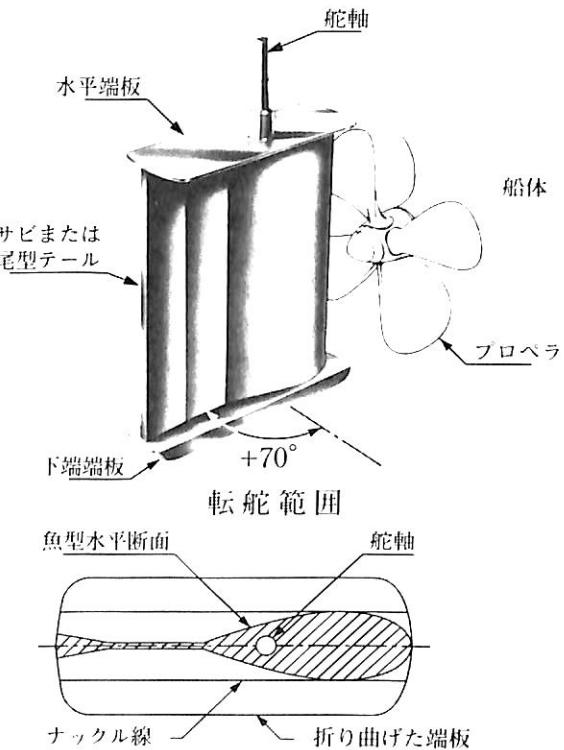
3.2.1 ベクトイン・ラダーシステムのコンセプト

(1) 基本形としてのシリングラダー

ベクトイン・ラダーシステムの基本形である「モノベック・シリングラダー」は、図3.2.1に示すように、その水平断面形状が魚を横から見たような輪郭を持つ高揚力特殊舵で、舵揚力が普通舵に比べて30%以上大きくなり、また、舵角を最大70°（片舷）に取れば、プロペラ推力を全部横方向推力に変換し、前進推力はゼロにできるという性能を持つ。このため、船を小さい旋回圏で減速して旋回させることができ、また、船を急速停止させることができるほか、船の保針性能、針路安定性能が優れているという特長がある。航行中の推進抵抗を普通舵のそれよりも小さくすることに注眼を置いた「オーシャン・シリングラダー」も開発し、40隻余りの外航船に搭載されている。

(2) ベクトイン・ラダーシステム

モノベック・シリングラダーより更に船の操縦性を高めるとともに、操船操作を極めて容易にしたものである。図3.2.2に示すように、基本形であるモノベック・シリングラダーを左右対称に切断したような水平断面形状の



▲図3.2.1 モノベック・シリングラダー
(基本形としてのシリングラダー)

一枚の舵を一軸船のプロペラ後方に左右対称に並べて、そして、図3.2.3に示すように、それぞれの舵の舵角の組み合わせを工夫して、プロペラ後流を制御し、前後左右のいずれの方向にも推力を発生できるようにしたものである。これにより、プロペラは前進回転のまま、船の前進、左右旋回はもとより、後進、ホーバーリング、微速航行、緊急停止、船首・船尾の回頭、後進しながらの操船もできる。これら舵角の組み合わせは多岐多様になるので、操縦は一本のジョイスティック・レバーで、かつ、それを倒した方向に実際に船が誘導されるように制御システムを構成している。

3.2.2 ベクツイン・ラダーシステムの特徴
ベクツイン・ラダーシステムを搭載した船は次のように特徴付けられる。

(1) ジョイスティック・レバーによる操船

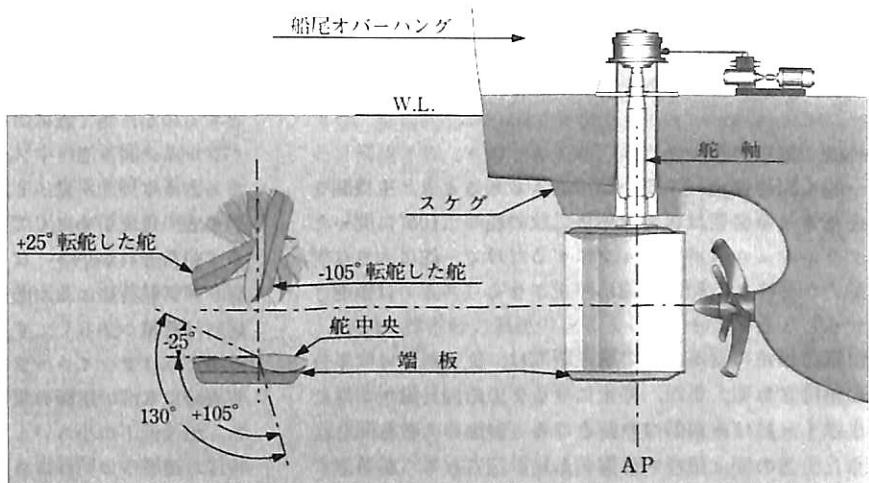
ジョイスティック・レバーを船を動かしたい方向に倒すだけで、プロペラは前進方向回転のままで、船の前進と後進、前進左右旋回、船首左右回転、後進左右旋回、船尾左右回転、ホーバーリングの各操縦、および前後進速力の制御を自由自在に行える。

これにより、主機関逆転という煩わしい装置・操作も、複雑な可変ピッチプロペラも、スターンスラスターもすべて不要となり、あたかも自動車を運転するような感覚で操船できるようになった。また、タグボートの支援なしに出入港および離着棧が速やかに、安全に、かつ、乗組員に大きな精神的・肉体的負担をかけることなく行えるようになった。

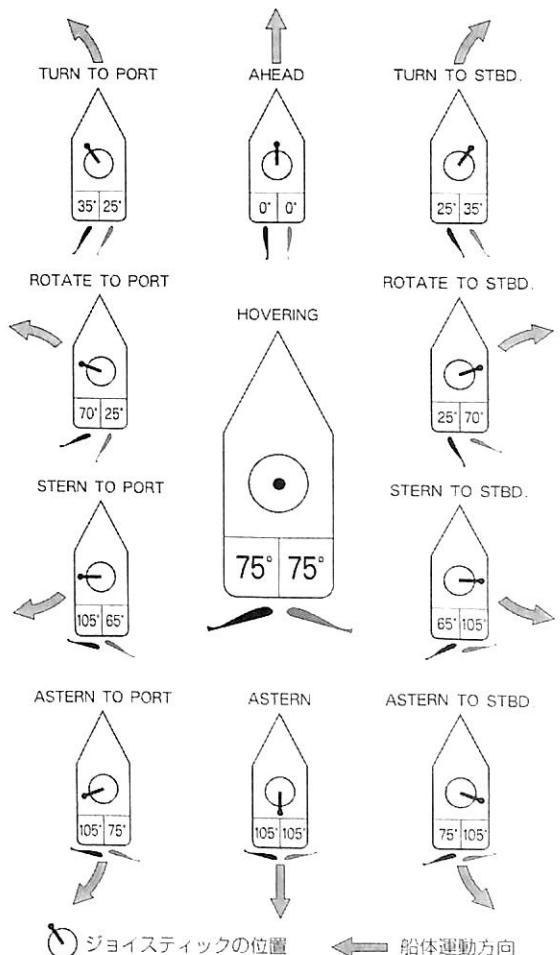
なお、ベクツイン・ラダーシステムにバウスラスターを組み合せれば、船の平行移動、斜め平行移動、その場旋回も簡単に行え、操船に対する自由度が飛躍的に向上する。

(2) 旋回性能

定常旋回において、旋回緩距、旋回横距、旋回圈直径ともに非常に小さく、小回りができる。また、旋回中は



▲図3.2.2 ベクツインラダーシステム



▲図3.2.3 ベクツインラダーシステムの代表的な舵角の組合せと船体運動

船の科学

船速が大きく低下する。従って、衝突回避能力に優れ、また、万一衝突した場合でも衝撃力が小さく、安全である。

(3) 緊急停止性能

船を緊急停止（あるいは後進）させるとき、主機関を逆転させる必要はなく、単に二枚の舵を土105°を開いたクラムシェル・ポジションにするだけで、舵に大きな制動力が発生し、船を急速に停止させる（あるいは後進させる）ことができる。

緊急停止に至るまでの航走距離は、従来船のほぼ半分に短縮される。また、停止に至るまでの偏針量が非常に小さく、ほぼ直線的な軌跡となる（後進のときも同じ）。また、この間、積極的に操舵して、左右どちらか希望する方へ白山に回頭させることができる。

これらにより、上記旋回能力と併せて、非常に安全性の高い船になる（従来の船では、緊急停止または後進のためにプロペラを逆転させるとき、過酷な負荷の変動、高い騒音、大きな振動を生じる。また、プロペラを逆転させると、針路不安定となって、船が停止に至るまでに、初期条件次第では左右のどちらかへ大きく回頭してしまい、それを修正することは困難である）。

(4) ホーバーリング

ジョイスティック・レバーを中立位置（ホーバーリング・ポジション）にすると、プロペラは前進方向回転のままで船をほとんど静止させることができ、また、その間、船の方位角もほとんど変化しない。

潮流や風などの外乱があっても、プロペラが回転したままであるので、僅かな舵角調整で舵力が発生し、姿勢制御ができる。

このように、船の位置保持が簡単にでき、少し転舵すれば船は直ちに応答するという特性は、今までの船では考えられなかっことで、操船者の方々から大変高い評価を頂いている。

(5) 微速航行

プロペラは前進方向に一定回転のままで、船の前進速度が100%からゼロまで自由に加減できるので、港内や離着桟時の微速航行が可能である。また、低速時でも舵の効きが良く、自由自在の操船ができる（従来の船では、可変ピッチプロペラの場合を除き、ある程度以下の微速航行はできない。また、微速航行中の舵の効きは極端に悪くなる）。

(6) 保針性能

航海中は、風、波、潮流、船体固有の針路不安定性などのために船首が絶えず左右に揺れ、針路から外れようとするのを、当舵により絶えず修正が行われているが、ベクツイン・ラダーシステムの場合、当舵を僅かに取っても大きな揚力が発生し、かつ、揚力の発生が速いので、当舵の角度が小さくてもよく、また、それにもかかわらず船首揺れが小さくなり、優れた保針性能を發揮する。ジグザグ航行による距離損失および船速低下が避けられ、燃料消費量が少なくてすむ。

また、ベクツイン・ラダーシステムを装備した船は、荒天時にも波の影響を受けることが少なく、保針性に優れ、船速低下が小さいという報告を受けている。また、特に、追波中の航行にも船首揺れが小さく、安全であるとの評価を頂いている。これらは、プロペラ後流が二枚の舵で保護されているので、波による推力変動が少ないとによるものと考えられるが、端板が船尾部の上下動を抑制することもそれに寄与していると推察される。

(7) 推進抵抗

ベクツイン・ラダーシステムは舵が二枚のため、その分だけ抵抗が大きく、また、プロペラによる推進中には自航要素、とりわけ推力減少係数（ $1 - t$ ）に大きく影響し、一枚舵に比べれば推進抵抗がいくらか大きくなると考えられ、水槽試験でもその傾向が出ている。

しかし、実船の試運転結果では、両者の差は当初考えられていたよりも小さく、水槽試験による予測より優れた推進性能が得られ、予想以上に良く走ったという場合がほとんどである。

これは、従来の水槽試験の方法と解析、並びに実船の馬力推定手法を、一軸一舵の場合はともかく、ベクツイン・ラダーシステムのような特殊な舵システムにそのまま当てはめるのは実際的でないということに原因があると考えられる。

3.3 新形式舶用交流電気推進システムの

もたらす利点

前記コンセプトから導かれる新形式舶用交流電気推進システムの特徴・利点は次のように要約され得る。

- 発電機関から舵までを、すなわち、船の航行と操縦の一切を、一連一体とした仕組みで、単純で信頼性に富む交流電気推進システムにより行うことができる。
- 機器配置の自由度が高く、機関室の長さが短くなり、貨物倉が増す。
- 本システムは、構成が簡単なことから、機関室が無人

化され、運航所要人数が少なくてよい。

- ブリッジ・コンソールおよび推進操縦装置の合理化により、ワンマンコントロールが可能である。
- 船体振動が減じ、船内労働環境が良くなる。
- 船の保針性能が優れ、直進航行中の船首揺れが少なくなることにより、また、荒天時の安定航行が可能になることにより、抵抗および距離損失が減少し、従って、燃料消費が少なくなる。
- 操船性能が良く、安全航行、出入港・離着桟時間短縮に寄与する。
- 発電機、推進電動機が複数台であり、いずれかの機器の故障時にも、故障機を除く他の機器により、運航が可能である。
- 運航条件（例えは低速航行）により、それを複数台の発電機と推進電動機の運転台数の選定を行うことができ、機器の運転効率を高めることができる。
- トータルエコノミーが向上する。

4. 新形式船用交流電気推進システムの試設計と評価

われわれの提案する新形式船用交流電気推進システムを660 GT型ケミカルタンカーに適用した場合について、試設計を行い、また、推進動力系および船体操縦運動の、数値モデル・シミュレーションによる動作特性の解析を行い、更に、経済性について試算と評価を行った。これらの概要を以下に述べる。

4.1 主要目

新形式の電気推進システムを660 GT型ケミカルタンカーに適用した場合の主要目を、従来のディーゼル主機による推進システムの場合と比較する形で、表4.1.1(次頁)に示す。

4.2 配置

4.2.1 機関室配置

機関室配置の一例を図4.2.1に示す。

4.2.2 ブリッジ・コンソール配置

ブリッジ・コンソール配置の一例を図4.2.2に示す。

4.2.3 操船コンソールの構成イメージ

操船コンソールの構成の一例を図4.2.3に示す。

4.3 数値モデル・シミュレーションによる動作特性解析

開発した新形式船用交流電気推進システムは、最も単純な形の電気推進システムに二枚舵による操船制御システムとクラッチ付き多段減速装置を組み合わせることにより、実用的なレベルで実現できるという設計思想のもとに構築されたものであるが、果たして構想通りに作動するかどうかを検証するために、数値モデル・シミュレーションにより、動作特性、操縦制御方式等の解析を行った。

4.3.1 推進動力系のシミュレーション

シミュレーションは、推進電動機の始動、推進電動機クラッチ投入、低速クラッチ投入、低速上限までの増速過程、低速から高速へのクラッチの切替え、高速上限までの増速、半速での増減速、微速・半速からの後進、前进全速から後進全速へのクラッシュアスターインおよびレーンシング状態について行った。ここでは、本システム特有の運転動作に関するシミュレーションの例を図4.3.1～図4.3.7に紹介する。

これらの結果からわかるように、何れのケースにおいても推進動力系は指令に対して無理なく応答しており、健全なシステムとして構築されていると言える。なお、クラッチ切替え時にプロペラ回転が約2秒間、若干落ち込むが、実用的には全く支障はない。必要ならば、高・低速クラッチに滑りクラッチを組み込むことによって、回転数の落ち込みなく滑らかにクラッチ切替えを行う方法を採用することもできる。

4.3.2 船体操縦運動のシミュレーション

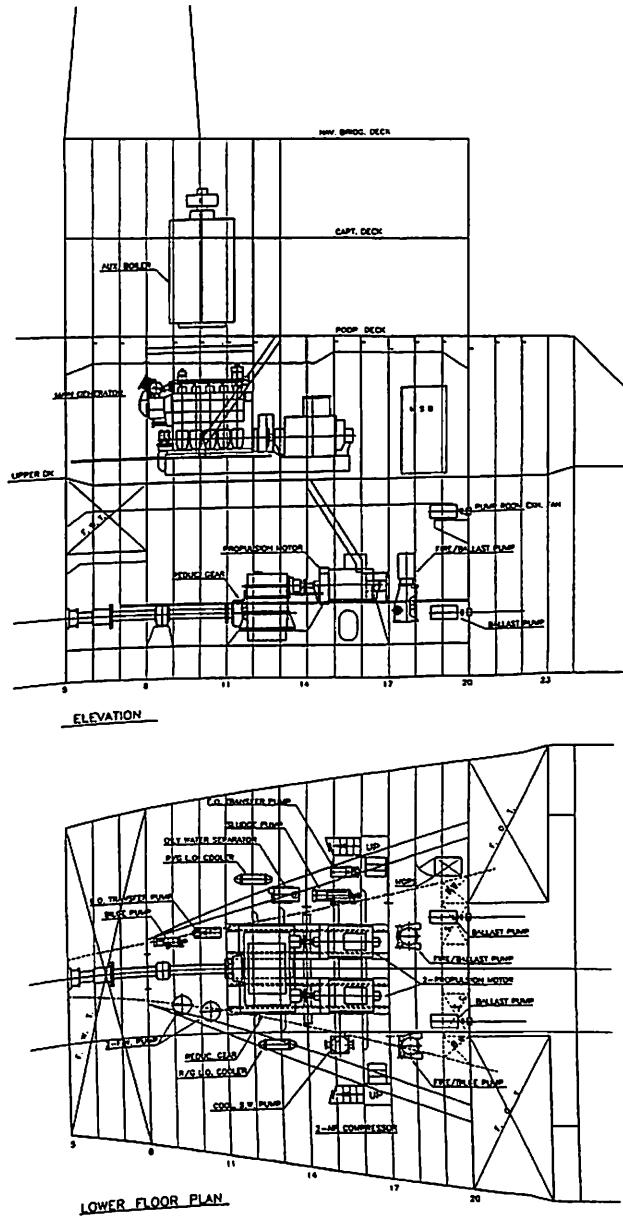
一例として、船速6.6 kt (プロペラ回転速度3.6 rps)で直進中に、クラッシュアスターインを発令した場合、および、船速3 ktに減速を発令した場合のそれぞれの船の動き、および、船の自動着桟についてのシミュレーションの結果を図4.3.8～図4.3.10(83頁～84頁)に示す。

クラッシュアスターイン指令の場合(図4.3.8)、船速6.6 kt (プロペラ回転速度3.6 rps)で直進中にベクトulin・ラダーシステムをクラムシェル・ポジション(左右舵角105°)に発令すると(クラムシェル発令はシミュレーション開始から60秒後)、発令後約9分で船は停止している。方位制御、船速制御とも行っていないため、船は4L進んだ後から徐々に左旋回を始めている。

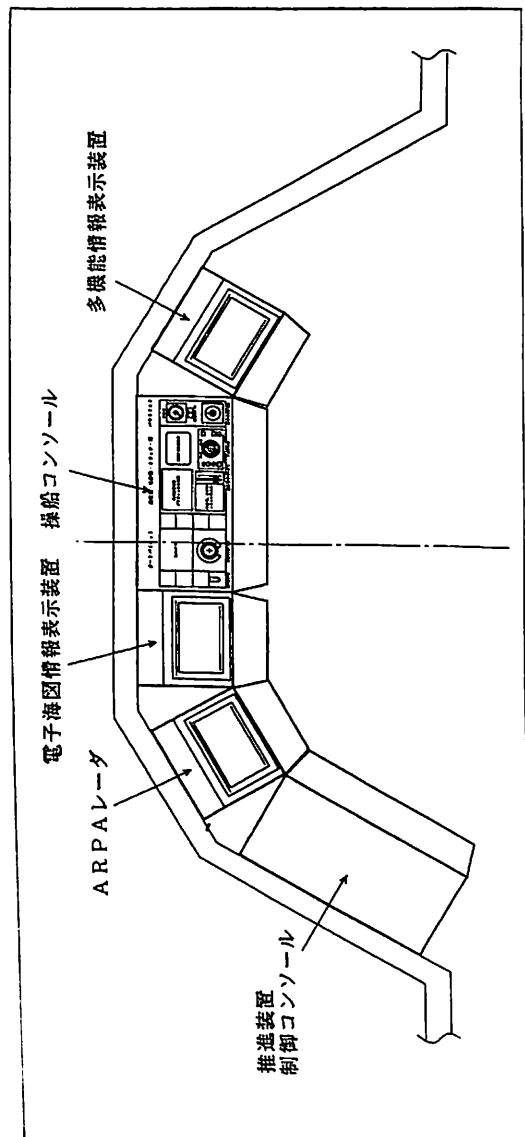
減速指令の場合(図4.3.9)、同様に船速6.6 ktで直進中に船速3 ktを発令すると、発令後約4分で指令船速

▼表 4.1.1 ディーゼル推進船と新形式舶用交流電気推進船との主要目比較

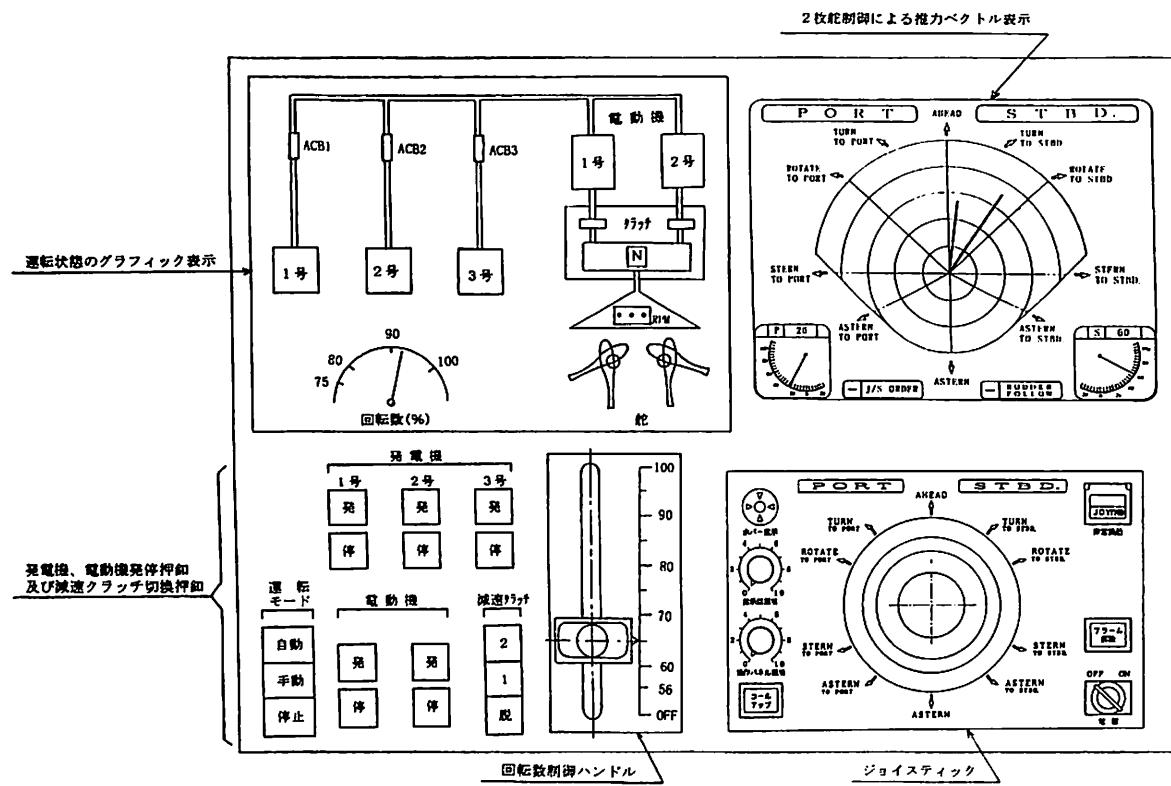
		ディーゼル推進(近代化船) (ベクトイン舵使用)	新形式電気推進 (ベクトイン舵使用)
船体部	総トン数	約660トン	約660トン
	積載重量(d=4.15mにて)	約1300t	約1280t
	船型	1000MT積IMO TYPE II	1000MT積IMO TYPE II
	長さ(垂線間)	65.00m	65.00m
	幅(型)	10.50m	10.50m
	計画満載喫水(型)	4.75m	4.75m
船速	機関室長さ	10.8m	9m
	貨物油タンク容積	1396m ³	1396m ³
機関部	満載航海速力(85%MCR)	約11.5KT	約11.5KT
	満載試運転最大速力(MCR)	約12.2KT	約12.2KT
	形式×台数	4サイクルトランクピストン形 自己逆転式ディーゼル機関×1台	誘導電動機(非逆転式)×2台
	連続最大出力	1176kW(1600ps)×380rpm	1000kW(500kW×2)×1764rpm ギヤ軸端: 970kW×380rpm
	常用出力	882kW(1200ps)×345rpm(75%)	910kW(455kW×2)×1709rpm
	付属品	過給機、空気冷却器、潤滑油ポンプ スラスト軸受 ×1 弾性継手 ×1	減速ギヤ (スラスト軸受、2速切換クラッチ付) ×1 電気推進制御盤、スターターネル ×2
機関部	主発電機 形式 容量×回転数×台数	交流ブラシレス式 275kVA(220kW)×1200rpm×2台 (AC450V×60Hz×3φ)	交流ブラシレス式 550~412.5kVA(440~380kW) ×900~675rpm×3台 (AC450~337.5V×60~45Hz×3φ)
	主発電機関 形式 出力×台数 燃料油	4サイクルディーゼル機関 330PS×1200rpm×2台 143g/ps·h(100%負荷時)、A重油	4サイクルディーゼル機関 650~487PS×900~675rpm×3台 143g/ps·h(100%負荷時)、A重油
	補助発電機(or停泊用) 形式 容量×回転数×台数	交流ブラシレス式 49kVA(39.2kW)×1800rpm×1台 (AC450V×60Hz×3φ)	交流ブラシレス式 49kVA(39.2kW)×1800rpm×2台 (AC450V×60Hz×3φ)
	補助発電機関(or停泊用) 形式 出力×台数 燃料油	4サイクルディーゼル機関 68PS×1800rpm×1台 A重油	4サイクルディーゼル機関 68PS×1800rpm×1台 A重油
	燃料消費量	4.43ton/d	5.35ton/d
	機関室長さ	10.8m	9.0m
原運動機台数	制御	プロペラ回転数は主機関の回転数制御によって行う。	プロペラ回転数は、発電機の周波数制御(100~75%)とギヤの高/低速切換制御により100~56%の範囲で制御する。 最低プロペラ回転数に対応する船速以下の船速制御及び後進制御は、2枚舵の舵角制御により行う。
	常用航海時	主機関1台+主発電機関1台	発電機関3台(2台で低速航行可)
	タンククリーニング時	主機関1台+主発電機関2台	発電機関3台
	出入港時	主機関1台+主発電機関2台	発電機関2台
荷役時	荷役時	発電機関2台	発電機関1台



▲図 4.2.1 機関室配置の一例



▲図 4.2.2 ブリッジコンソール配置の一例



▲図 4.2.3 操船コンソールの構成イメージ

(以下77頁よりのつづき)

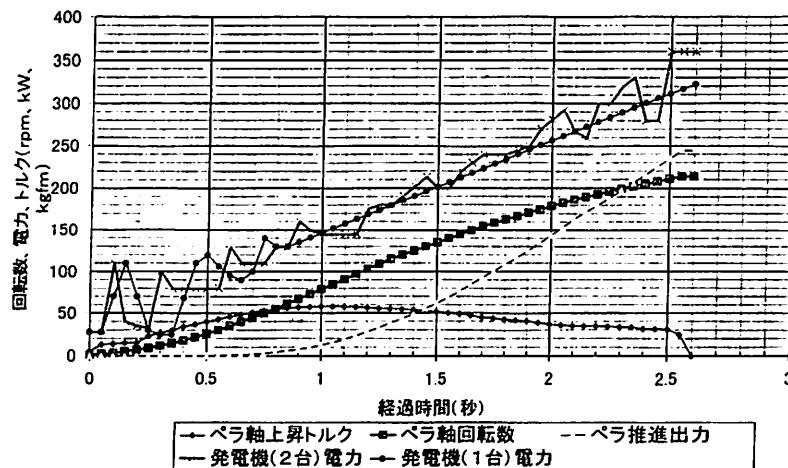
に達している。方位制御、船速制御とも良好に行われており、右舷側に0.1 L 分シフトした状態で直進している。

自動着棧の場合(図4.3.10)、予め立てられた操船計画通りに操船が行われて着棧している。

このように、非常に優れた操船性が得られることがわかる。

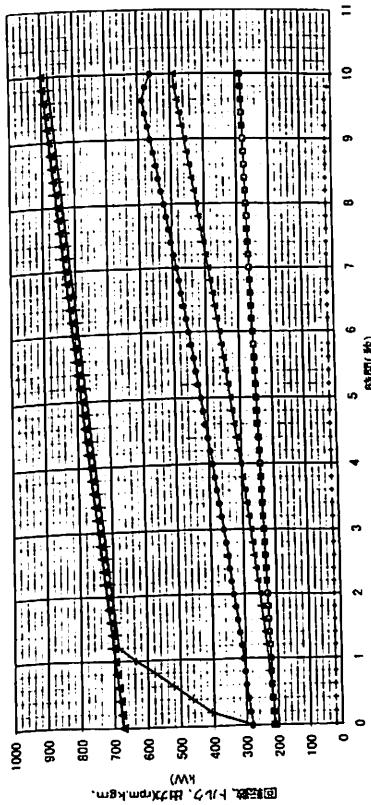
4.4 新型電気推進システムの経済性

前述のごとく、船舶の電気推進が、在来特殊用途を除



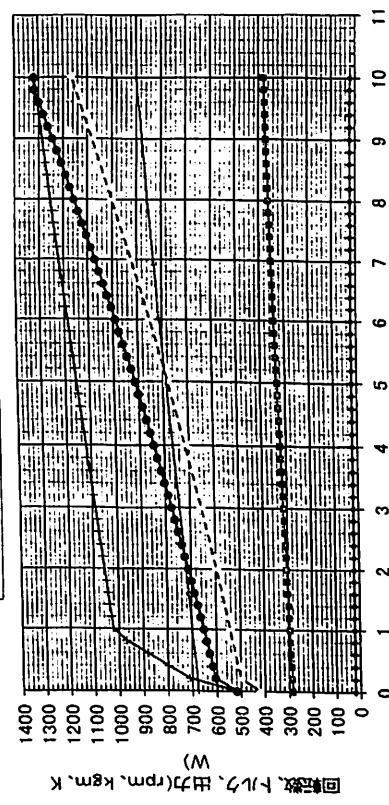
▲図 4.3.1 低速クラッチの投入

—プロペラ 回転数
—プロペラ回転数
—発電機出力(発電機)
—発電機負荷(2台)
—発電機回転数
(2台)



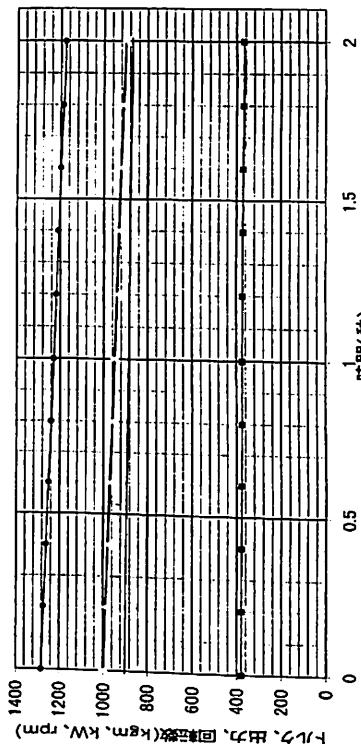
▲図 4.3.2 低速クラッチ入状態で675 rpmから900 rpmまで増速

—ペラポンチ上トルク
—プロペラ回転数
—ペラポンチ出力
—発電機出力
—発電機負荷
—発電機回転数



▲図 4.3.4 高速クラッチ入状態で675 rpmから900 rpmまで増速

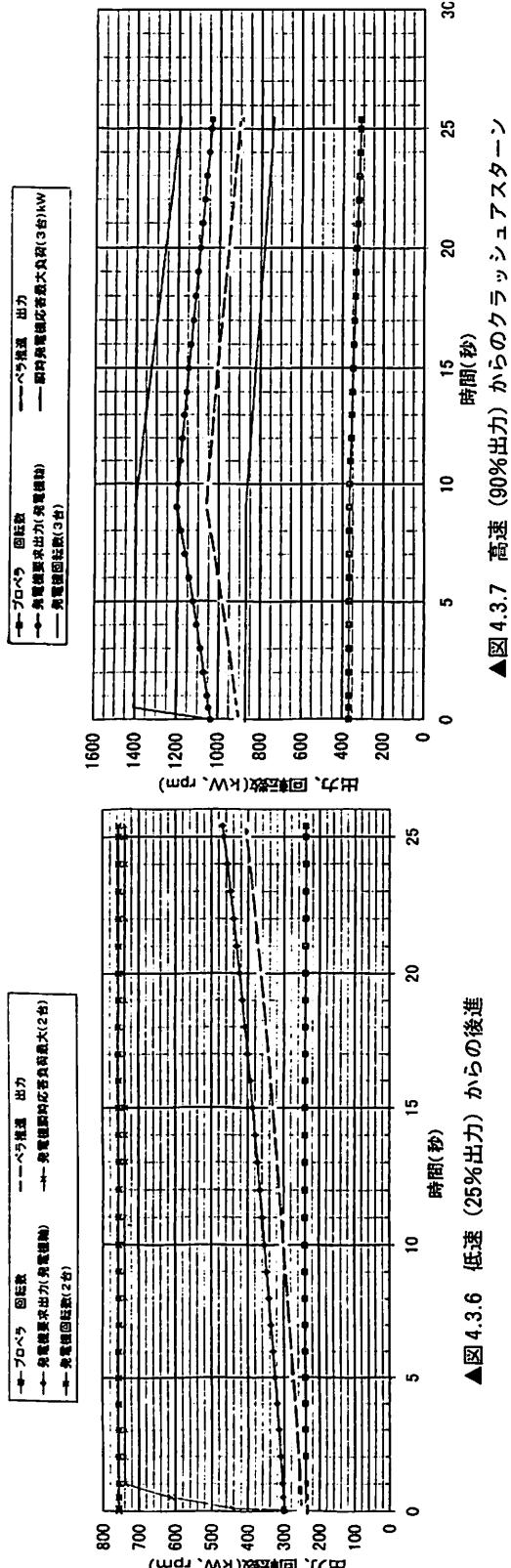
—プロペラ 回転数
—プロペラ回転数
—発電機出力(発電機)
—発電機負荷(3台)



▲図 4.3.3 低速クラッチから高速クラッチへの切換

—ペラポンチ上トルク
—プロペラ回転数
—ペラポンチ出力
—発電機出力
—発電機負荷
—発電機回転数

▲図 4.3.5 全速(100%出力)から90%出力への減速



▲図 4.3.7 高速 (90%出力) からのクラッシュアスターーン

▲図 4.3.6 低速 (25%出力) からの後進

いては、採用されることが少なかったのは、優れた特長が認められるにもかかわらず経済性の不利が解決されなかつたことに他ならない。

今回われわれが提案する新形式の電気推進システムについて、先ず、試設計の対象とした660 GT型ケミカルタンカーに適用した場合の建造コストと燃料経済性の調査を行い、次に、新形式の電気推進システムが経済的に成立するための条件を調べるために、便宜上、660 GT型ケミカルタンカー (DW 約1,300 T, 貨物油タンク約1,350 cu.m) に類似した在来の1,250 MT積 (1,400~1,700 cu.m) 内航ケミカルタンカー (ディーゼル推進) をモデルとして取り上げ、これに新形式の電気推進システムを採用する場合について、在来船のそれと比較する形で、運航経済性の試算を行った。

4.4.1 660 GT型ケミカルタンカーに適用の場合の建造コストと燃料消費

従来から多く用いられている低速ディーゼル機関による推進方式と今回の新形式電気推進システムによる方式について、建造コストおよび燃料消費を調査比較した。なお、電気推進については、インバーター/コンバーターを用いる従来の電気推進方式をも参考として比較した。結果を表4.4.1に示す。

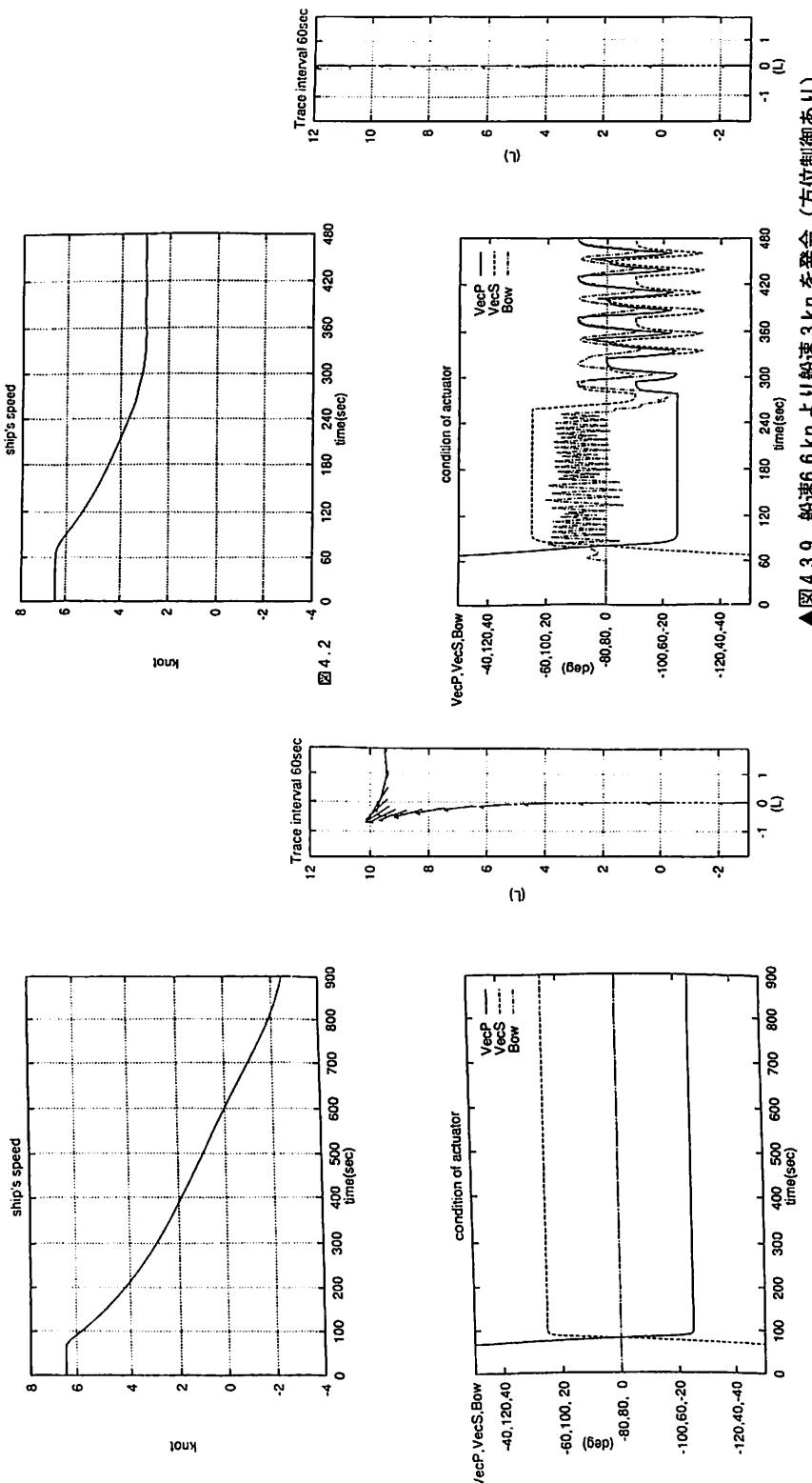
調査の結果、判明したのはつぎのことである。

- 新形式電気推進システムは、従来のインバーター/コンバーターを用いる電気推進システムに比べて、建造コストにおいて有利である。
- 電気推進方式は、従来から言われている通り、ディーゼル推進に比べて、建造費、燃料消費において不利である。
- 新形式電気推進方式を採用した場合、機関室長さは約1.8 m短縮が可能であり、貨物油タンクの容積を約3.5%は増加できることがわかった。

4.4.2 1,250 MT積ケミカルタンカーをモデルとして適用した場合の運航経済性

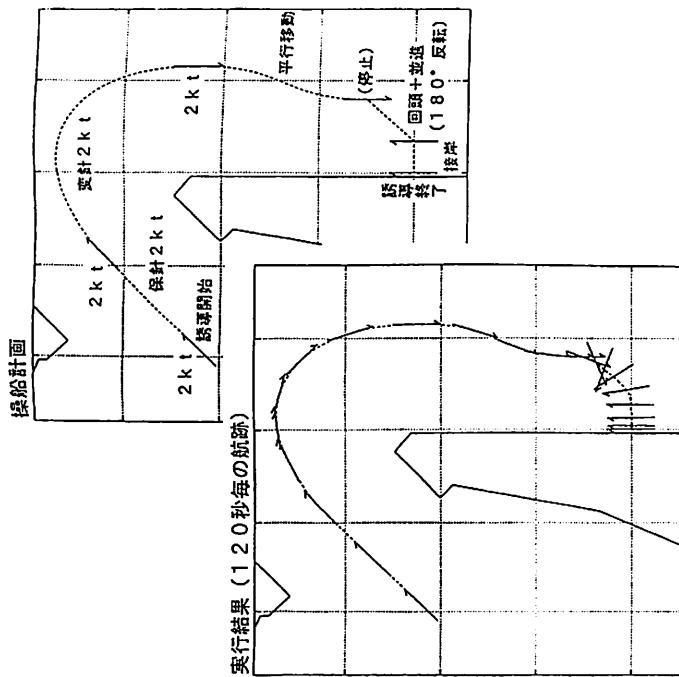
今回開発した新形式電気推進システムが経済的に成立するための条件を調査する目的で、前記の試設計対象船 (660 GT型ケミカルタンカー) に類似し、かつ、運航関係の経費データが把握されている在来の1,250 MT積ケミカルタンカー (ディーゼル推進) をモデルとして選んで、運航経済性の比較検討を行った。なお、電気推進については、インバーター/コンバーターを用いる従来の電気推進方式をも参考として比較した。

試算にあたって、次の仮定を設けた。



▲図 4.3.8 船速6.6 kn よりクリラムシェル発令

▲図 4.3.9 船速6.6 kn より船速3 kn を発令（方位制御あり）



(1) 船舶経費

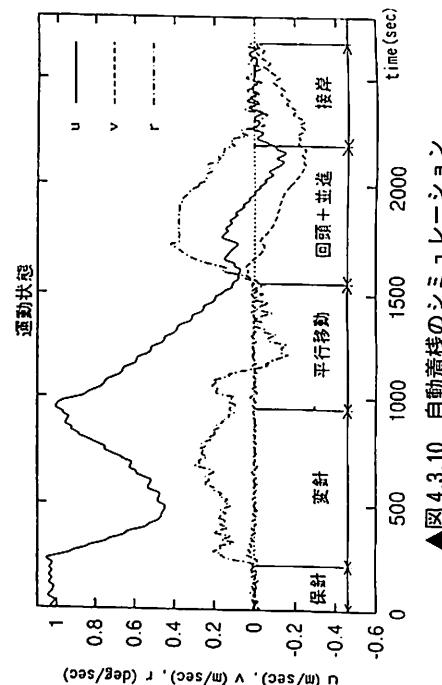
ディーゼル推進の場合には、推進設備・主発電機設備等、4.4.1項で調査した事項の金額が船価に占める割合を20%と仮定し、これをベースとして、電気推進の場合の船価を仮定した。この船価に対応して、各項目の経費を算出した。なお、保守費、潤滑油消費に関しては、4.4.1項で行った調査結果を採用した。

(2) 運航経費

運航経費は燃料費、港費よりなり、稼働日数、就航航路等により流動的である。今回の試算は次のようにした。

- 燃料費：A 重油使用とし、4.4.1項で算定した条件・金額とする。
- 港 費：船舶経費と運航経費の合計経費の5%と仮定した。

以上の条件に基づいて算定した結果、運航に要する年間全費用は表4.4.2に示すようになり、今回開発した新形式電気推進システム搭載船の場合、従来のディーゼル推進船の場合に比べて、年間全費用が約4.4%増加することがわかった。なお、インバーター/コンバーターを用いる従来の電気推進方式においては、年間全費用の増加は約5.5%であり、新形式のシステムが明らかに優位にある。



▲図4.3.10 自動着棧のシミュレーション

4.4.3 考察

4.4.2項で試算した結果は、われわれが試設計の対象とした660 GT ケミカルタンカーについてもほぼ同じであると考えられる。従って、新形式電気推進システムの経済性をディーゼル推進方式並みとするための対応について考えてみる。

(1) 運賃収入の増加

輸送貨物の運賃単価を一定とすれば、運航に要する費用の増加に見合うだけ輸送量が増加する必要がある。すなわち、輸送量の増加に相当するだけの貨物油タンク容量の増加および積載重量の増加を要する。また、年間稼働日数の増加による增收も考えられる。今回の検討によると、載貨重量は変わらず、貨物油タンク容量の増加が約3.5%程度である。従って、輸送する貨物を重量的には増加できないが、約3.5%軽い貨物を輸送できるので、輸送貨物の種類を拡大できることの経済的効果が期待できる。年間稼働日数の増加による収入増加については、定量的把握は困難であるが、定性的には、出入港・離着棧の所要時間の短縮が可能であることから、年間稼働日数も多くなると考えられる。

(2) 建造費の低減

今回の試設計では、載貨重量確保のため、船型は変わ

▼表 4.4.1 低速ディーゼル機関推進と電気推進の比較（総括表）

	低速ディーゼル 機関推進 (VecTwin 装備)	電気推進 (VecTwin装備)			備考	
		インバータ／コンバータによる回転数制御				
		(A) 減速装置なし	(B) 減速装置付			
システム概要	D: ディーゼル機関 M: 推進用モータ G: 主発電設備 RG1: 減速装置 (出力: 14L - T) RG2: 同上 (出力: 24L - T) I: インバータ FPP: 固定ピッチ プロペラ					
推進用動力	1,600ps (1,176kW) ×380rpm	500kW × 2 ×380rpm	500kW × 2 ×1800/380rpm	500kW × 2 ×1800/380rpm		
推進装置、主発電設備イニシャルコストの比較	100%	167.5%	157%	146%		
燃 料	航行時 (1日当たり)	t/d 4.43	t/d 5.36	t/d 5.36	t/d 5.35	
消費量	年間消費量	958 t (100%)	1,125 t (117.4%)	1,125 t (117.1%)	1,123 t (117.2%)	
船体構造開港事項	機関室長さ	10.8 m	10.8 m	10.8 m	9 m	
	機関・電気部 主要機器重量	合計 34.5 t	合計 45.6 t	合計 53 t (※1)	合計 54.9 t (※1) 合計 39.3 t (※2)	
	載貨重量 (喫水4.15m)	約1,300 t	約1,300 t	約1,300 t	約1,300 t	
	貨物油タンク容積	約1,350 m³	約1,350 m³	約1,350 m³	約1,396 m³	

注：(1) イニシャルコストの比較は、比較対象機器についてである。

(2) 使用燃料油はA-oilとし、消費量の計算ベースは稼働日数350日／年(航走180日、その他170日)としている。

らないものとしたが、これを短小化して建造費を低減することも考えられる。

(3) 乗組員の削減による船舶経費の低減

船舶経費の中で船員費の占める割合は極めて大きく、乗組員の削減は経済性の面での効果が大きい。今回開発した電気推進方式においては、より安全で、操縦がより容易な運航・操船システムが実現することから、この方式を採用する場合、乗組員数の削減が可能であると考えられる。

(4) 軽荷航海における船速増加による稼動向上

往來のディーゼル推進においては、軽荷航海時、主機回転数は満載航海時と同じレベルにされるのが通例である。しかし、電気推進においては、推進電動機は定格力量の範囲内においては、何れの点ででも連続使用が可能であり、軽荷状態における電動機回転数を満載時よりも

▼表 4.4.2 1,250 MT 積内航ケミカルタンカー（在来型）に新形式電気推進システムを採用した場合の年間運航費の試算

	在来方式 (ディーゼル主機)	電気推進	
		インバータ／コンバータ方式 (方式(A))	新形式 (方式(C))
船舶経費	100%	104.1%	102.7%
燃料費	100	117.4	117.2
港 費	100	100	100
(小計)	100	112.3	112.2
年間費用合計	100%	105.5%	104.4%

注：(1) 各項目とも在来方式(ディーゼル主機)を100%としている。
(2) 年間費用合計は、各項目の単純平均ではなく、各項目の費用を加重平均したものである。

増加させることに何の支障も生じない。

これによって、軽荷航海時の船速を増加させ、船の稼動効率を上げ、その結果、運賃収入が増加し、経済性が向上することが期待され得る。一例として、ディーゼル船での年間運航日数180日、航海数45往復と仮定した場合、本電気推進船に置き換えると、年間46.5航海となり、1.5航海の増加となることがわかった。

5. あとがき

舵を従来のものから高揚力特殊舵の二枚舵システム（ベツツイン・ラダーシステム）に置き換えることにより、われわれの開発した新形式の船用交流電気推進システムは、電気推進システムの形態を従来のコンセプトから一変させ、単純化することができ、従来の電気推進システムの難点を大きく軽減するものである。これは、單なる概念に止まらず、実用的に極めてフィージブルなものである。

のであることをご理解いただけたと考える。

開発した新形式の船用交流電気推進システムは、本文3.2.2項に要約したように、数々のメリットを与えるものであり、在来船の場合に比べて建造コストおよび定格燃料消費が若干高くなる（従来のインバーター／コンバーター方式の電気推進システムに比べて優位にはあるが）という不利は、上記メリットを含めてトータルに考えると、相殺されて余りあるものになるであろうことを確信する次第である。

● 新刊紹介

阿波丸撃沈

太平洋戦争と日米関係

ロジャー・ディングマン著

川村孝治訳

日本郵船歴史資料館監訳

A5版/280頁/定価2,730円(税込)/発送費390円

終戦間近の1945年4月1日夜。航海の安全を保障されていたはずの救援物資輸送船「阿波丸」はアメリカ海軍の潜水艦クィーン・フィッシュ号に撃沈された。史上最悪の海難事故といわれるタイタニック沈没事件をはるかに上回る2,000人余の犠牲者をだす大惨劇であった。

なぜこのような悲劇は起きてしまったのか。故意なのか偶発なのか。戦時中の様々な動乱の中，“アメリカ潜水艦戦史上最大のエラー”とされるこの事件は、戦後50

年以上たつ現在も多くの遺族に決して忘れられぬ心に傷を残すこととなった。

本書は、アメリカの歴史学者が長年明らかにされなかつた日米の資料を駆使し、「阿波丸撃沈」の顛末を詳細に描いている。当時の潜水艦乗組員の心理描写や艦長の軍事裁判、日米の政府の対応、両国民の記憶の変化などが見事に表現されている。また遺族会の発足や苦労、沈船引揚げに至る経過なども詳述されており、まさに渾身の「阿波丸物語」いえる。

太平洋戦争の日米両国の再認識と、将来二度とこのような悲劇を繰返してはならないという思いがこめられた一冊であり、戦争体験者はもちろん戦争を知らない世代の人々にこそ読んでもらいたい。

発行所：(株)成山堂書店

〒160-0012 東京都新宿区南元町4-51

Tel: 03-3357-5861/Fax: 03-3357-5867

船体構造設計

元・近畿大学工学部教授・工学博士 間野正己著

B5判 / 本文 240 頁 / 定価 12,230 円 〒 380 円

本著は船体構造を設計するに当たって、考慮すべき要件を想切丁寧に述べた設計指導書である。

内容は総論で設計手順・合理化・材料・重量・精度等の実務と考え方を述べ、基礎論では強度理論と部材の設

計法、捩り・撓み・振動等との関係を詳述している。

応用論では全体設計・縦強度・捩り強度と、具体的な部材の詳細な設計法を示している。

船体構造設計の実務者および他部門の船舶設計者にも好適な解説書として好評発売中である。

● 株式会社 船舶技術協会 〒104-0033 東京都中央区新川1-23-17 マリンビル 振替 00130 2 70438 ●

● 新機関紹介

大型高性能高速機ディーゼル機関 MTU 8000シリーズ

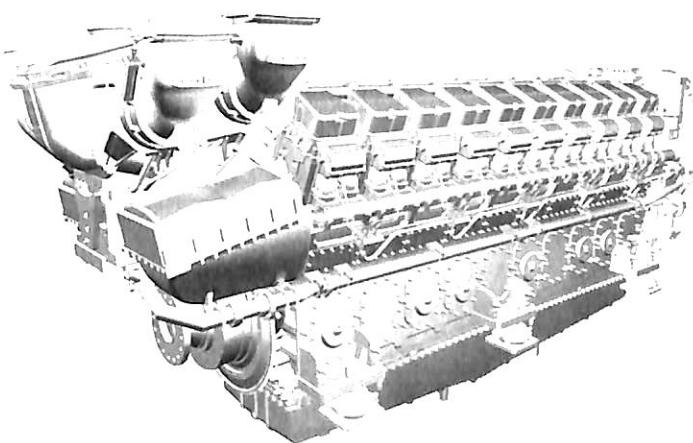
ダイムラー・クライスラー日本ホールディング株式会社
MTU エンジンプロダクトサポート部

1. はじめに

この度、ベンツ車のダイムラー・クライスラーグループ傘下でオフロード用ディーゼルエンジンの製造・販売を担当している『MTU-F社』(MTU Friedrichshafen Business Unit Diesel Engines, Off-Highway of Daimler Chrysler AG)より、『8000シリーズディーゼルエンジン』が発表された。2000年9月のHamburg国際舶用機器展において世界で最初に紹介されたが、日本では、その直後の10月25日に、「IMSE TOKYO 2000」の講演会で、舶用事業部長のMr. Haussmannより詳しく説明された。以下その概要を紹介する。

2. 開発コンセプト

- 頑丈な舶用機関であること
- 高速フェリーの連続高出力及び軍用仕様に対応できる
- 高い信頼性を有し、保守性に優れている
- 燃料油及び潤滑油消費量が少ない
- ライフサイクルとしての低コストである
- 環境にやさしい設計配慮が為されている
- コンパクトでインテグレートされた完全なシステム等である。



▲ 船尾側より見た機関

20 V 8000 M70 主要目

最大出力値	8,200 kW
シリンダー出力（1基当たり）	410 kW
定格回転数	1,150 rpm
気筒排出量	17.36 ℥
内径×行程	265×315mm
寸法（長さ×幅×高さ）	7,440×1,960×3,445 mm
重量（乾）	43トン
最大出力燃費	195 kWh
重量体出力比	5.3 kg/kW
平均有効圧力	24.6 bar
平均ピストン速力	12.1 m/s
燃料噴射	Common rail
ターボチャージャー	ZR265 with STC×4
V角度	48°
定期開放検査の所要時間	24,000時間

8000シリーズの開発に当たっては、1シリンダ機関でのテストからスタートし16シリンダ機関、20シリンダ機関へと順次拡大し、合計3,250時間以上の運転時間に達したが、その間燃焼プロセス、各コンポーネントの高サイクル疲労及び低サイクル疲労試験に加えて冒頭に記述した開発コンセプトを確実にさせる目的での試験を実施、システム全体としての全ての確認が得られた。

3. 出力範囲

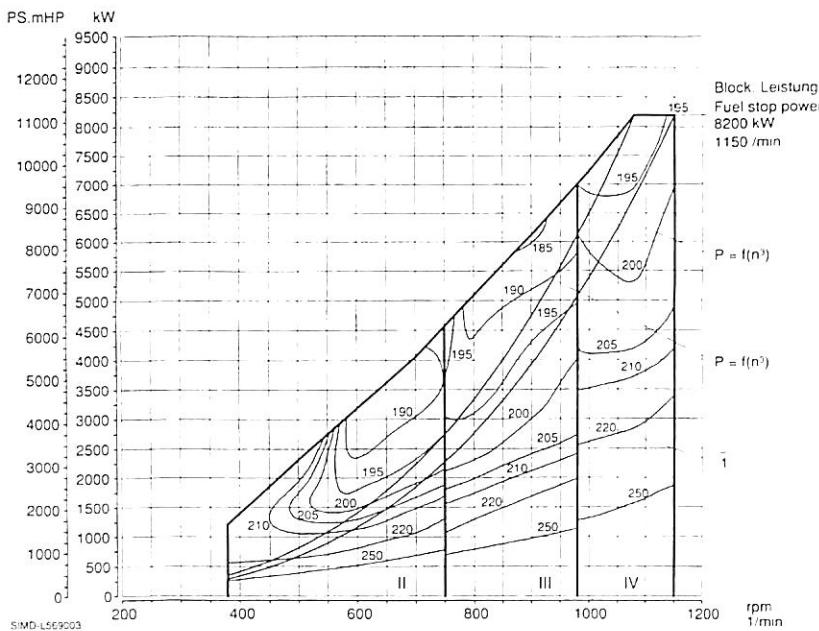
今回発表したのは舶用で表1に示す。

MTU 機関においては、大気温度と冷却海水温度がISO標準状態（大気、冷却海水温度共25°C）にて最大出力が表示されている。（図1）

大気温度45°C、冷却海水温度32°Cでの最大出力はM70機関では変わらないが、

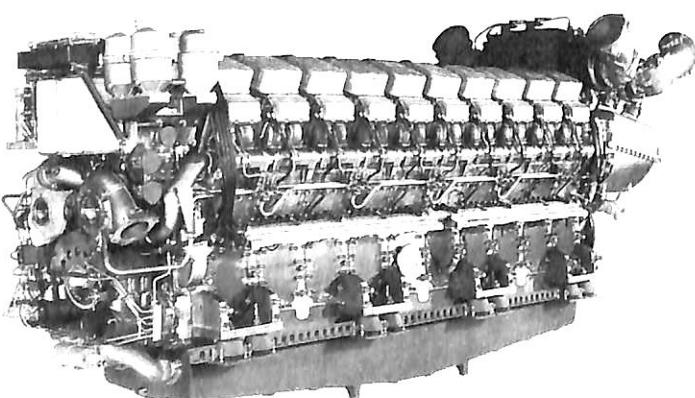
▼表 1

用途	型式	出力(kW × rpm)
主機関(1B) —High Load Factor—	16V8000M70	6560 1150
	20V8000M70	8200 1150
主機関(1DS) —Low Load Factor—	16V8000M90	7200 1150
	20V8000M90	9000 1150
発電機関(3A)	16V8000M50B	6400 1200
	20V8000M50B	8000 1200



▲図 1 特性曲線

M90 機関では3.3%出力が低下する。M50B 機関の場合で出力は IOS 標準ではなく、大気温度45°C、冷却海水温度32°Cにて表示される。



▲ 船首側から見た機関

4. 型式呼称

8000シリーズはいずれも V型のシリンダ配置となり、シリング数は16と20であり、シリンダ口径265 mm、ストローク315 mmで1シリンダ当たりの気筒排出量は17.36リットル(Liter)となる。

注) 従来のMTU機関の型式表示はシリンダ当たりの気筒排出量で表示されてきた、つまり396型機関、595型機関等はそれぞれ3.96リットルもしくは5.95リットルであり、2000型では2000 cc、4000型では4000 ccであったが、8000シリーズは気筒排出量とは関係はない。むしろMTUの新シリーズ機関の2000、4000シリーズ名称の延長として呼称されている。

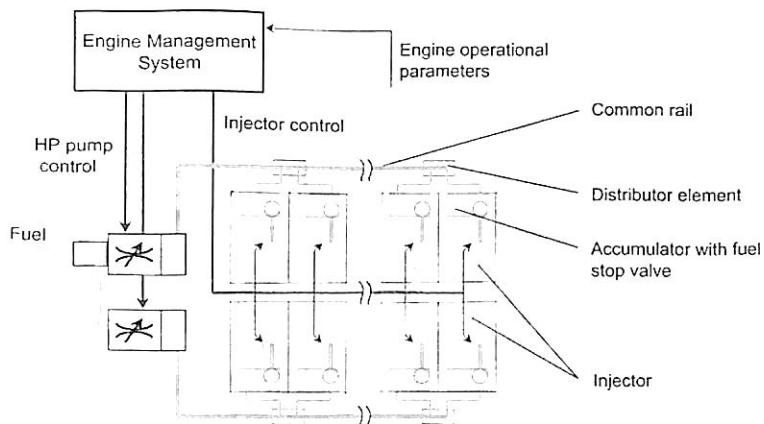
5. 特徴

8000シリーズは基本的にこれまでの様々なMTU機関の特徴を踏襲しているが、8000シリーズ機関として新たに開発採用されたものにつき、いくつか具体的に紹介する。

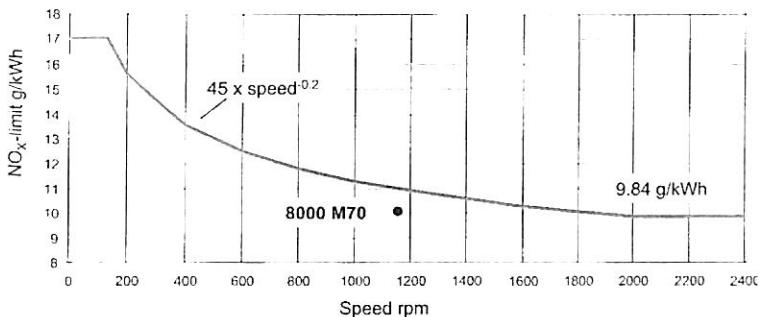
8000シリーズ機関にはコモンレール方式の燃料噴射システムや、排気ガスタービンのシーケンシャル制御システムが電子制御システムに採用されている。(図2)

NO_x値に関しては、ISO8178-4、E3のテストサイクルで、Marpol 73/78、Annex VIの要求値を満足している。(図3)

パワーユニットは、弁シート部インサート付シリンダヘッド、中間冷却水ハウジング、清浄リング付シリングライナ、ピストン及び連続棒から構成され、これらが一体となって組上げられ一つのユニットを構成する。(図4) このユニットはシリンダブロックにボルトで接合される。燃焼室構成部品が一つのユニットとしての独立部品となつた訳でこれまでの機関にはなかった全



▲図2 コモンレール燃料噴射システム

▲図3 NO_x Regulation

く新しいコンセプトが適用されている。

一つのユニットという事での取り扱いのし易さに加えて、ブローバイ発生を押さえ、潤滑油交換インターバルが延び、磨耗による整備間隔の延長が図れる。

自動逆洗潤滑清浄器は全量通油の連続清浄方式が採用されており、潤滑油完全処理が機関内部で実施され、フィルター性能の確保による機関の信頼性の向上と保守費低減につながる。

機関起動方式にはポジショニング装置付空気モータが採用されている。

6. 整備費用

主軸受開放整備方式が変更され、従来の機関では主軸受開放には機関反転の必要から主軸受工事の場合には、機関室スペースの制約から、機関を船外に取り出しての工事が必要であったが、8000シリーズでは、機関の船外取り出しをせずに機関を船内に据え付けたままで、クラ



▲図4 パワーユニット

ンク室ドアから軸受開放工事が実施できる様になった。

これにより定期検査工事機関の短縮及び整備費用の低減が期待される。

表2に20 V 8000 M70 機関の整備費用について、20 V 1163 TB73L 機関との比較を示す。同一の運転プロファイルでの比較で、TBOが20,000時間から24,000時間にも延びる。その結果、規定の部品交換ベースでの、材料費と人工費込みの整備費用が、1163型機関の約60%となり、40%の低減が実現できる。

7. 外形寸法

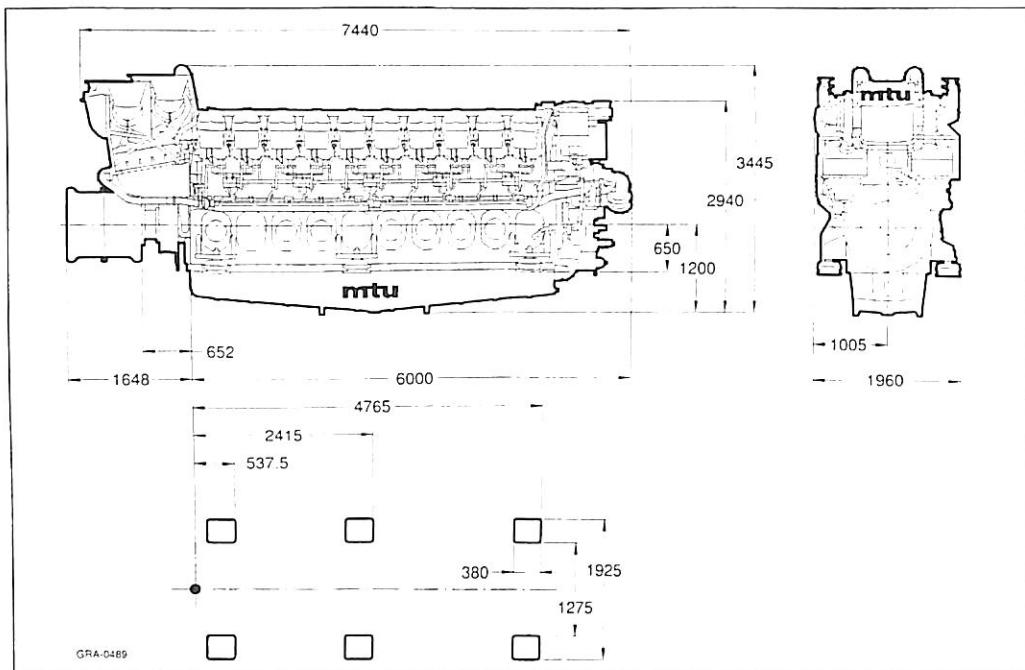
双胴船の様な、幅の狭い機関室への搭載も視野に機関寸法として機関幅を小さくする配慮が為されている。(図5)

具体的には、シリンダV角度が48°に押されており、この為、エンジンは高さ方向に延びる事になるが、断面図にて示される様に、関連装置のレイアウトやPower

▼表2 TBO 保守費用

Engine	Power	TBO	DM h	DM kW
20 V 1163 TB73L	6,500 kW	20,000 h	100%	100%
20 V 8000 M70	8,200 kW	24,000 h	75%	60%
Operating Profile:		3% time	100%	power
		82% time	85%	power
		15% time	~15%	power

TBO: Time Between major Overfauls
定期開放検査の所要時間



▲図5 外形寸法

Unit の採用で軸芯上からの最高点までの高さを約2,250 mmに抑えている。

これは過給空気ダクトや主潤滑油通路などを一体化した強固な球状鉄（Nodular cast iron）を採用し高い信頼性を確保している事で実現されている。

8. おわりに

以上、軽量・コンパクト・大出力に加え幅広い運転範囲と優れた操縦性能という MTU 高速機関の伝統に加え、更なる環境対応や、操縦性の向上、整備費用の低減等々、顧客各位の高い視点での要望に応えて、この度新しく

8000シリーズが発表された。

なお、2001年21世紀の幕開けの年に、20 V 8000 M90 機関及び20 V 8000 M50B 機関、それぞれ 2 台（合計 4 台）が大型ヨットの主機関並びに発電機用原動機として既に受注しており、MTU 社の工場からの出荷される予定である。

—————【お問い合わせ先】—————
ダイムラー・クライスラー日本ホールディング株式会社
MTU エンジン営業部 電話03-5572-7353



● 小型艇の運動特性

小型レジャーボートの直進性と傾き

日産マリーン株式会社 商品グループ

執行役員部長 山本 茂

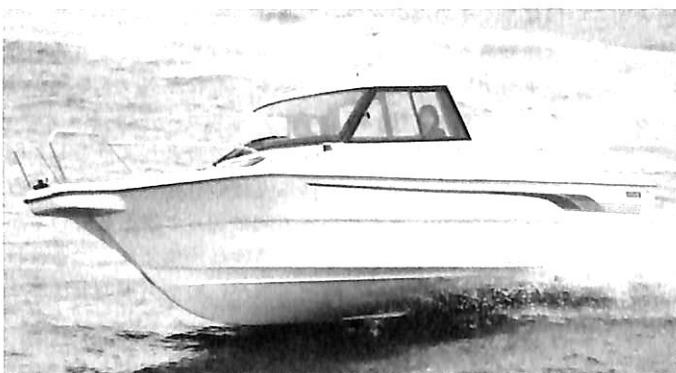
1. はじめに

小型ボートの世界は本船の世界と違って、運動特性などに関するいろいろなことが体系的に整理されていない。それは小型ボートがその重量と大きさの割に大きな馬力のエンジンを積み、高速力で俊敏に走り回るということと、風や潮流、積載物の条件などに敏感に影響を受けるややこしい乗り物のため、体系的な分析を難しくしていると言える。

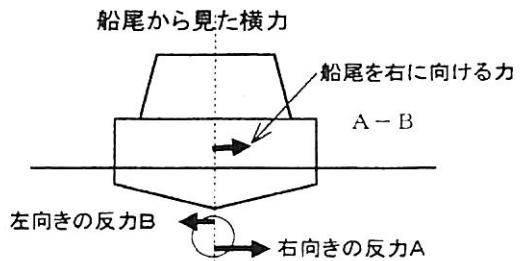
ここでは小型レジャーボートでしばしば問題になる船体の傾きについて注目し、直進性との観点から論じる。これらを考えていく過程で小型レジャーボートの運動特性に関しての理解が深まると考える。以下は現実に発生した問題から、仮説を立て、実船での検証を踏まえてまとめたものである。

2. 直進性と傾き

ボートは水面に浮かんで走る乗り物であり、ステアリングを固定して走ったとしても、意に反してどちらかに曲がっていったり、ステアリングが取られたり、傾いて走ったりする。この原因にはいくつか考えられるが、また複雑に作用し合った結果として発生している場合が多



▲ ダイナミックなカーブを描いたレジャーボート（操船者は筆者）



右回転プロペラの場合

▲図1

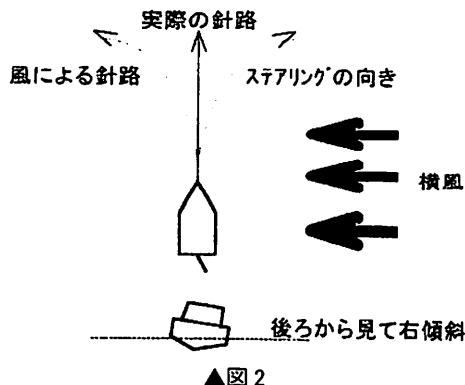
く、小型ボートの運動特性を論じることを難しくしている。

では要因別にどんなことが考えられるであろうか。

2.1 プロペラ回転によるもの

エンジンが一基だけのボートの場合、プロペラの回転による影響（「パドルラダーエフェクト Paddle Rudder Effect」や「スクリューカレントエフェクト Screw Current Effect」、又は「転がり特性」とかいいろいろ呼ばれる）がある。つまり、後ろから見て右回りのプロペラは船尾を右方向に持って行こうとする現象である。これはプロペラ回転時の上下の水深の違いによる静水圧の差によるものと言われている。

この現象はエンジンを二基にし、プロペラ回転をそれぞれ反対向きにしてやれば基本的に解決する。あるいは潜水艦や魚雷のプロペラのように一本の回軸にそれぞれ反対向きに廻る二個のプロペラを組み合わせたものも、この現象を抑える効果がある。（図1）



2.2 風による影響

風によっても当然ボートは偏向する。ボートが横風を受けて走る時、まずボートの進行方向は目標方向より風下側に流される。操縦者は無意識のうちに風上側にステアリングを切っていることで旋回しているのと同様になり、ボートは風上側に横傾斜してまっすぐ走っていることになる。例えばボートが右に傾いたままで真っ直ぐ走っている場合は右から風を受けている。これが一般的には誤解されやすい状態である。ボートは風が来ている側に傾くのである。(図2)

従って、走行中に風に流されやすいボートは横傾斜もしやすいということになる。

船底にスケグなどを設けて直進性を良くすることは走行時の横傾斜への対策とも言える。

ではどのようなボートが横傾斜しやすいと言えるのであろうか？

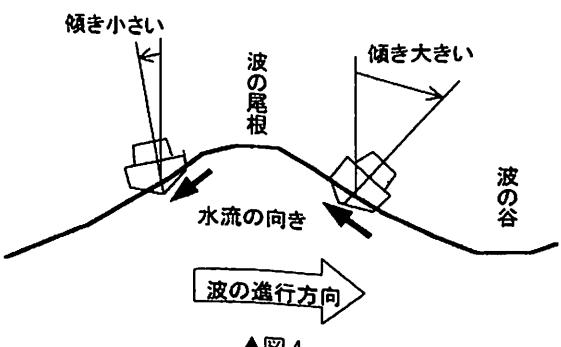
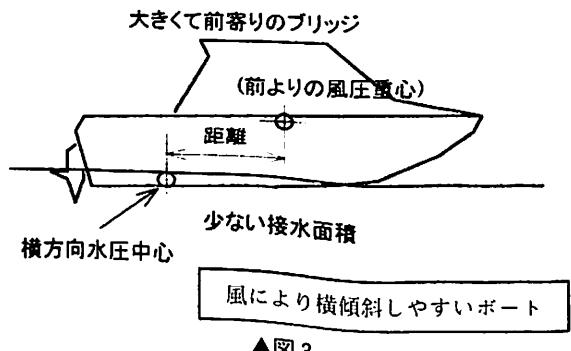
特に軽量で高速力タイプのボートは接水面積が小さくかつ水圧中心が船尾寄りになるので、横風を受ける風圧中心との距離が大きくなり、ボートを偏向させるモーメントも大きくなるから、ステアリングによる修正も多くの必要になり、結果として横傾斜も大きくなる。(図3)

2.3 潮流による影響

風による影響と同様に潮流による影響も当然受ける。図3で風の代わりに右舷側から潮が流れているとした場合も全く同様の現象が出る。

『旋回中のボートは内傾斜する』

ボートは自動車と違い、ステアリングを切れば必ず船体を内傾斜させるモーメントが発生している。これを前



提にして運動特性を理解する必要がある。なぜ内傾斜するかについての説明はここでは省略する。

2.4 波による影響

波によっても当然ボートは傾く。問題は波により揺れるように傾く一時的なものではなく、一定して傾くような現象で、特に横波を受けた状態が顕著である。波の進行方向の傾斜に乗った場合などは波の谷側に向かって傾いたままとなり、危険な状態となる。ところがこの波の反対側に乗った状態ではあまり傾かず恐い感じはない。

これは波の表面の流れの影響である。波は水の移動ではなく、その場の水の上下運動（厳密には回転運動）の伝播であるから、波の表面には波の進行方向とは逆向きの水流が見かけ上発生している。これがボートを傾かせるわけである。(図4)

図4の右の状態では、この位置で直進しようとした場合、波の尾根に向かって持ち上げられるのを無意識のうちにステアリングを波の谷方向に切って修正しているから、余計に船体は谷側に傾き危険な状態になる。これは比較的直進性の良い、横滑りしない船型のボートに発生しやすい現象である。

2.5 機械式と油圧式ステアリングの違いによる特性の違い

ポートのステアリング機構が機械式（ケーブル式）か油圧式か、機械式ならばノンフィードバックタイプ（ドライブ側からの反力をキャンセルする機構のついた装置）かそうでないかによっても走行特性は変わる。既に述べたプロペラ回転による「パドルラダーエフェクト」の現象が異なった形で現れる。

ノンフィードバックで通常の機械式ステアリング機構の場合は「パドルラダーエフェクト」によるドライブへの操舵モーメントにより、ドライブ自体をプロペラが後ろから見て右回転なら右方向に持って行くように働く。その結果、右へ曲げられたドライブによりポートは右方向に曲がろうとする。従って、真っ直ぐ走らせるために若干左へステアリングを切っていることになり、左傾斜状態で走ることになる。後ろから見て右回りプロペラであるから、プロペラ回転の反作用により、船体を左に傾斜させるモーメントが元々働いているので余計に左傾斜して走ることになる。

ところがステアリング機構が油圧式だったり、機械式でもノンフィードバックタイプと呼ばれるものだった場合は話が少し変わってくる。

この場合は最初にプロペラのパドルラダーエフェクトによる横力がドライブに加わってもドライブ自体が舵を取られるように動かない。従って、パドルラダーエフェクトは船体自体に加わることになり、後ろから見て右回転プロペラなら船尾を右に押しやり、ポートは左に偏向することになる。これに対して操縦者は無意識のうちに右に若干ステアリングを切って真っ直ぐ走らせていることになる。その結果、元々プロペラ回転の反作用により左傾斜していた船体はステアリングによる修正により、右傾斜モーメントが働き、相互に打ち消し合うように働く。（図5）（図6）

しかし、一概にパドルラダーエフェクトといってもその効果の程度はプロペラのサイズ、船型、重心位置との関係等によりかなり変わるから、どのポートも同様にこの現象が出るわけではない。

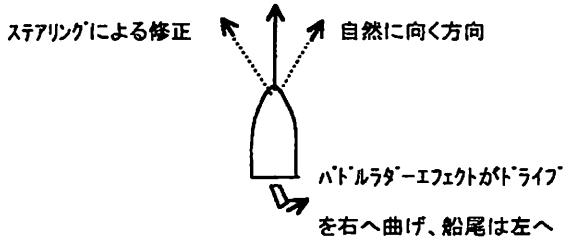
2.6 ヒール（Heel 横傾斜）とトリム（Trim 縦傾斜）による偏向

ポートが真っ直ぐ走らない要因の大きなものに、このヒールとトリムによる影響がある。（図7）

図7の左のように横傾斜していない場合の接水面形状は中心線に対し左右対称で、しかし、左傾斜した場合は接水面のV角度の中心は右向きにずれる。これにより

機械式(ケーブル式)ステアリングの場合

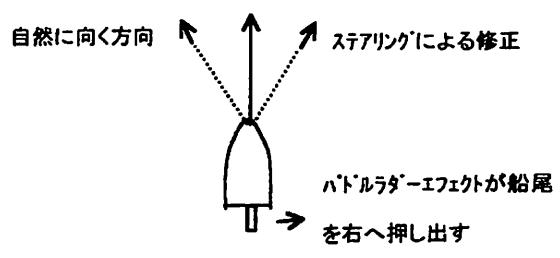
実際の進行方向



▲図5

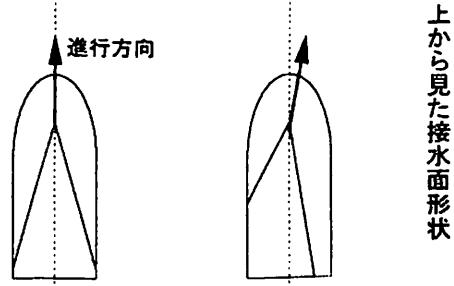
油圧式(又はノンフィードバック式)の場合

実際の進行方向



▲図6

横傾斜無し　左傾斜の場合



▲図7

ポートは左側の抵抗が増えているはずなのであるが、それに打ち勝って右に行こうとする力が働く。

この傾向はポートにトリム（縦傾斜）がついている状態や、ごく低速では顕著に出る。トリムがついているほど船底のV角度の先端があたかも、くさび型舵板の先端で水を切るように働くためと考えられる。（図8）

ポートの横傾斜は左右の重量アンバランス、プロペラ回転による反力、風や潮流や波等によっても発生するか

ら、その度にこのような偏向力も発生していることになる。仮に風や潮流や波の影響が全く無いとした場合、ヒールしたままのボートが走り始め、ハングを越え、滑走状態に入るまでには既に述べた理由によって、何回か偏向力の大きさと、場合によっては向きが変わる。ステアリングを握っている手には左右にふらつくように感じるはずである。普通では気付かないが、厳密に言うと、ボートは立ち上がりから最高速に達するまでにそのトリム変化に合わせ、何回か左右に偏向している。ボートの運動特性は難しくて、ややこしいのである。

2.7 ではどうしているのか

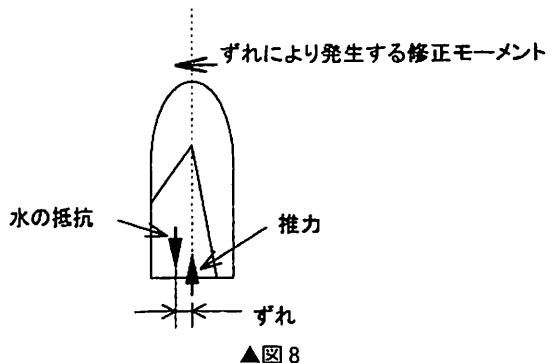
2.7.1 ドライブのトリムフィン (Trim Fin)* による修正

調整は例えばボートが右に偏向する（自然に曲がって行く）のであれば、通常の機械式ステアリングシステムを前提にした一般論としては、トリムフィンの後ろ側を右に向ける。こうすることでドライブ全体は左へ舵を切ろうとする方向に力が加わり、右向きの偏向力をキャンセルする。といっても、ここで厄介なのは、調整したときの速力ではバランスしたもの、他の速度域ではバランスしていない場合も多いということである。

次に、油圧式や、機械式でもノンフィードバックタイプの操舵システムの場合は少し話が変わる。これらのシステムでは外力によるステアリングの取られは基本的に発生しないから、偏向を修正する意味でのトリムフィンの効果は期待できない。強いて言えば通常の機械式と同方向にトリムフィンを向ける。こうすることでトリムフィンは固定式のシャフトに付いたプロペラの先に有る小さな舵板と同様になり、船尾全体を横に向かせるモーメントを発生させる。ただし、これの絶対値は小さいのであまり期待できない。操舵力をバランスさせる効果は期待できる。

2.7.2 ウエイトによる調整

ボートの偏向はヒール（横傾斜）やトリム（縦傾斜）と密接な関連が有るから、ウエイトによりヒールやトリムを調整することは手っ取り早く効果的である。特にヒールの調整が効く。例えば、右回転プロペラのボートが静止状態で若干左傾斜していると、走行中はより強く左傾斜と右への偏向が出る恐れがある。このような時は静止状態で若干でも右傾斜になるように搭載品や儀装品または調整ウエイトを右側に載せれば、左傾斜も右への偏向もかなり押さえられる。船体重量の3～5%程度のウエイトでもかなり効果が出る。



▲図 8

2.7.3 トリムタブ (Trim Tab)** による修正

これは特に横傾斜を修正する為に取られる方法としては一般的である。これには固定式と油圧式が有る。油圧式は走行中に必要に応じてヒールとトリムを調整できるが、固定式はトライ & エラーで最適な角度を選ばなければならない。横傾斜対策で固定式トリムタブを取り付けた場合は横傾斜が修正されるのと同様に、副作用としてトリムへの影響も出る。例えば左傾斜を対策するつもりでトランサムの左舷側のトリムタブを下向きにした場合、右傾斜モーメントが発生すると同時に船首を下げるトリムモーメントも発生している。横傾斜を直したら以前よりも船首が下がり、ある速度域では船首からのスプレー発生が増えたり、波に突っ込みやすくなったりということもある。

2.7.4 エンジン取り付け位置による修正

日本の量産型小型ボートの世界では見かけないが、エンジン1基掛けの場合、セッティング位置をボートのセンターラインから若干左右にオフセットすることも偏向や傾きの修正に役立つ。小さな船体に大馬力エンジンを1基搭載するボートレースの世界では右回転プロペラならば右にエンジンを数10ミリずらしてセッティングすることも行われているようである。これにより、左への偏向力が発生するから、もともとの右への偏向力をキャンセルするように働く。また、エンジンが右にオフセットしていることにより、プロペラ回転の反力による左傾斜を押さえる働きも期待できる。

* Trim Fin : 船内外機のプロペラ後方についている調整用フィン

** Trim Tab : フラップとも言う

3. おわりに

以上述べてきたように、小型レジャー・ボートの運動特性はいろいろな要因に左右され、かつそれらが複雑に作用しあっている。またその結果が顕著に現れるので、乗る人を悩ませる。ここに書いた内容が、安全で快適なボ-

ティングを目指し、小型レジャー・ボートの運動特性についての疑問や課題を解決していく上でのひとつの指針となれば幸いと思っている。

(本稿はボートヨット専門誌「KAZI」1998年1月号から12月号に連載した拙稿「パワー・ボートアカデミー」の中から抜粋・要約したものである)

● ニュース

世界初の実用化を目指す、水中ドッキング機能を持つ自律型無人潜水機を開発

川崎重工業株式会社

● AUV とは

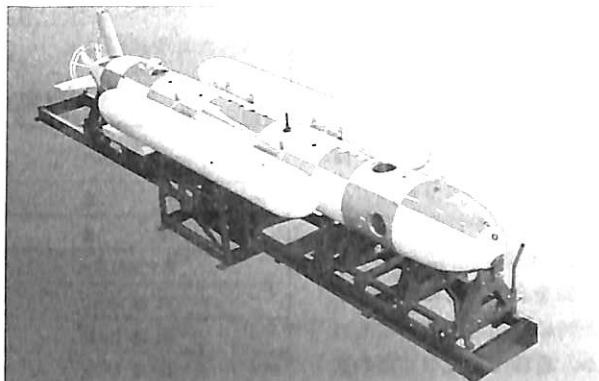
川崎重工(㈱)は、水中の定点を充電およびデータ回収拠点としてドッキングできる機能を持った自律型無人潜水機 (Autonomous Underwater Vehicle: 以下 AUV) を独自開発し、試作機「マリンバード (Marine Bird)」を完成した。AUV とは、遠隔操作や監視などの人手を必要とせず、あらかじめプログラムされた行動計画に従って人工知能と電池だけで水中の様々な調査を行うロボットのこと、今回のドッキング機能を持たせた AUV として当社は世界で初めての実用化を目指している。

● 用途

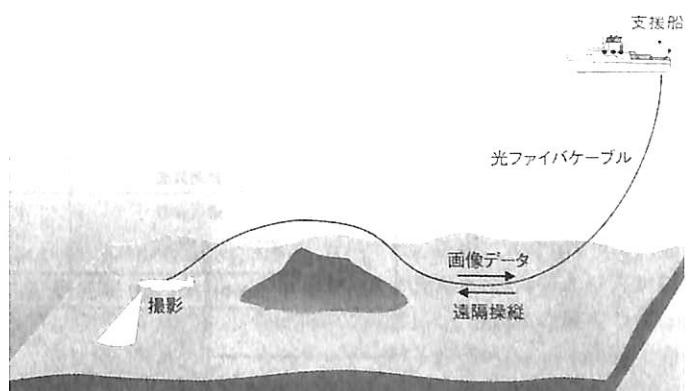
今回当社が開発した AUV 「マリンバード」は、水中の様々な環境データ (水深、水温、地形、採水、採泥など) を収集したり計測器材の設置作業を行うなど、近海や湖の漁場や海中工事等の観測調査を目的として開発したもので、機体にはドッキング機能を含む自律制御装置、推進装置、重量・浮量調整装置、航海装置などを搭載し、動力源には大容量リチウム・イオン二次電池を使用している。また海中の航行においては、巡航速力2.5ノット、最大潜行深度100 m、1回の充電で5時間の航続性能を有している。

● 特 徴

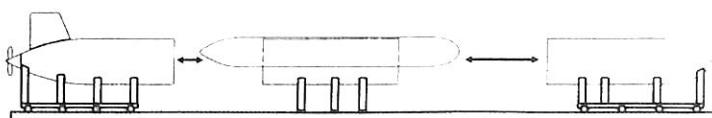
水中でのドッキング機能を持たせたことにより、支援船に収容することなく充電およびデータ回収を行うことができる点にあり、充電設備を設けた水中基地にドッキングして長



▲ AUV マリンバード



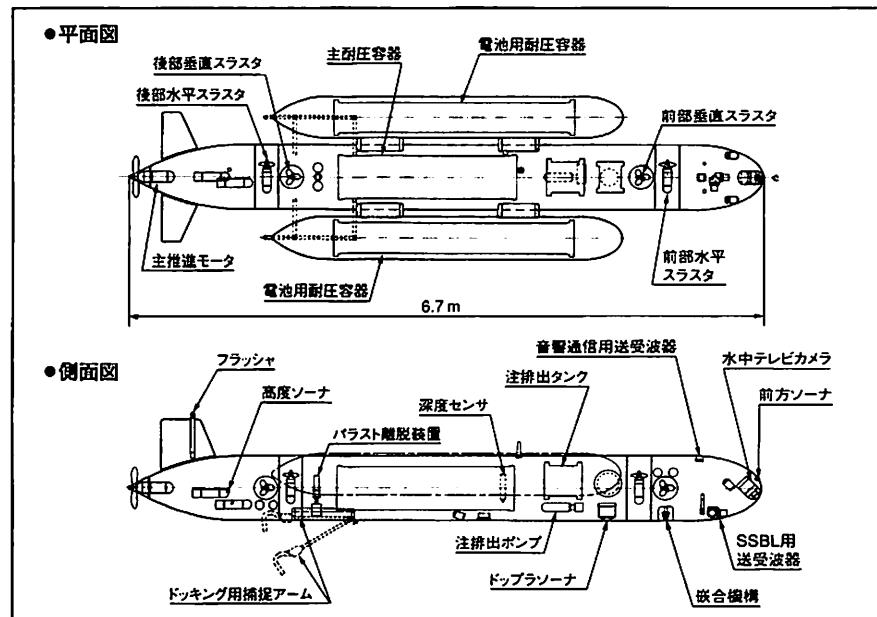
▲ 海底調査状況



▲ 本体は架台に載せたまま前・中・後の3分割点検・整備、機器類電池の交換など簡単にすむ

時間の水中観測調査を可能としたことに加え、大型潜水船等を移動ステーションとして運用することにより、AUVを海底付近まで運搬して観測調査を行い、再び潜水船に回収後他の調査地点に移動して次の調査を行えるなど、新しい水中観測調査方法の実現により効率化を図ることができる。

AUVが、すでに実用化されている遠隔操作型無人潜水機(ROV)と異なる点は、水上の支援船から電線を経由して遠隔操縦したり電源を供給する必要がなく、内蔵の各種センサや自律制御装置により自力で水中観測調査を行えることで、AUVの航行中は海上の支援船を必要としないため荒天時の運用も可能となるほか、有線操縦でないため自由に運動ができることや、水上の支援船等にかかる費用が少ないので運用コストが低くできるなどのメリットがあり、将来の有効な水中観測調査機として期待されている。



● マリンバード主要諸元 ●

寸 法	約(L)6.7×(B)1.8×(H)1.1m	
重 量	約1300kg	
最大潜航深度	100m (深々度への設計変更可能)	
巡 航 速 力	約2.5k t	
航 案 性 能	約5時間 (約23km) × 充電回数	
構 造・材 質	フレーム:耐食Zn-Mg合金、外皮:G-FRP	
主 要 搭 載 機 器	自律制御装置	CPU、各種IF
	動力源装置	リチウム・イオン二次電池
	推進装置	スラスター(主1、水平2、垂直2)、縦舵、横舵
	重量・浮量調整装置	注排水装置、パラスト離脱装置
	航海装置	慣性航法装置、ドッブリソナ、前方ソナー、高度ソナー、深度計、SSBL測位装置、トランシーバー、DGPS装置
	観測装置	CTD、TVカメラ、投光器、(その他目的により入替え可能)
	通信装置	音響通信装置、無線装置、光通信装置 (UROV専用)、(UROV=Untethered Remotely Operated Vehicle) 水上から光ファイバーケーブルで遠隔接続するシステム
	水中ドッキング装置	捕捉Jム、嵌合機構、充電用コネクタ

[お問い合わせ先]

川崎重工業株式会社

〒105-6116 東京都港区浜松町2丁目4番1号

(世界貿易センタービル)

海洋・開発営業部 Tel: 03-3435-2186

神戸工場

〒650-8670 神戸市中央区東川崎町3丁目1番1号

業務部営業グループ Tel: 078-682-5150

潜水艦設計部海洋開発グループ Tel: 078-682-5119

● 海外ニュース

オーストラリア救命筏システム（LSA）*

—急速・安全避難の努力—

(その1)

Incat 社

オーストラリア救命筏システム（LSA）社は1992年9月の創業以来、長期に渡ってきた。帆布倉庫の2階から出発し、作業者10人で Hobart's Evans Street の漁網倉庫の2階になり、LSA 社は今日45人の作業員を抱える業界のリーダーになった。

LSA は当初国際的高速フェリー市場の需要に合わせるように作られた。更に大型高速の旅客・カーフェリーに対する要望がより早く軽い脱出装置（MES）にたいする需要を引起した。LSA はこの需要を MES と共に造船所に供給する体制に入ったが、これは従来利用していた装置より早く軽いというだけでなく、乗艇プラッ

トホームを必要とせず、膨張式の脱出用スライドを通じて大型の救命筏に直接旅客が避難できる独特の性能を持ったものである。LSA の比類のない設計と技術のお陰でこの会社は世界のリーダーとして、世界中の造船所・検査当局の広範囲な使用と要求に応ずるように登場することになった。

傾斜した膨張式滑り台装置は LSA によって設計製造され、市場で利用されている他の装置よりも多くの利点を持っている。これは老若を問わず、身体障害者・怪我人を問わず、制御された安全な速さで退出することが出来る。この滑り台はまた縄梯子で船上に人を連れ戻すために使用することも出来る。これは垂直に降りるショートでは不可能であり、特に他船が危険状態にある時に、救助に行く場合極端に有利なことを証明出来るのが特長である。

当初のころ

駆け出しの会社として、LSA の最初の顧客は、緊密なタスマニアの Incat 社であった。しかし、良好な評判が世界中に広まると、LSA 社の顧客基盤は急速に増大し、今日では Incat 社他のオーストラリアの会社および多数の世界中の造船所との連携を通じ、LSA 装置は世界中の各種高速フェリーで見出すことが出来る。

1993年4月、最初の100人乗り救命筏と14 m の避難用滑り台が製造され操作出来るように装備された。LSA MES と共に取付けられた第1船は Incat 社が建造した Stena Sea Lynx (031) であった。英国に到着してすぐ、第1回の避難テストが実施され、107人の人が船から5分35秒で退避した。MES の最初の運転及びシステムの引続く膨張から、全員が滑り台を下りるまでちょうど3分27秒かかった。

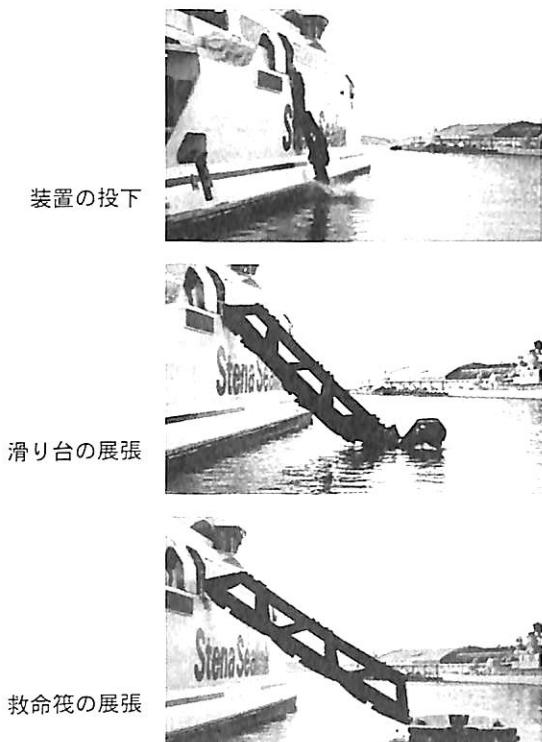
LSA MES の主要利点は、大きな救命筏、重量と甲板面積の節約、削減した乗員とサービス費用、これらはすべてより早くより安全な乗客



滑り台と下方の救命筏



● 海外ニュース



と船員の避難に更に引継がれた。1995年に最初の避難テストがより大きなMESと共に、西オーストラリアのHendersonで行われ、約188名の人が11分58秒で避難した。1997年に14 m の避難スライドで計測試験がスペインで行われた。2隻の128人乗りの救命筏が10分45秒で228人を避難させた。翌年更に進展があった。Hobartにおける試運転で、14 m の避難用滑り台と3隻の100人乗り救命筏で300人の人が14分50秒で退避した。スペインのTenerifeで1998年、100人乗の救命筏に17 m の滑り台を使用し、4分8秒で退避し、この年のイタリアのMessinaの退避試験では、14 m の滑り台と100人乗の救命筏で100人の人が3分47秒で退避した。

成長と発展

LSAにおける連続成長で新しい目的の工場が、1994年正月 Prince of Whales 湾に建設された。オーストラリア海事安全局の承認と共に、英國・イタリア・ギリシャ

およびEUが型式承認し、会社はその発展の次の段階に入った。ISOの9002証書とともに、LSAはその努力に対しTasmaniaの小企業賞を受けた。

注文が増えると共に、更に多くのスペースが要求されることが明らかになった。そこで1997年7月、Prince of Wales 湾の拡張が行われ、生産工場・倉庫・中2階を3倍にした。高速フェリー産業がブームになった時、LSAの予測と革新的設計でよい結果が得た。増加する賞賛のリストに加えて、ISO9001証書を得て、最初の海外直接注文がスペインのBazanからあったとき、会社は年間中小製造業者に対するTasmania輸出賞を獲得した。

他の造船所が高速の争いに入ったとき、LSAの注文書は建造所と船主を満たし続け、高速フェリーの生れ故郷 Hobart に確実に戻ってきた。1999年には最初のRodriquez(イタリア)の設計の単胴設計が LSA MESと共に取付けられたが、一方2通路退避滑り台がギリシャ最大のフェリーオペレーター Minoan Flying Dolphins 向けに開発された。

成長する高速フェリー産業に資本投下するのは早かった。これは新造船の装備品供給のみでなく現存船のLSA MES設備を再装備するためにも、拡大された。拡大するLSA事業の国際成長性を示すため、年間売上の50%がオーストラリア外の造船所とフェリー運航業者からきており、製造は会社の設立以来毎年平均100%ずつ増加している。製造の最初の年(1993)に対する全売上は100万オーストラリア\$であった。2000暦年に對し、全売上は1,000万オーストラリア\$を超すと期待されている。

高速フェリー産業が発展し続けるので、LSAはその救命システムを探求開発し続けている。LSAの物語の第2話は自動復原筏と2路線避難滑り台及びこの産業の将来について述べる。

* LSA : Liferaft Systems Australia

フィリピンの高等海事訓練サービス

世界最大の船員供給国の一であるフィリピンで、最近船員訓練のための新しいサービスセンターを開設した。マニラにこれを設立することによって、多くの海事大学や有名な訓練センターの間で、ノルウェーの Leknes に本部のある Poseidon Simulation 社はフィリピンにある45社以上の会社と協力関係を拡大してきた。

フィリピンの新しい Poseidon 支社は、IMO STCW 95基準による命令として、その国の異なった海事公共機関に対し、品質訓練システムを持つ必要性の高まりに備えることになる。

Poseidon 社の Richard Sandnes 常務は「この拡張によって、マニラ分室はさらに戦略的で、便利な場所になり、フィリピン国内の海事センターに更に接近することになる」と発表している。

マニラの Poseidon 社は新事務所の開所式を行い、駐フィリピン Inga Magistad ノルウェー大使およびノル



▲ Poseidon 社 新事務所開所式

ウェー訓練センター常務 Capt. Ivar Thomasli によってテープカットが行われた。式は海事産業界、Poseidon 社の顧客・友人等各界の著名人が参列し、多くの国際海事出版物には有意義な出来事として報道された。

【お問い合わせ先】

Poseidon Simulation AS,

P. O. Box 89, N-8376 Leknes, Norway

Tel: +47-76 05 43 30, Fax: +47-760-82006

www.poseidon.no info@poseidon.no

高速救助艇の進水回収装置（浮ドック式）

スウェーデンに本社のある MSS Marine Safety Systems AB 社は最近高速救助艇用の特許進水回収装置を発表した。

落下試験、側面衝撃試験および海上での 8 ノットのドッキングを含めた海上公試が、成功裡に終了し、開放海面状態における懸案を立証した。

SOLAS 規則 (1997, part B, Chap III, Reg24-1-3.1) によって、すべての RoRo 客船は“厳しい逆天候”の中で使用するための進水回収装置と高速救助艇を装備しなければならない。LAS コード (救命装置) に準拠すれば、これは最低ビューフォート 6 と有義波高 3 m を意味する。

今日使用出来るこの進水回収装置とはダビットと、艇につける補足用の重量フックの 1 点吊りからなっていて、静穏な海上以外は人体に重傷を与える危険を孕むものである。

高速救助艇を荒天中の開放海面で安全に早く容易に、進水させ回収するために、MMS Marine Safety Systems 社は浮きドックを開発した。浮きドックの動きは艇の動きに同調している。浮きドックは進水させ、1 点吊りか更に安定した 2 点吊りで、通常のダビットかクレーンで艇と一緒に回収する。浮きドックから進水し、浮いている間にロックは外され艇は離れて自力でドックに入る。

浮きドックは吊り上げ索だけでなく、もやい索も使い船に沿って曳かれ、船に連結されるが、これは開放海面で速力を出して安全に回収作業をするためには、非常に重要なことである。

● 海外ニュース

浮きドックはまた“移送方法”的要求に合致する救助プラットホームとして容易に配置することが出来、従って余分なスペースや備品は必要がないようになっている。



▲ 進水・回収装置（浮ドック）と高速救助艇 ▶

原型の浮きドックは Sea Safe Boats Sweden 社で新型 8 m 遮蔽型 Dolphin 高速救助艇とともに成功裡に試験を終わったが、もちろん異なった型の艇に対しても適合するように、各種注文生産のサイズに応じられるようになっている。

【お問い合わせ先】

MSS Marine Safety System AB,
Box 160 53, S-250 16 Raa, Sweden
Tel +46-42-26 01 40, Fax +46-42 26 01 65
E-mail: Bengt-Holm@swipnet.se,
Jan.Gronstrand@kockumseng.se
www.netservice.m.se/MSS
(becoming: www.mss.com)

● 新刊書お知らせ ●

『造船世界一に至る「船の科学」の文献目録』

「船の科学」項目別総目次(第1巻～第50巻)

(株)船舶技術協会 編

B5判・本文81頁・定価1,500円・送料210円

月刊誌「船の科学」が創刊されたのは昭和23年(1948)11月1日であり、50周年も終わりこれを区切りとし、この機会に従来発表された記事をすべて網羅した。

1. 新造船解説、2. 論文と解説(一般),
3. 論文と解説(船体関係), 4. 論文と解説(機関関係),
5. 所感・随筆, 6. 連載記事, 7. 定期的掲載項目に大分類し、更にそれを8～36の項目に中分類して、これを項目毎に年代順に記述し、その巻一号を記載したものであります。

従って海運・造船・海洋その他項目別に索引することが出来、また著者別にこれを検索することも出来ます。

当時はまだ戦後の混乱期が続き、計画造船が始まったばかりであり、船の建造量が世界一になるとは予想もつかない時期がありました。この時にいち早く「船の科学」を創刊された諸先輩の慧眼に驚くと共に、造船世界一に至る施策・経営・創意・努力の跡が一冊一冊に込められています。船の建造に関する文献目録として、座右に置いて活用されることを期待しています。

発行所 株式会社 船舶技術協会 振替口座 00130-2-70438 電話 (03) 3552-8798

〒104-0033 東京都中央区新川1の23の17(マリンヒル6F)

当社元代表取締役 高柳武男氏 訃報

高柳武男前社長が21世紀を待たれず、11月22日に急逝された。

胃の手術をされてから、少し痩せられたようであったが、学士会の午餐会などにも出席されて、お元気のようにお見受けしていたが、ご自宅で急性呼吸不全で亡くなられた。

11月26日にはカトリック成城教会で、莊厳な葬儀ミサが行われ、ご親族・友人・知己の方々が多数集まられ、お別れの式があった。

前社長は大正8年10月12日金沢でご出生、旧制第四高等学校を経て、昭和16年12月東京帝国大学工学部船舶工学科を卒業され、直ちに三井造船株式会社に入社、下記の役職を務められた。

昭和42年10月	船舶事業部船舶基本設計部長
昭和46年7月	理事
同 8月	技監
昭和47年10月	プロジェクト事業本部長
昭和48年7月	開発本部副本部長兼システムプロジェクト ト室長
昭和49年5月	取締役 千葉造船所長
昭和53年6月	船舶海洋プロジェクト事業本部長



昭和54年6月	監査役
昭和55年12月	日本海重工業(株) 代表取締役社長
昭和62年6月	退任
昭和63年9月	(株)船舶技術協会 代表取締役社長
平成4年9月	退任 同社監査役
平成6年9月	監査役退任

前社長は学生時代ボート部の選手をされていたそうで、頑健な体格で、豪放磊落な一面に緻密繊細な神経を持ち合わせていた。

退任された後は、お好きな絵を描かれ、日曜日は敬謙なカトリック信者として、奥様と共に礼拝を欠かされなかった。

まだまだご指導を頂かねばならないところが多かっただけに、急逝されたことは返す返すも、痛恨の極みである。

謹んでご冥福をお祈りする次第である。

株式会社船舶技術協会
代表取締役 濱村建治

2000年版 船舶写真集

B5版・289頁・上ビニール装・定価6,500円（税込）

（送料340円）

1992年版（第14集）発刊以来、久々に写真集が発刊されました。

内容は本誌1992年4月以降2000年5月号までに掲載された船舶の中から、国内船・輸出船別に、船種・船の大きさ等を考慮して150隻にまとめ、その写真と要目を掲載しました。

また付録Iとして主要船舶88隻の一般配置図を収めてあります。

更に付録IIとして、何れにも掲載出来なかった船を含めてこの期間中の船舶1,139隻の船名・船主・建造所・総トン数などの一覧表を巻・号と共に追加してあります。

株式会社 船舶技術協会
振替口座 00130-2-70438 電話・Fax. 03(3552)8798

< 第228回 >

第45回海洋環境保護委員会（MEPC45）の結果について

(その2)

国土交通省海事局

標記会合は、平成12年10月2日から6日にかけてロンドンの国際海事機関（IMO）本部において開催され、我が国からは30名以上の代表団が出席した。

今次会合における主要課題（現存シングルハルタンカーのダブルハル化促進）に関する審議結果は、以下のとおりである。

ポイント

シングルハルタンカーをフェーズアウトし、ダブルハル（2重船体）化を促進するMARPOL（海洋汚染防止）条約の改正案が議論されたところ、基本的合意が得られ、今後は、来春の第46回海洋環境保護委員会（MEPC46）で採択、2003年1月1日より施行の予定である。

現存のシングルハルタンカー中の太宗をしめるカテゴリー2のタンカーに対しては、古い船齢（原則25年）から順次フェーズアウトし、2015年又は2017年1月1日までに完全にフェーズアウトするというもので、我が国の主張は相當に認められたものとなっている。

(1) 経緯、概要

昨年12月、フランス西海岸沖で起きたタンカー「エリカ号」事故では、船体折損により1万トン以上の重油が流出し、フランス沿岸に重大な海洋汚染の被害を与えたため、EC（欧州委員会）及び欧州各国は、現存シングルハルタンカーをフェーズアウトし、ダブルハル（2重船体）化を促進する案をまとめ、IMOの対応次第では、地域規制を行う姿勢を見せている。

原油等を輸送する一定規模以上のシングルハルタンカーについては、MARPOL（海洋汚染防止）条約により、フェーズアウト又は船体2重化が義務づけられているが（油流出に対する一定の防護措置が講じられている船舶は船齢30年まで使用可能であり、現在最も若いものは2026年まで使用可能）、今回のフランス等欧州各国による提案は、最終年限を2008年又は2010年に前倒ししようとするドロスティックなものであり、国際海運界における最重要問題となっている。

本事故を契機として、海上安全及び海洋環境の重要性が欧州のみならず世界的に再認識され、7月の九州・沖縄サミットでも、「G8各国は、海上安全及び海洋環境保護に関するIMOの努力に協力する」ことが合意され、共同宣言にも盛り込まれた。

(2) 我が国の対応

我が国は、1997年1月のナホトカ号事故により深刻な海洋汚染被害を受けたため、事故直後から原因究明を行い、タンカー事故の再発防止のため、IMOに対し条約改正を含む様々な提案を行い、既にその多くが合意を得ている。

今回のエリカ号事故による欧州からの提案は、未だ最終的な事故原因が明らかにされていないが、老朽シングルハルタンカーのフェーズアウトを促進するという点には原則賛成できるため、我が国は先進海運造船大国としての責務からも本件に対し前向きに取り組んできた。

しかし、欧州諸国の提案によれば、船齢28年の古いタンカーの存続を2010年まで許す一方、2010年時点で船齢13年の若い船舶がフェーズアウトされるというバランスを欠くものであるため、比較的若い船舶を保有する我が国としては、船齢制限を25年に抑えるとともに、最終年限についても、船齢が20年に達する程度には使用できるようにすべきとの立場をとっている。また、短期間に大量のタンカーがフェーズアウトされた場合、海運マーケットが船腹不足に陥る危険性があり、ひいては石油の安定供給に影響を与える可能性もあることから、我が国は経済的影響及び世界の造船能力等に関する調査を行い、IMOに提出するなど、IMOにおいて合理的かつ現実的な改正案が合意されるよう努力している。

(3) 審議結果概要

今次会合で合意されたMARPOL条約の改正案骨子は次のとおりである。

▼ フェーズアウト実施スケジュール

Category of oil tanker	Date by which ship shall comply with regulation 13 F	
	Alternative A	Alternative B
Category 1	1 January 2003 for ships delivered in 1973 or earlier 1 January 2004 for ships delivered in 1974 and 1975 1 January 2005 for ships delivered in 1976 and 1977 1 January 2006 for ships delivered in 1978, 1979 and 1980 1 January 2007 for ships delivered in 1981 or later	
Category 2	1 January 2003 for ships delivered in 1977 or earlier 1 January 2004 for ships delivered in 1978 1 January 2005 for ships delivered in 1979 1 January 2006 for ships delivered in 1980 1 January 2007 for ships delivered in 1981 1 January 2008 for ships delivered in 1982 1 January 2009 for ships delivered in 1983 1 January 2010 for ships delivered in 1984 1 January 2011 for ships delivered in 1985	
	1 January 2012 for ships delivered in 1986 and 1987 1 January 2013 for ships delivered in 1988 and 1989 1 January 2014 for ships delivered in 1990 and 1991 1 January 2015 for ships delivered in 1992 or later	1 January 2012 for ships delivered in 1986 1 January 2013 for ships delivered in 1987 and 1988 1 January 2014 for ships delivered in 1989 and 1990 1 January 2015 for ships delivered in 1991 and 1992 1 January 2016 for ships delivered in 1993 and 1994 1 January 2017 for ships delivered in 1995 or later
Category 3	1 January 2003 for ships delivered in 1974 or earlier 1 January 2004 for ships delivered in 1975 and 1976 1 January 2005 for ships delivered in 1977 and 1978 1 January 2006 for ships delivered in 1979 and 1980 1 January 2007 for ships delivered in 1981 1 January 2008 for ships delivered in 1982 1 January 2009 for ships delivered in 1983 1 January 2010 for ships delivered in 1984 1 January 2011 for ships delivered in 1985 1 January 2012 for ships delivered in 1986	
	1 January 2013 for ships delivered in 1987 and 1988 1 January 2014 for ships delivered in 1989, 1990 and 1991 1 January 2015 for ships delivered in 1992 or later	1 January 2013 for ships delivered in 1987 1 January 2014 for ships delivered in 1988 1 January 2015 for ships delivered in 1989 and 1990 1 January 2016 for ships delivered in 1991, 1992 and 1993 1 January 2017 for ships delivered in 1994 or later

フェーズアウト実施スケジュール（別紙参照）

○カテゴリー 1

(1982年までに建造されたシングルハルタンカーに相当)
2003年1月1日より2007年1月1日にかけて船齢の古いタンカーより順次フェーズアウト

○カテゴリー 3

(従来条約の対象外とされてきた小型の現存シングルハルタンカーに相当)
5000 DWT以上のタンカーを2003年1月1日から船齢の古いものより順次フェーズアウトし、最終年限を2015年若しくは2017年とする2つの選択肢。

○カテゴリー 2

(1982年から1996年までに建造されたシングルハルタンカーに相当)
2003年1月1日より船齢25年に達したタンカーよりフェーズアウト。2012年からは、フェーズアウトされる毎年の船腹量をある程度一定にするため、船齢制限を24, 23, 22, …と減少させ、最終年限を2015年若しくは2017年とする2つの選択肢。

今後の予定

フェーズアウトのスケジュールについては選択肢が残されており、来年4月のMEPC46（第46回海洋環境保護委員会）における最終的な審議の上、条約改正案が採択され、2003年1月1日より施行される予定。

(文賀・平方 勝)

平成12年度（12年11月分）建造許可集計

運輸省海上技術安全局

区分		4月～11月分				11月分			
		隻数	GT	DW	契約船価	隻数	GT	DW	契約船価
国内船	貨物船	5	49,600	28,280		0	0	0	
	油槽船	3	10,405	15,394		0	0	0	
	その他	2	23,000	11,000		0	0	0	
	小計	10	83,005	54,674		0	0	0	
輸出船	貨物船	169	5,372,450	8,442,217		14	484,700	752,120	
	油槽船	46	2,274,738	3,281,336		3	213,300	318,600	
	その他	0	0	0		0	0	0	
	小計	215	7,647,188	11,723,553		17	698,000	1,070,720	
合計		225	7,730,193	11,778,227	623,721百万円	17	698,000	1,070,720	46,671百万円

●編集後記●

21世紀の新年おめでとうございます。

リタイアした青函連絡船4隻の別れの汽笛によって20世紀と訣別し、省庁再編によって海上安全技術局は国土交通省の中の海事局として新発足することになった。

明治維新以来といわれるこの省庁再編は海運造船関係者にとっては極めてドラスティックな変化であるが、改革の意図以上に、21世紀に進展することが期待される。

差当たって新規開発はテクノスーパーライナー(TSL)およびメガフロートの実用化が続けられている。

TSLについては既に実験船の段階から静岡県総合管理公社のTSL防災船/カーフェリーとして改造し、船名も「飛翔」から「希望」に改め、実用化への実績を積み上げてきており、既に上海航海も終了して、実用化への船出を待つばかりになっている。

しかし企業として成功させるには、採算性の予測が重要であり、ニーズのある航路によって、コンスタントな顧客に恵まれる必要がある。これが疎かになると、アクアポリスの悲運を繰り返すことになる。

次にメガフロートについては、充分な飛行実験によって洋上空港としての実用性は確立されており、米軍の訓練施設の代替機能や羽田空港の拡張用とか、また海上のIT基地としての集中管理施設としても期待されている。

国土狭隘な我が国としては、オランダが国土を造っていったのと同様に、洋上都市への活用が期待される。

その他海事産業のIT革命とも目される「造船ウェブ(仮称)」の発足が3月に予定されている。造船産業・海事産業とのIT連結によって、高速化・効率化が図れるようになされている。このシステムがもっと他の産業にも、また他の国とも交流が図れるようなものとなり、日本が孤立化しないようなシステムとして発展していくことを期待したい。

一般には環境問題・ゲノムが今世紀初頭の大きなテーマとされているが、海洋開発もそれに劣らぬ大きなテーマである。海洋・海底資源の開発、海洋エネルギー開発、海洋スペースの利用など、まだまだ21世紀に引継がれた夢は果てしないものがある。

☆予約購読案内 書店での入手が困難な場合もありますので、本誌確保ご希望の方は直接協会宛お申込み下さい。バックナンバーも備えてあります。

予約金 [6ヶ月分 8,200円
税込 [1ヶ月分 15,800円

国土交通省海事局監修 船の科学
造船海運総合技術雑誌 第54巻 第1号 (No.627)

◎禁転載 第54巻 第1号 (No.627)

発行所 株式会社 船舶技術協会

〒104-0033 東京都中央区新川1の23の17(マリンビル)

振替口座 00130-2 70438 電話・FAX 03(3552)8798

平成13年1月5日印刷 [昭和23年12月3日]
平成13年1月10日発行 [第3種郵便物認可]

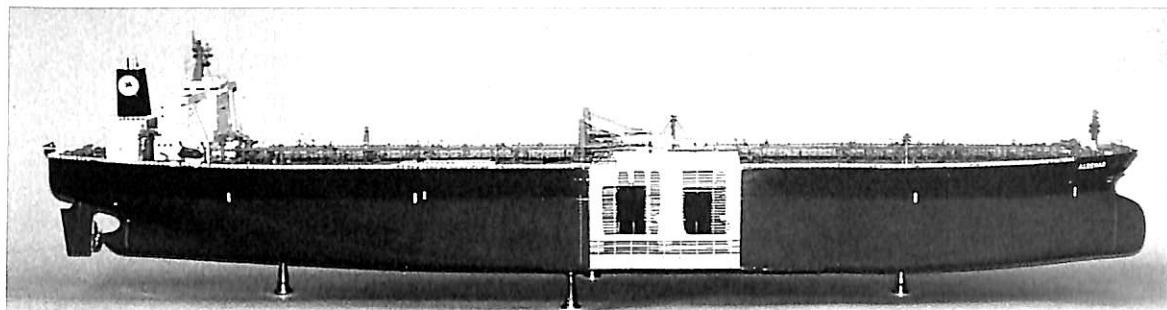
(本体1,352円) 定価 1,420円 (税92円)

発行人 濱村建治

編集委員長 米田博

印刷所 株式会社 タイヨーグラフィック

—謹 賀 新 年—
進水記念贈呈用に
不二の船舶美術模型を

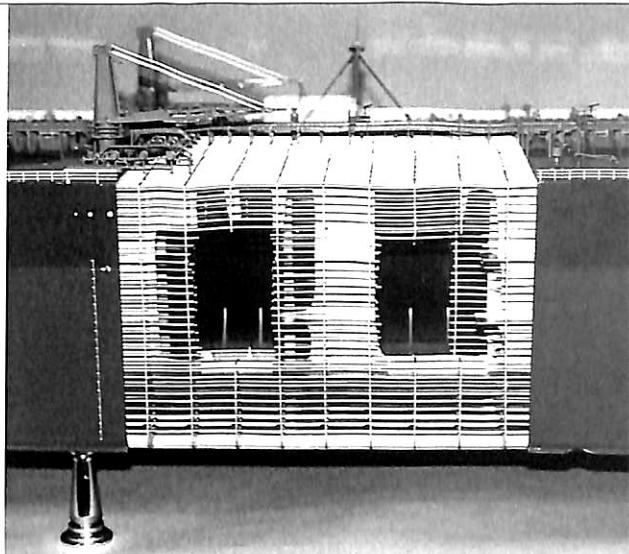


300,000 DWT
油タンカー

M/V "ALREHAB"

ダブルハル構造

S = 1/200



発注先：住友重機械工業株式会社

株式会社 不二美術模型

代表取締役社長 桜 庭 武 二

〒179-0075

東京都練馬区高松2丁目5の2 TEL.03(3998)1586
FAX.03(3926)7202

昭和平成二十三年十一月三十五日第三種郵便物認可

船の科学

定価
本体
一四二〇円
一一五二円

東京都中央区新川一丁目三十一七(マリンビル)
株式会社
○船
三五五
八七九
八
電話
技術
協会

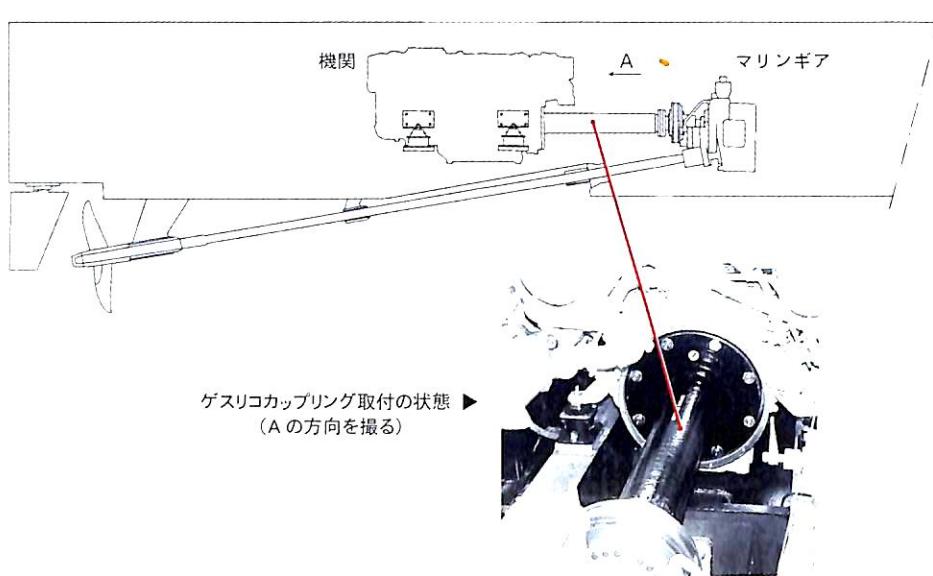
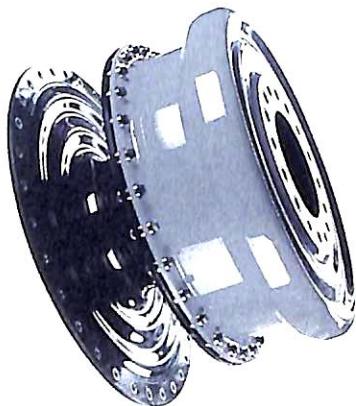
新世纪へ ゲスリコ製品！

舶用推進軸系製品(継手・軸)に、複合材料(Composite Material)が使用される時代が到来しました。

ゲスリコ製品(GESILCO)は、従来の金属製継手・中間軸等に代わる製品です。

GESILCO=GEISLINGER SILENT COMPOSITE

- ゲスリコカップリング
(定格トルク 最大140 kNm)
- ゲスリコシャフトライン
(定格トルク 最大700 kNm)



新潟コンバーター株式会社

〒330-8646 埼玉県大宮市吉野町1-405-3

TEL (048)652-6708(舶用営業部) FAX (048)652-8719

URL <http://www.niigata-converter.co.jp>

